

Li-tweet

2013 autumn

イコ

る

加津也

6

常磐誠

緑川

Rain坊

うさぎ

小野寺那仁

安部孝作

あんな

日居月諸

深街

特製

新しい文学へむかって



小説や詩はそれ自体を明確に定義されないうまま、つねに有象無象の書き手たちによって「新しさ」を更新してきました。これまでにないものをこれまでの系譜からつむぐ行為は小説や詩にとって不可欠な行為だと信じます。

そこで本号の特集名を「新しい文学へおかって」というタイトルにさせてもらいました。新しさの定義については書き手とそれを読んだ読み手にお任せします。これまでになかったもの・これまでに書いたことがないものを描く機会をもってもらうために本号を全力でつくりたいと思います！そして「新しさ」とは何か。創作の新しさなどは新しい作品を発表することでしか生まれたい、そんなご意見もあるかと思いません。しかし本号はみんなですれについて考える機会を持ちたいと思っています！

目次

・特集『新しい文学へむかって』

句集「夜食」：イコ

七

詩「詩三篇」：る

十二

詩「手」：加津也

二二

小説「アンファンテリブル」：崎本智（6）（七十四枚）

三一

小説「言葉遊び」：Rain坊（六枚）

九八

小説「意思のゆくえ」：小野寺那仁（十七枚）

一〇二

小説「黒い秋の訪れに」：安部孝作（三十四枚）

一一二

・自由投稿

小説「ファイナルファンタジー」：うさぎ（五十二枚）

一三八

詩「マーシャル諸島を目指そうよ」：る&深街ゆか

一七四

詩「たべられたい」：深街ゆか

一七七

小説「天使のはしご」：Rain坊（六十三枚）

一七九

小説「終日杳かに相同じ」：日居月諸（五十六枚）

二二六

・連載

常磐誠「I believe your brave heart」（第三回）…

・読書会・対談・その他

岡山オフレポート：6

二六四

座談会「小説と詩の恍惚をめぐるって」：6

二七二

堀辰雄「菜穂子」読書会：イコ

二九六

尾崎翠「第七官界彷徨」読書会：6

三〇六

イ子の部屋：イ子

三二四

・ 記録

三六六

・ 編集後記：6

三七四

特集 『新しい文学へむかって』

待つ人の団扇の柄を眺めけり
がら

遊ぶ子の声どこへやら油照り

かなかなや溝に頭を落としをり

蚊に巻かれ手足くねらす子どもかな

ふるさとの天井のしみ盂蘭盆会

尻先を振り立て死ぬる雀蜂

鉄塔をみつめる君の野分かな

妻梨をもぎに家から出て行きぬ

印刷の音の聞こえてゐる夜食

月光の泳いで行くや瓦波

詩三篇

「詩三篇」 る

ワイパー

こめかみにチエルシーを装填したから
引き金をひいたらとても素敵だ、なんて
そんな聖なる人みたいないな真似をしないで

僕のあだ名はワイパーだった

ワイパー的な動きをするからワイパーだった
ワイパー的な動きってなんだよ、ってきいても
そんなん誰も知らなかった

指でピストルの形を作る

君の、その、聖なるものっぽい涙を
ワイパー的な動きで、とか

詩三篇

言いそうになつたら引き金をひいていい

現実には果てしなく残酷でした

その夜、聖なるものっぽいダイヤモンドを

君の指に嵌めることによつて

君は聖なる真似ごとをせずに笑つた

そして君が極めて個人的に死んだ朝に

極めて個人的に鶏が鳴いていて

そのうちのなん羽かがチャックベリーで

極めて広大なはずの朝という空間で

いつまでもいったりきたりしているってわけ

詩三篇

蝸牛

たくさんの蝸牛が零れてしまった

飲みかけのホットミルクの熱いため息が

角膜を曇らせるから、ゆるゆると

水よりも少しだけ硬いものになりながら

フローリングに右手の中指が垂直に着水した

そのまま肩甲骨まできれいに輪郭を失ったとき

冷たい、と感じた

わたしは、ではなく、わたしを。

その微細な振動で机から転がり落ち

視神経の裡、蝸牛の内臓が詰まった殻が骰子のように

転がり、止まった、誰かの運命を決めるみたいに

「それは予め決まっていますので」

詩三篇

そういう観念がわたしを無理やりに律動させている
散らばった脳みそが冷たくなったフローリングの上
ひとつひとつが水銀のように孤立し、そう思考している
散らばった表情が、まるで赤の他人の
資産運用の話が聞かされておきみたいに
しらけて微笑んだり、強張ったりして

それらはひたすら零れた蝸牛を掻き集めている
それは予め決まっていることだと言わんばかりに
それぞれが律動し、小さく大きく纏まってゆく
剥き出された鼓膜に蝸牛が這い出したとき
ひとつの声帯と、もう半分の声帯が蠱惑的に身を振る

蝸牛を圍繞するそれらの内部で
蝸牛もまたひとつに纏まってゆく
それはやがて自立し、冷たい、と発声する
カシューナッツを飲み込むような簡単な素振り

詩三篇

フローリングに転がり、頑なに止まった骰子を
飲み込む、喉の奥であえかに痛みが伝導した

その痛みを和らげてしまうために

冷めてしまったミルクを飲み干す

マグカップの傍でたくさんの殻が転がっている

片付けるには眠すぎたので、そのまま照明を落とし

寝室へと向かった

詩三篇

はんどん

もう少しだけ待ってと言った

世界を

じゃなくて返済を

ところでアンコちゃんはどうしただろう

窓ガラスが割れている

割れているからよく聞こえる

世界が

じゃなくて返済が

わたしを待ってくれないこと

椎の実とそのほかの食べられないドングリを

選り分けながら

ピン、と背筋を伸ばして

アンコちゃんは椎の森へ消えた

詩三篇

わたしはドングリを拾った
椎の实の見分け方をしらなかったから
ときどき苦い顔をしていた

ヘミングウェイは『日はまた昇る』の
蝦をえんえんと食べるところが好きです
理由ですか？

蝦はだって、食べられるじゃないですか
それこそえんえんと、えんえんと、
食べられない蝦なんてないくらいえんえんと

どんぐりころころころころ
って歌しってる？

返済も

じゃなくて世界も

蝦だけ食っていられば、とか

ひとごとみたいに、考えています

詩三篇

アンコちゃんへ

今日うちの窓ガラスが全部割られました。
ガラス片の散らばり具合から判断するに、
うちの馬鹿息子ではなく、取立てが、
割ったんだと思います。

ちなみにうちにエスパールはいません。

ところでそちらは元気でしょうか。

死ぬとやっぱり輪廻とかするんですかね。

それとも魂ごといなくなってしまうんでしょうか。

だとしたら少し寂しいです。

わたしは相変わらずときどき間違えてドングリを食べて
苦い顔をしたりしてます。

Bonus track

怪物くん

背の高い葦を通り抜けて

白い菊花を運んできたのは

この風のしわざか、と

頬にそよ吹く冷たい5月

あんなおどろおどろしい沼地の横に

夢みたいな白い草原が咲き乱れて

その往來を閉ざす葦は

いじわるな老婆みたいでした

昔っからあの沼には

何かこの世ならぬものが住んでいるって

お母さんも、お婆ちゃんも

いっていたけれど

詩三篇

わたしは白いフランス菊の横に腰を下ろして
その沼の怪物のことを思う

この花のことを思う

わたしの恋のことを思う

例えば

この草原がさよならさんで

あの沼地がおやすみさんで

二人は同じ夜を眠れないとしたら

葦の隙間からもう一度一条の風

通り抜けて白い花を揺らした

花びらが一つだけほつれて

青い空の彼方にすいこまれていく特集 戯曲

手

加津也

手

手の、指先、このへんが冬になるといつも割れて、冷え性なもんで、冬になるとつま先はしもやけ指先はあかぎれで、爪の縁の肉が、ぱっくり。水仕事のせいなのでしょうか、奥様向け雑誌の大掃除特集にはビニール手袋を着けよと書いてありますが、指先のきれいな方々は本当にそんなことをしているんでしょうか。私の手入れが至らないのか、それともただの体質なのか。ダイソーでは使い捨て十枚入りが百円で手に入るけれど、水仕事のたびに手袋を着ける心の余裕を、細やかさを、私はあいにく持ち合わせておりません。

母も、祖母も、割れた指先をしています。うちの、父方の、同居の祖母は家の裏の水道でゴム長靴を履いてさといもを洗っていた。バケツ半分まで入れたさといも、そのバケツを水で満たし、バケツの幅より少し短い板きれを突き刺しごり、ごりと回し、回し、どろをそぎ落とし水を捨てまた水を入れ、ごり、ごりと。米のとき汁をこぼす

手

ように手を添えるので水は祖母の手を浸した祖母の手を流れた、祖母の、あかぎれのばんそうこうだらけの指先をどろのとけた水が流れて指先を黒く黒くしていく、ひび割れて乾いて皸だらけの肌はよく水を吸ったから祖母の手は、よく、染まった。

だから、ばあちゃんの手は、ばっちい。

手が、どろに染まっているから。

ばあちゃんの手は、ばっちい。

真っ黒に汚れたばんそうこうを付けているから。

ばあちゃんの手は、ばっちい。

ばんそうこうを取り変えないから。

その手で料理をするばあちゃんをばっちいと言って台所から追い出したのは母と私で、祖母はよくおそろおそろる台所を覗き込んで

もういいかい　まあだだよ　もう飯かい　まあだだよ

ねえおばあちゃんまだ三時だよもう食べるの何時に寝るつもりなのほら時計見ても指先見てよほら、朝変えたばんそうこうは一日の汚れと垢でもう真っ黒、でもご飯どきには更に黒、でもそう言う私と母の指先も割れている。

二〇一年の大晦日、帰省した実家に祖母はおらず畑で取れた野菜のどろはヒビ割れた私の指にしみこむ、乾いた大地、あるいはスポンジ、それにしみこむ天からの恵

手

み、だからこれはとても自然なことなのだと言うように手は黒ずむ、しみる、染まる、ヒビとあかぎれの指先に染みた土は、うちの畑の土だったりどこか遠くの、北海道や千葉や茨城や埼玉の農家の土、だったり。

ねえ見てよこれ、運動会の練習で毎日日焼けして日焼け止め塗っても汗で落ちるし塗り直す暇ないし子供と一緒に頑張って駆けずり回って飛び跳ねて子供追っかけ回してたらほらこんな、と腕に浮かんだシミを見せる母に私は気になんないよ健康的だよ年より若く見えるくらい、とテンプレじみた言葉を吐いて、自分の貧相な腕を見て、母の、適度に筋肉の付いた引き締まった腕を

私よりも美しい

と心底思い、三十年後、私が母の年になり今の母のその腕を持つことができたらどんなにいいかと思うのに母はそれを恥じる。日本人らしい謙遜なのか美德なのか、本気で嫌がってるのかとにかく、母は、嫌だと、醜いと、みっともないと、祖母のおむつ交換すら満足にできなかった私の細っこい腕を、若いと、羨ましいと。

こんな五年もすれば消えうせるようなものを「良い」と、母の言う、母の羨む「若さ」は、私の未来にはないのに母がそれを羨ましいと言うので

私は

「三十前に死にたいです」と

中二病じみた事を

ツイートしてしまうのです

手

つるつるでつやがあって綺麗だと祖母の手を取って父が言いました。冬、祖母は寝たきりで認知症で要介護五で私たちがいることを分かっているのか、いや反応が返って来ないだけで分かっているのだと、アウトプットはゼロに近いけれどインプットはかるうじて、十回呼べば三回分かる程度には機能しているのだとそう思わんと祖母を祖母として扱えなくなってしまう、だから十投げれば三当たるぐらいの気持ちで「ばあちゃん」と言って手を取る、私と手はがさついていてひび割れて白く粉を噴いていて、祖母の手は皺がなけりゃアトリックスのCMに使えるんじゃないかっていうくらい、つやつや。皮膚はたるんでいましたハリなんてありませんでもそれが、空気の抜けたふうせんを絹で包んだような、お蚕さんの糸で丁寧に織り上げた布のような、お蚕さんを抱いては移し抱いては移し桑の葉をやり食ってるか足りてるかと育てる、そうしてできる繭の一本一本を紡いで織り上げたシルクの、マルイの下着売り場で「極上の肌触り」というポップに釣られて手を伸ばして値段見て手を引っ込める真っ赤なランジェリーのあの触り心地、祖母の肌は手は指はその表面は

家の裏の水道でさといもをぎりぎり洗っていた手とは

まったく違う

それを、

うごけなくなつてからの祖母を、下の世話も人様に頼っている祖母の

祖母の指を

美しいと言つてしまふ思つてしまふ私だから立ち働く祖母の手を美しいと言えなかつた私だから

母の手を腕を美しいと思う、私よりも、貧弱でハリのない私の腕より手より。小学校で問題児追ひ回して運動会のおどりを教へて掃除のときに机運んでそうして付いた筋肉と皮膚に浮かび上がったシミ、それを、恥じて欲しくない。

若い頃、私を生む前、小児科で訪問授業をしていた母の前に問題児はいなかつたし日にも焼けなかつたし筋肉を酷使することもなかつた、死んでいく子供を看取つた、教え子の死に顔を撫でたかもしれない、手を握つたかも知れない、明日切断されるといふ脚を撫でたのかもしれないその子も結局逝つてしまつたと、聞いたとき私はその小児がんの少年より若かつたのに今はその頃の母の年を越えて。母は、今の私より若い、シミもない皺もない母を教え子の亡骸に触れた母の手を今より美しかったと、思つているのだろうか。

その子供たちはきつとつるんとしていたのだ今の祖母のように。五体満足に産んであげたのにと母は嘆きますいや罵ります、健常者の私だから指が割れるのですか、割れる割れると、水を搔くのが五体満足に生まれた生き物の、役目なんでしょうかお母さん

五体満足に産んでもらったのに、ね。

三十過ぎれば何ともないよ四十五も楽しいよたとえ独りでも！ と心温まるりプライもらってーDごと消えました、美しいと思う母の手を母が醜いと言うのが悲しい、いや嘘、私が、同僚の顔の化粧に透けるシミを「手入れが至らない」と思ってしまった私がシミの浮いた皺のできた母の腕を美しいと思っっているはずが、

美しいと言えるはずが、ない。

あかぎれの指先の赤い裂け目を覗き込んで上司のつるりとした手に嫉妬する私が立ち働く祖母のばんそうこうで汚れた指先を美しいと思えるはずがない、立てなくなった祖母の手を絹のようだと思ってしまった私に、祖母を美しいと、言えるわけがでも、でも、祖母の手は美しいはずなのだ本当に

父は、祖母の太い指をつまんで、農家の手だと、働きもんの手だと。

二十五の私と五十五の母と八十二の祖母の手を骨にして並べたい

太い骨をしていました焼かれたら立派な骨が残って祖父みたいに壺に入り切らな

手

く、箸で押されて砕けて蓋をするのだろうと、

そのときようやく

だけれども

祖母の手を母の手を美しいと、私の細っこい指よりも美しいと

言ってくれるはずだからそうすれば

同僚の顔のシミの化粧に透けているのを

同級生の白眼に浮いた黄色いシミを

腹や乳房や腕に浮かべた傷痕を

嫌悪し続けた私もようやく

美しいと

断言

できるのか

祖母が死んだら私は祖母の指の骨を箸で拾いたいや指で拾いたい私の指で、いや私の指の、骨で、祖母の骨をつまんで、骨と骨のぶつかりこすれる乾いた音を聞きたい、私は、私の骨はきつと細くてスカスカで何も残らないだろうその軽い骨の、箸で、私は祖母の黒い水のしみこんだ指を壺に入りたいそして箸を、私の骨であり指である

箸を、骨でいっぱい祖母の太い丈夫で健康的で美しい骨の中に、私の醜いあかぎれした指をうずめて蓋を、したい。

頭蓋骨

って、頭の骸骨だと思ってたら違った、頭の蓋の骨と書いて頭蓋骨、骸の骨の骸骨ではない、だから頭蓋骨はその名からすでにふたなのだ、そうやって私は祖母の頭蓋骨で蓋をさりたい

けれど

骨の太い祖母の壺は頭より下の骨でいっぱいそこにのせた頭蓋は壺の蓋に押し
手
れて割れてしまうから、

私と祖母の隙間は

永遠に蓋をされなくて

触れた空気で腐食してって、

溶けて、溶けて、還るの

でしようか。

※この作品は、「現代詩手帖 二〇一〇年十月号」の投稿欄に、「芦尾カヅヤ」名義で投稿したものを、一部改変して掲載しています。

初出：第二十三回朗読バー（二〇一二年十一月開催）にて朗読。

アンファンテリブル

崎本智（6）

子犬

子犬の名前はアンファンテリブル。……なんて呼びにくい名前だろう。

だけど一度決めてしまったからには名前を変えることはできない。

「名前を変えると言うことはその運命を逃れて、新たな運命に向き合うということだ。そいつはまだ世界にこぼれおちたばかり。まあこれは受けうりのくだらない理屈だが、俺もそう思っている」古代ローマ史を研究している偏屈な兄がそう言った。埃だらけの眼鏡の奥に小さな彼の瞳が見えた。

アンファンテリブルの胴にはチョコレート色のしみがうずまき状にできている。あとには古いシャツみたいなくすんだ白色の毛を生やしていた。フラフープで遊ぶのが大好きで、よくガーデンパーティーをするときなんかは大人の退屈な政治や株の話にまぎらないように、僕は特大のフラフープを持ちだして、彼と庭で踊ってみせた。僕はもうやってこいつのおかげで上手く子供を演じることができていたのかもしれない。十三歳という年齢にからだも精神もやっと慣れてきた頃だった。

街

レキシントンにほど近いファイエット郡とはどんな場所だと言えるだろう。生まれ
た頃からここに住んでいるから他の街と比べて説明することは僕にはできない。丘の
上には果樹園あり、平野にはたくさんの自動車の部品工場がっらなっている。大型の
トラックもブンブン走っている。少し離れたところには牧場が点在し、牛乳や肉がこ
の街を経由して合衆国中に出荷される。

この街を訪れたひとはきまって「肉がおいしい」という。初めて訪れた旅人もレキ
シントンの街に行けばステーキを焼く匂いに胸をうつつに違いない。肉がさほど好きで
はないひとも「果実のようだ」といって夢中になってしまうこともある。ファイエツ
ト郡には小川があちこちにながれ、魚釣りも盛んに行われていた。夜になればミミズ
クたちの合唱。狼たちの遠吠え。大きな月と鬱蒼としげる丘の上の森。森は果樹園を
囲むようにして広がっている。

そして街や森をながれる小川が最後には一本の太い運河にながれこむ。僕たち家族
の家はその運河の傍に建っていた。

霧深い朝

一九九三年六月の霧深い朝に子犬は古い木箱に入れられて捨てられていた。その木箱を兄が拾って来た時には驚いたものだ。古代史をめぐる文献にしか、興味を示さないやつだと思っていたけどそうじゃなかった。

「ジェイムズ、なんだ、めずらしく読書なんかしているのか」

言い忘れたけど僕の名前はジェイムズと言った。似合わない名前だよ。

兄は僕の本をとりあげる。

そのとき僕が読んでいた本はジャン・コクトー『恐るべき子供たち(アンファンテリブル)』だった。

蠅が優雅に旋回している。父と母は僕が見ていないとおもって一階でキスでもしているのだろう。メジャーリーグではニューヨーク・メッツとワシントン・ナショナルズの試合中継の音声がここまで聴こえている。

「やめてよ、兄ちゃん。それクロエ・ダダリオに借りたんだ」

「へえあの黒髪に……」僕の顔は紅くなる。兄はスキャンダルみたいなことにはよく鼻がきく。その癖に、みずからはまったく異性に興味を持たなかった。いつも

花屋で白い花を買ってきて花瓶にかざり、黙ってそれをみつめているか文献を読んで

いるかのどちらかだ。雨の降る日は、彼はいつも機嫌がよく霧の朝にもそれはあてはまった。クロエ・ダダリオについては後述しよう。

僕は薄汚い木箱に入った子犬に気が付いた。その視線に兄は弁解めいたように「家の前に置いてあったんだよ。お前、動物好きだろ。世話しな」と言った。

兄はすぐに部屋を出て、口笛を吹いた。口笛が止んだと思ったら廊下から「お前に名前を与える権利をやるう」と言い放った。

命名

名前を与えること——主人になること——責任を持つこと——僕は一瞬でからだがつ二つになるような気がした。「バードランドの子守唄」を口笛で吹きながら兄はダイニングへ入った。そして大量のウインナーを茹で始めた。鍋が煮え立つ音がする。茹であがるとケチャップをどばどばかけて、リビングで食べ始めた。やがて自分が満腹になると僕のためにサンドイッチ用のパンをおろしてホットドッグを作ってくれた。マスタードもぬってくれた。

溜息がもれた。この上なく美味かった。どうやら観念するしかない。いつも気分屋の兄の思い通りになってしまうのは癪だけど抵抗してもむだだ。僕は犬を飼う決意を

した。

兄は笑顔で子犬にも一本与えた。ウィンナーにおそろおそろ鼻を近づけて匂いを嗅いでいる。まるで初めて食べるように慎重だった。そして子犬はゆっくりと咀嚼した。よく見ると毛並みも整っている。食べ方にも上品なものが感じられた。僕のなかに不思議な愛着がながれはじめた。

「名前、決めたのか」兄が僕に問う。

「長いけどアンファンテリブルにする」タオルでアンファンテリブルの汚れを拭きながらそう答えた。

クロエ

サマータイムがはじまって学校の始業時間はずいぶん早まった。僕は時差ぼけしたような気分です学校に向かって自転車をこいだ。田舎だから芝生が敷かれた家が広い間隔をあけて建っている。『ダブリンアース』という緑色のロゴをつけたトラックとすれ違った。季節が夏に近づくとつれ、この地域に引っ越ししてくる人々は増えていった。『ダブリンアース』という引っ越し会社はここ数年で初めて知ったのだが、近頃、この街でよく見かける。住宅街を抜けて牧場がつづく平原をひたすら走ると少しずつ自

転車の数が増え、やがて鐘の音が平原に響きわたる。教会のような形をした僕たちの学校に到着する。同級生たちと朝の挨拶を済ませて教室に入り、牛乳を飲んでいるとクロエの姿が見えない。

「クロエは？」

クロエの隣の席であるエミリアに尋ねてみると病欠ということだった。エミリアは他の友人たちとクロスワードパズルをするのに夢中だった。エミリア、その笑顔はいつもどんなときも完璧だった。それが彼女の怖いところでもある。地理の時間がはじまって僕たちは合衆国の州について学習する。僕は教科書にアンファンテリブルの似顔絵を細密画のように細かく正確に素描しはじめた。鉛筆でこんなにも上手く書けるなんて僕は天才かもしれないとおもっていたところへ、ベッキンセイル先生からチョークを投げられる。同級生たちの失笑。他愛もない時間が過ぎていた。あの瞬間、日常はどこまでもつづくものだ。僕もクラスメイトも先生も信じていた。

話題

昼休み僕が弁当を食べているとエミリアたちが話している声が聴こえてきた。「あの子がいないとクラスの雰囲気が出るよね」エミリアがそう言った。僕はエミリア

を見る。「だってあの子がいるとき、家族の話題とかだせないじゃん。しばらく休んでおいてもらっていいよね」笑い声が教室の片隅に広がる。僕はエミリアの方を見て黙っていたままだった。エミリアは顎を手の甲にのせたままそのポーズを崩すことはなかった。クロエの祖父は街の厄介者だった。へほら吹きダダリオ」というあだ名をつけられ、昼間から酒を飲み、わけの分らない妄想をしてはそれを街の住民たちに話していた。クロエは昔からとても大人しく、学校でもみずから発言をするようなこととは殆どなかった。じつは怪物、ゾンビ、宇宙人の出てくる映画が好きで、とても真面目な性格であることを僕は知っていた。彼女にノートを借りたときにはいつもその字や線の引き方の綺麗さに驚いた。エミリアもクロエのことをある部分でしっかりと認めていたのだとおもう。彼女の存在を認めるがゆえに自分にはないところに嫉妬していたのかもしれない。こういう場面で僕はエミリアに一言言う機会をいつも逃していた。クロエの恋人でもない僕が彼女をかばうのはおかしいかもしれない。そんな馬鹿なことを考えているうちにエミリアは話題を変える。ひよっとするとエミリアは僕の反応を見て、愉しんでいたのかもしれない。

朗読

ギリシャ語の時間にエミリアが古代の詩を朗読した。感情をこめて詩を朗読する。古代詩というのは音楽と密接な関係があった。ギリシャ語の教師は平然とそう言う。まるで自分の目で見たかのように。さらにとりわけ美しい詩は吟唱されるときに音楽と共に韻律を豊かに読みあげられたと言う。エミリアの朗読は録音されたテープのようによどむことなく、単語の連なりを発音していった。ときに感情的に、ときに歌うように彼女の朗読は先生に褒められてクラスメイトからは拍手が起こった。僕は彼女の声を通してずっと昔の古代壁画のことを考えていた。彼女を見る僕の視線が霞む。あくびが出る。周りからは白い目をされる。

啼き声

校舎の裏に沼があった。沼にはアヒルが生息していた。そのアヒルたちがとつぜんぐわあぐわあと啼きはじめた。けたたましく、止むことがなかった。あまりにもうるさいから僕たちは窓を開けて何事か見ていたが狼どころか野犬の一匹もおらず、猟師たちが狩りをはじめた様子もなかった。

午睡

サクラの木漏れ日のなか舟をこいでいた。数学の時間はそうやって夢のなかで過ごすことが多い。ほら、さっきまで一緒にいたクラスメイト達が岸辺で手をふっている。僕らの真上を雲が幾条も連なり、水平線の彼方までつづいている。しるべのようにどこかへ誘う白い雲。先生が何かを伝えようと大きな声を出しているのに僕にはそれが聞こえない。「See you again!」僕はそう言って權を握る。意識は海と教室を交互に行き来する。ノートに書いた代数の文字がつつぎと崩れる。xの右下へ走る線がノートをどこまでも下に落ちていく。静かな教室、そして辺りは凪いだ海の世界へ。風もないのに波の動きは激しい。小テストがはじまったのか鉛筆を走らせる音が海にまで届いた。僕は鉛筆よりも權を持ち、冒険がしたい。幾条もの雲はやがて重なり、灰色へと様変わりする。舟はゆっくりと大きな波の谷を下りはじめると、時間が巻きもどされていくような感覚。「やめ」先生の声か、テストが終わったのか。僕は後戻りできない。しばらく波の谷を下りはじめると、いくつかの群島が見えてきた。と同時に僕は自分の目を疑う。海に雪が降り始めた。指先で溶けて消える雪。雪は海面の上に薄く積もっている。それでもちっとも寒くない。

群島の方角から裸足の少年が海の上を歩いて来て僕に問いかける。

「あの本は面白かったかい？」

僕はどの本のことか分からなかったから、首をかしげると少年は笑った。「金属の熱伝導や、白色矮星の安定性に関する基礎的な理論を知識として持っていないとあの本は読めないからきみたちにはまだ難しいかもしれない。私の考えた巨人は確率解釈に基づく数学的な見地からの創造物だからね」僕には少年の言葉が外国語のように聞こえてならなかった。

瞬きをした僕は白銀の世界から、真っ暗な暗闇のなかにひきずりこまれていく。暗闇で声がする。「起きてジェイムズ」

忘れな草の匂いが鼻をつく。ずずらんが揺れる丘で花冠をしたクロエが微笑んでいる。「え？」僕は半目で彼女を見る。「草原に横になった瞬間、眠ってしまうんだもの」彼女はまた笑う。そのとき僕の顔をペロペロ舐めるやつがいる。アンファンテリブルだ。僕はアンファンテリブルを抱きかかえる。クロエは水筒からアルミ製のカップにレモンティーを注いでくれる。

「喉渴いでいるでしょ。あなた魔されていたもの」

「クロエ、きみは花冠をつけるような趣味はなかったはずだよね」

「ええ、そう。これはあなたの夢だもの。あなたの願望よ。ほら、あの雲を見て。どんどん黒く大きくなっていくわ。あっちには祖父が眠っているの」

丘の向こうには葡萄を加工する小さな工場。工場を超えると森が続いている。森の上

空には暗雲が立ち込めていた。クロエはつづけて言う。

「祖父には祖父の願望があった。わたしは向こうの夢にも出演しなきゃいけないかったの。でもさぼってしまったの。気晴らしにあなたの夢のなかに現れてみたんだけど、まるで何も起きなくて退屈ね」

同級生が投げた消しゴムがあたまにぶつかって僕は目を覚ました。

地震

白い雲がひとつぼっかりと空に浮かんでいた。

極めて静謐な午後の時間がながれていた。「授業に集中しなさい」政治学の先生がそう言って僕たちはまたノートに視線を戻した瞬間……。床にかすかに震動し、蛍光灯が揺れる。

「地震？」

皆は机の下に避難する。やがて大きな揺れ。太平洋上の島国で起こった大地震が報道されたばかりだったから、生徒たちはすぐに安全確保に意識を集中することができた。しかし奇妙なことに大きな揺れの後にはまた静かな時間がながれる。そのあとにまた大きな揺れが走る。断続的にそれは大きくなり、小さくを繰り返す。余震が

何度も続いているのだろうか。それにしても奇妙な地震だった。短時間でこんなにも断続的に揺れる地震は誰も経験したことがなかった。家族は無事だろうか、アンファンテリブルは……。僕の脳裏を家族とあの子犬の顔がよぎる。学校は授業の振替措置をとって、すべての生徒を帰宅させる指示をだした。電話回線は混み合っておりまったく使えない物にならない。携帯電話もつながらず、とにかく自分の足を頼りに家に帰って現実と向き合うしかなさそうだった。

避難

学校周辺は平原だったから地震の直接的な被害はすぐには分からなかった。地割れや液状化現象が見られたわけでもなく、また海が近いわけでもなかったから津波の被害もない。牧柵が幾つか仆れていただけだ。僕はファイエット郡へ帰宅する方向の下級生を集めて一緒に帰ることにした。

「暑いけどヘルメットをかぶって帰宅しよう。そして皆、水分を大事にすること。いつ補給できるかわからないからな」

そう言って僕は先頭に立ち自転車をこいだ。積乱雲が澄みきった青空にソフトクリームのように浮かんでいた。何でもない夏の日の一ページのようだった。けれど下級

生たちも含めて僕たちはおだやかではなかった。学校はつぶれなかったが体感としてかなりの震度が予測された。しかし携帯のニュースは一向に地震情報を報道しないふざけている。一体マスコミは何をしているんだらう……。途中僕たちはファイエツト郡の小さな集落に立ち寄った。そこは雑貨店とガソリンスタンド、それから発電所に、数軒の家があった。雑貨店に立ち寄って僕たちは情報を集めようとした。店主はインディアン王冠をかぶった男で新聞紙をレジでひろげて読んでいた。

「すいません」

「どうしたんだ。血相変えて、お前たち学校は……？」

「地震により、帰宅指示ができました。さっきの地震は震度いくつですか」

「地震？」

「三〇分ほど前に起きた地震です」

「あれ、そうなのか。地震なんてオレは気がつかなかったぞ」

僕たちは顔を見合わせる。この男はあれほど断続的に大きな地震があったことに気が付かなかったのか。それとも十キロと離れていないこの場所では地震は起きなかったというのだろうか。

そのあと僕たちがいくら口をそろえて地震の体験を話したところで、男とは全く話を通じなかった。僕たちは蜂蜜入りのパンとミネラルウォーターをその店で購入して

先を急いだ。下級生たちとは少しずつ方角が異なってきた。ひとり、またひとりと別れをつける。その度、言いしれぬ不安が宿る。ついに僕は独りになる。地震は確かにあったはずなのに、途中の雑貨店やあるいは他の民家なども全く影響は受けていないのだった。幻想だったのだろうか。白昼夢だったのだろうか。僕は自転車をこぐスピードを速めた。

空に浮かぶ海

「ばかな。そんな冗談はつまらないぞ。もっと気のきいたことを言えよ」
病院事務をはじめて三カ月のキーロン・ベルクは休日、友人のロイス・フラデークと日あたりのよいオーブンカフェで談笑をしていた。

「きみは疲れているんだろう。よく眠ったほうがいい。仕事を変えたばかりだから気付かないストレスに蝕まれているんだろう。僕の主治医を紹介しようか」

ロイスは襟に緑のラインが入った白いポロシャツを着て、黒ぶちの眼鏡をかけている。彼はときどき眼鏡のフレームを整えるのが癖だ。

「いや、僕は疲れてもいなし寝ぼけてもいない。酒は飲むが探鳥をしているときに酒を飲むことなんてないのはおまえも良く知っているだろう。運河からいつも通り支

流にはいり、森に生息する鳥を見るつもりだったんだ。白い鳥を見たところ、近所の少年——アレックス——から聞いてね。それが何なのかを見るために森に入ったんだ。この森の鳥については良く知っているつもりだったんだがアレックスから聞いた限りの特徴では僕の記憶の図鑑にあてはまる鳥がない。だから自分の目で見てやろうと思ってね」

「それで白い鳥はみつかったのか、キーロン」

「みつからなかったんだ。その代わりにみつけたのが、例のやつさ。ロイス、これは賭けてもいい。デトロイトから取り寄せたばかりの新車を賭け金にしてもいいさ」そこへスタイル抜群の黒人女性が二人の前を歩き過ぎる。その女性が前を通る間二人はすっかり見とれてしまい、無言になる。そして我にかえるキーロン。

「おまえは……」キーロンの言葉をふさぐようにロイスが重ねる。

「僕にはまだ信じられない、空に海が浮かぶだなんて。おとぎ話じゃないか」

再会

「ジェイムズ！」大きな声に呼び止められる。

「クロエ……？」

そこに立っていたのはまさしくあの黒髪のクロエ・ダダリオだった。東洋的な顔立ちをしている瞳の大きな少女。

「フロスト地区のお家に帰るんでしょ」

クロエはいつも真面目な顔をしているが、今日は特に真剣だった。

「きみ、病欠したんじゃない」

「風邪なら治ったの。それより家に帰らないで」

「どうしてさ。きみこそ、こんなところにいちゃ危ないよ」

「あなたも地震があったのは知っているんでしょ」

「え」

「さっきの地震の正体がいまそこにいるの」

「地震の正体……？」

クロエはいらいらとして、額に手をあてて困ったように考え込む。

「説明しても信じてもらえないと思うけどあれは地震ではないわ。」

クロエは爪を噛み始めて、何かを伝えるべきかどうか思案しているようにも見えた。

僕は何も推測できず、馬鹿みたいにクロエをみつめつづけた。

「……なの」

「え」

クロエの声は極端に小さかった。

「巨人が飛び跳ねた音よ」

「巨人……？」

「わたしの祖父が最初に目撃したのは十数年前。そのときに色んな証言をしたらしいんだけど、誰も信じてもらうことはできなかった。祖父はその数年後、ほら吹きと言われたまま消息をたってしまったの」

クロエが何を言っているのか僕には上手くつかめなかった。しかし今さらへほら吹きダダリオの汚名を晴らそうとしていっているようにも見えない。

彼女の声は真剣そのものだった。僕は答える。「きみが嘘をつかないことは知っているが、僕には見えないんだ。どこに巨人がいるのか……見えなければそれはただの地震なのかもしれない。風邪だから熱があるのかもしれないよ」

「違うの。わたし、本当は風邪なんかひいていない。学校はさぼったの。でもそれは朝から胸騒ぎがしたからなの。朝から風がつよくて、家の窓をどんどん鳴らしたの。胸騒ぎがして心臓が高鳴る方に歩いて行ったの。足跡をみつけたわ。運河から大きな足音が学校に向かって残っていたの」

「足跡……」

「そう、足跡。運河から何かがあがってきたの」

「まるでキミが好きなのホラー映画みたいな展開だな」僕はまだ信じるのができなくて、クロエの話を冗談のようにとらえてしまう。

「わたしはホラー映画が好きじゃなくない。わたしが好きなのはゾンビ映画。『28日後…』、『死霊のはらわた』、それから『シヨン・オブ・ザ・デッド』とか……」クロエが急に恍惚とした表情を浮かべる。ゾンビ映画について語りだしそうだったから僕は「キミは見たのかい？ 巨人を」と質問をした。

「わたし自身も巨人を見たわけでもない。でもわたし、祖父を嘘つきだと思っていたんだけど、そうじゃなかった気がしてきているの。足跡をみつけて、祖父のことを思い出した。あの誰もいない平日の昼下がり寂しそうにウイスキーを飲んでいた老人の気持ち少し見えた気がしたの。どうして信じてあげられなかったんだろう。せめてわたしだけでも」

クロエは困惑しているのかフロスト地区の路上に膝をついて泣き崩れてしまった。「クロエ……。キミが泣くところを見るなんて初めてだから、よっぽどのことなんだろう。でも僕は自分の目で見たものしか信じない主義だから、まだ何とも言えない。そしてキミをここに置いていくわけにもいかない。だから、探しに行こうよ。その僕たちの街を破壊し続けている巨人というのをさ」

四年前の夜

四年前になる。クロエは僕の家の近所に住んでいたからよく彼女は僕の家に遊びに来た。そのとき大あらしがあったから、クロエは家に帰れず僕の家泊まることになった。まさか車もだせないほど突風が吹くなんて、とクロエの母も迎えに来ることを見送るしかなかったのだ。僕たちはテレビゲームで遊んだあとに夕食の準備を手伝う。クロエにいいところを見せたくて僕ははりきって野菜を切っていた。クロエは何をしいいか分からず退屈そうに突っ立っていた。それから父が近くの河で釣った鱒をムニエルにして、父と母と兄とクロエの五人で食べた。食事のときも兄はずっと本を読んでいる、四人の会話にはいっこうに入っていない。僕は恥ずかしかつた。夕食後、母は長い入浴の時間に入り、父と兄は読書のために自室に戻っていった。取り残された僕とクロエはリビングで野球中継を見ていたがよく分からなかった。クロエが腹をたててテレビを消してしまった。あらしの音が響いている。それ以外には何も聴こえない夜だった。クロエはリビングに置いてある本棚を眺めていた。それは兄のものばかりで、兄は当時の僕にとって悪趣味な本ばかりを揃えていた。「黒死病の謎」「行方不明の少女たち」「伝説の殺人鬼伝」など。クロエは人差し指で本棚から一冊の本を抜き出した。「世界の人体解剖図巻」。

どうしてそんな本をまだ幼い僕たちがみつけられるような場所に置いていたのか分からない。けれど、クロエは躊躇なくその本を開いてしまう。輪切りにされた人間の胴体が載っていたり、ホルマリン漬けにされた脳みそ、草原に小腸を長く伸ばして、人間の身長と比較した写真などが掲載されていたりした。

「これって本もの？」クロエは尋ねる。

「そうじゃないかな。もうそんな本を読むのは止めようよ」

クロエは人間の顔が四十八のパーツに切り分けられる過程を写真で紹介したページを夢中になって読んでいた。

「このひとたちって死後にこんなことをされるって知っていたのかな」

僕はおそろおそろ尋ねてみた。

「少し変わったひとたちなのかもしれない。自分のからだを切り刻まれて写真にのつけられることに快感を覚えるような」

ふふ、クロエは笑う。

砕け散った街並み

彼女はいつも真面目に生活していたが時々、グロテスクなものに興味をひかれる瞬

間というのがあった。四年前から彼女はそうだった。僕はなぜかあの夜のことを思いだしていた。クロエは髪を前に垂らして表情をこちらに見せることはなかった。立ちあがって自転車の後ろに乗った。北から向かい風が吹いていた。青空にひろがる入道雲もすごい勢いで西へ流れていった。街は雲の影につつまれてしまった。クロエは黙ったまま、自転車の後ろに乗って僕のシャツをひっぱりながらつかまっている。

瓦礫が落ち葉のように街の色を変えていた。砕けた石膏やコンクリートの粉が舞っていた。瓦礫を避けるため、僕は蛇行しながら自転車をこいだ。空洞のなかに響くような索漠とした風の音しか聴こえない。話声もクラクションやエンジンの音も道路工事の音も何もかもが消えていた。ひとの気配がしなかった。クロエは目を伏せながらそういういった風景を見ないようにしていたのかもしれない。クロエの重さはペダルに伝わってくるのに彼女の存在感が何も感じられなかったから、彼女は空白のあたまで何も考えることができなかつたのかもしれない。

建物の破壊のされ方に法則があることに気が付いた。ブルドーザーのようなものが通った後は徹底的に破壊されていて、ふと路地を変えたと無傷の建物もあった。やはり巨人たちの作業なのだろうか。あの地震も巨人たちの足音か何かだろうか。巨人の針路は僕の家の方角に向かっていた。

「クロエ……。眠っているの？泣いているの？何か話してくれないと不安になってし

まう」

「ジェイムズ、あなたはこれから見ることをじじつだと思って認識した方がいい」

「怖いこと言わないよ」僕は笑った。

笑わないと不安がクロエに伝染してしまいそうだったから。いや、すでにクロエは僕の不安を心臓の音から察知していたのかもしれない。

引っ越し会社

僕は運河が見えたとき、正直ほっとした。そのながれにいつもと違うところは見られなかったから少し安堵できたのかもしれない。冷静に自宅が半壊している状況を飲みこむことができた。僕の部屋を含む、二階がえぐられたように壊されていた。玄関に入ってみると奥から物音がする。まだ家族が誰か残っていたのか。僕は声をかける。「そこにいるのは誰」と。相手が応じるよりも先に僕はみずからの目で確かめることとなった。

グリーンのキャップにツナギを着た引っ越し会社の人間がアンファンテリブルを抱いている。アンファンテリブルは瞼をとじて眠っているかのようだった。

「待ってください。それは僕の犬です。あなたたちは何をしているんですか」

「やあ。きみはまだ生きていたのかい。それはよかった。急いで避難しなさい。わたしたちは行政の命令を受けて、瓦礫からこのお宅の財産を運搬しているとろなんだ」
空虚な響きが言葉のなかに感じられた。後ろから来たクロエが耳元で「このひとたち火事場泥棒だよ」と呟いた。エンジンの音。窓から『ダブリンアース』社のトラックが見えて、家の横につけられた。トラックは排気ガスを黒煙のように噴きだしている。

「じゃまだ！どけ」ツナギの一人が僕を蹴っ飛ばす。僕たちは抵抗もできず、そこに取り残されることしかできなかった。アンファンテリブルはさらわれてしまう。僕は一切、抵抗することができなかった。

思い出のタペ

「あなたの犬、さらわれてしまったのね」

「クロエ」

西向きの窓から様子を二人で伺っているうちに、僕は過去のことをおもいだしていた。結局時間が進んでも、あたまをよぎるのは過去のことばかりで未来のことなど想

像できやしな。母親がよく熟れたライチの実を食卓の上に置いた。同じように西向きの窓から外を眺めていた。夕陽がゆっくりと平原に沈んでいったのを憶えている。あれはやはり夏だったのかもしれない。まばゆく光るライチの実を齧りながら、僕は携帯ゲームの液晶画面に視線を落とす。そのころ流行っていたソフトは何だったかな。たしか出入りする度に構造が変化する城でモンスターと戦うゲームだった。当然、僕は主人公に「ジェイムズ」という名前をつけた。ゲームの中盤、主人公は未来の花嫁となる女の子と出会う。そのときに僕は悩んだ。当時、アイドルで「モニカ」という歌手が僕のお気に入りだったがクラスの連中にそれがばれてしまうのは恥ずかしい。かといってクラスの女子の名前を拝借するのも何だかおかしい気がする。僕は女の子の名前をつけることなどできなかった。そのとき、インターフォンが鳴る。甲斐甲斐しく出迎える母の声。一体だれが来たと言うのだろう。来客など滅多にないこの家に。僕はダンジョンのなかで宝箱をみつけた。そのとき「ジェイムズ！ あなたも早く来なさい」と母から大きな声で呼ばれた。僕は食卓にゲームを置いて玄関に歩いて行った。夕陽の残光が運河の水面に反射してきらきらと眩しかった。逆光のため客人の顔がよく見えない。子供？ そう、それが僕とクロエの初めての出会いだった。クロエはバスケットに沢山のバケットを持っていた。黒いワンピースに帽子を被った女の子だった。「ダダリオと言います。事情があって故郷に帰ってきました。今後ともよろ

しくお願いします」クロエのお父さんが礼儀正しく挨拶をする。

「これ、よろしければ召し上がってください。今朝、焼きました」バゲットの入ったバスケットを僕は受け取る。アンファンテリブルも尻尾をふり、歓迎した。

「きみ、名前は？」

「クロエ。あなたは？」

「ジェイムズ」

僕はクロエという名前をゲームの女の子に名付けることになる。

クロエはしきりにあんふぁんてりぶる、あんふぁんてりぶると発音もたどたどしく犬の名前を舌のうえでころがした。そのたび愉快そうに笑った。

「何も怖くないわ。こんな可愛い犬」それから僕は倉庫から例の特大フラフープを持ってきてアンファンテリブルとなわとびをしてみせた。クロエは何でもないことなのに大きな声で笑ってくれた。

「変な名前」そう言いながらもクロエはアンファンテリブルのことを気にいってくれたようだった。

「アンファンテリブルのこと覚えていない？ 昔、一緒に遊んだよね」

「覚えているわ。素敵な名前だもの」クロエも懐かしそうな顔をした。

序文

二十三通の手紙はすべてあの「海―Sea―」と「緑―Green―」と名付けた二人の私の子供に宛てて投瓶したものである。私がなぜ瓶を海に投げ始めたかというと彼らが海を住処にしているからである。手紙を届けるにはそれしか方法がない。彼らはどこにもとどまらず、行進をつづけている。彼らは初めからあのような姿だったのでなく悲しみの最果ての……病のようなものかもしれない。彼らの悲しみを私は両手のひらを使っても掬いとることはできないだろう。

いや私程度の人間は誰の悲しみを掬いとることもできはしない。あのダブリンで再会を誓った女の悲しみすらも。【『帝国の巨人』（序文）G・ダダリオ著】

暗い家

金になるものはあらかた、『ダブリンアース』社に奪われてしまった。古い絨毯がしかれた埃っぽい部屋で僕たちは途方に暮れていた。地震が起こった。そして巨人の存在を知った。でも巨人がおらず、引越し会社に資産を奪われて家族の行方も分か

らない。そして大事なアンファンテリブルを目の前でさらわれる。残ったのはからっぽの家。「きみの家は？」クロエは爪を噛みながら悔しそうに「わたしもさっき自分の家を見てきたんだけど何もなかった。ただ両親はクロアチアに旅行中だから、無事だと思う」と答えた。トラックのエンジン音が聴こえる。僕たちは咄嗟に身をかがめて、カーテンの隙間から様子を伺う。部屋に緊張が満ちる。『ダブルンアース』社のトラックは近隣の住宅にも踏み込んで仕事をしているようだった。街ぐるみで大規模な泥棒をするとは、すべては今日の日のために準備されていたのだろう。おそらく引っ越し会社を装って、この街の下調べをしていたのだろう。息を殺しながら、トラックが去るのを見届けた頃にはもうすっかり夜になっていた。

階段から足音が聴こえて、振り向くと兄がいた。兄はろうそくを灯しながら笑みを浮かべて近づいてくる。「お前たち巧くやったんだな」兄は僕たちを見るなりそう言った。

「どうしてこの街はもぬけの空になってしまったの」クロエがたまらず質問を投げかけた。兄は身じろぎもせず、平然と答える。

「街ぐるみで避難指示が出されたのさ。僕はクローゼットのなかに隠れてやり過ごした。父と母には先に避難場所へ向かうと置き手紙を残してね」

「奴らはまずこの街のメディアを乗っ取った。架空の地震予知する番組で住民たちに

心の準備をさせて、決行の日までは周到に準備をしたのだろう。今日の昼ごろ、街全体に避難指示が出されて、住民たちは誘導されてしまったのさ。もちろん非警察機構の手によってね。小さな町だから、そこまで人手もいらさないし、この調子だと成功したようだね」

「そんなこと本当に可能なのかしら」

「地震という人々の潜在的な不安に付け込んだ血をながさない平和的な犯罪さ。おそらく今回の犯行で彼らは誰も殺していない。見事だよ」

「灯りは外に漏らさない方がいい」兄がそう言う。そして兄は倉庫からキャンプ用のテントを持ちだしてきて、リビングにそれを組み立てた。

「夜、どうしても灯りが必要な時はここに入る。今晚の食事もこのなかでとることにする」そう言って兄はトーストの上にコンビーフをのせたものを作ってくれた。

こえのしないほうが

まだことばをうまく思いだせなかったときに

わたしはいまだくらい海の底にいた

にんげんだったときにだれもわたしを信じようとはせず
わらいのめされて馬鹿にされてわたしはあたまが痛くなつて
こえのしないほうがくをめぐした

こえのしないほうがくはだれもないところを意味するから
わたしは孤独におかたつて帆をたてることにした

貝殻のようにだれとも口をきかず なみのおとだけをきいていても
よかつたのだが「世界」はそれをゆるさない

わたしはひとであることをやめてこえのしないほうがくにこぎ出す

昔むした樹をきりたおし 筏をくみはじめたわたしにもはやだれも

きょうみをもつ者はいなかった 夕陽がこの星のうらがわにかくれたとき

わたしは焚火をして白い煙をだしながらよどおし筏をくみはじめた

森の樹はつきつきときりたおされた

やがて森の樹をはんぶんきりおとすことによつてわたしのからだがようやくのる筏
がくまれた わたしはわたしの法則にしたがつて生きるほかはなかつたのだから

こえのしないほうがくにわたしは死ぬ

ひとりの小説家の名前

テントのなかで兄は語り続ける。「今回の事件は『ダブリンアース』という引越
し会社の犯罪にとどまらず、もう少し他の要素で糸がからまっている。おそらく『ダ
ブリンアース』の連中は建物の破壊には一切関与していない。彼らもこの建物倒壊に
は驚いているはずだ。俺はクローゼットのなかからこの街に住む友人たちと連絡を取
り合い、インターネットの鍵付き掲示板で状況を共有しあった。しばらくの間、建物
倒壊については原因をつかめなかったのだが、エミーというHNを持つ女(?)が「こ
れは巨人の仕業だ」と書きこみをした。掲示板はその後、炎上してしまったんだけど
俺はこのエミーという人間が嘘をついているようにはおもえなかった。直感でしか
ないが。考えを巡らせているうちにある一冊の本に行きあたる。昔、俺が読んだ小説の
一冊だ」

臙脂色の装丁の本を兄は取り出した。クロエの表情が曇る。

「『帝国の巨人』—グスターフ・ダダリオ著。一九八七年に出版されたSF小説だ。

これについてはクロエ……。きみのほうが詳しいだろう」

クロエは下を向いたまま黙っていた。

「ダダリオってクロエの家族なの。この小説家は？」兄は僕の問いに答えない。しばし沈黙がながれたあと、「そう、グスターフはわたしの祖父……」とクロエが言った。夜風に白いカーテンが揺れていた。クロエは白いカーテンの端をつかんで窓の外を物憂げに眺めながらつぶつける。

『『帝国の巨人』は祖父のデビュー作なの。当時はSF小説として発表されたんだけど文体や心理描写が注目されて、多くの批評家にも賞賛されたそう。でも祖父はこれ以後に書いたものはすべて編集者と揉め事を起こしてばかりで発表されなかった。彼の人生でまともに出版できたのは『帝国の巨人』だけなの」

「クロエはこの小説を読んだかい」

「ううん、わたしは祖父から特別可愛がられていたけれどわたしは祖父を愛していなかった。わたしのお母さんに暴力ふるっていたから。だからわたしは彼の書いた小説に興味を持たなかったわ」

「偏屈な爺さんだったものね。俺も子供の頃、何度どやされたか……」兄はランプの灯りを調節しながら、昔を懐かしむ目をする。

『『帝国の巨人』の舞台は、ここファイエット郡の田舎街さ。つまりは俺たちがいるこの街のようだね。そこに写真好きの男の子が住んでいて、街のあらゆる場所で写真を

撮って現像してみたたら、あちこちに巨人が映っていたんだよ。以来、巨人たちの存在は男の子のカメラのレンズを通してのみ、発見されることになる。でも多くのひとは合成写真だと疑って聞かないんだ。まるで狼少年のような扱いを受けた男の子は巨人を恐れて森のなかで暮らすようになる。そこで村を追放された魔女と出逢い、恋に落ちる。男の子は最終的に魔女の力を借りて、巨人たちと意思疎通をとりはじめ。そして巨人たちに静かに森で暮らすように説得する。巨人たちは最初、少年の存在に戸惑うものの少年の存在を認め、彼の願いを聞き入れる。少年の勇氣ある行動によって巨人たちは街から遠ざかった。そのじじつを街のひとは誰一人として知らない。主人公は永遠に狼少年として生きる。大雑把にいうとそんな粗筋かな。あと当時、話題を読んだのは物語の間に挿入された私信のような手紙なんだ。その手紙が物語とまったく関係性がなさそうに見えることから、批評家たちに手ひどく攻撃されていたね。冗長だってさ」

丘の上の森

風が窓を叩く。誰かの叩く音に聴こえて不気味でしかたがない。

運河の上流から下ってくる風がこの街で反響するため、悲鳴のように聴こえること

もある。昔からつよい風が吹くときは変化の予兆のように感じる。じじつ、その予感
はあたることになる。眠りにつこうとテントから出て適当な毛布をかぶって目を閉じ
ていたところに再び、兄が現れた。

「お前たち喜べ。巨人の謎を掴んだかもしれないぞ。クロエ、きみのお祖父さんが行
方不明になった日を憶えているかい？」

「六月二十日です。その日を命日としています」

「『帝国の巨人』の主人公が消息を絶った日も六月二十日なんだ。この小説は時間軸
を丁寧を描いているから、冒頭から時間を辿ればこの小説の終わりが六月二十日であ
ることが推測される。そしてこの少年はどこに消えたのかわかるか」

「丘の上の森」僕が答えた。

「その通り。かつて愛した魔女がそこにいたからな。つまりグスターフはどこに消え
たのか判るよな」

「森……ってこと？」

「そう、極めつけは俺の過去の記憶。俺が友人たちと森を彷徨って死体を探していた
時だった。ちょうど『スタンド・バイ・ミー』がテレビで再放送されて俺たちはいて
も経ってもいられなくなり、死体を探しに行ったんだ。丘の上の森っていう手近な場
所にね。そこでおあつらえ向きに廃線の線路をみつけたんだ」

「兄さん。それは廃線ではなくて炭鉱のトロッコのために作られた線路だと思うよ」
「ああ、今考えればそうなんだが俺たちは興奮してその線路を辿りはじめたんだ。どんな死体に出会えるんだろうってね。そうしたらあの爺さんがいきなり茂みから現れて、俺たちを吐り飛ばした。どうやらあの森は私有林だったんだね。きみのお祖父さんの」

「そうです。でもあれは祖父のものだけど、今はわたしの親戚のひとたちが管理しているものになります。わたしの家族はあまり関与していません」

「なるほど。で、だ。話は戻るけど、祖父さんは特に理由もなく俺たちを吐り飛ばしたんではないと思う。目の色が変わるぐらい怒っていたからね。だから祖父さんは俺たちに見られたくないものをあの森の奥に隠していたんじゃないかと思うんだ。小説の主人公と同日に消息を絶つようなロマンスト。どうせなら行き先も同じ場所を選ぶだろうさ。隠したかったものとは何だろうね。手掛かりは何もないわけだから、お前たち二人はそこへ行ってみてはどうだい」

地図

兄は記憶を頼りに、白い大きな紙に森の地図を描いてくれた。驚くほど精密な地図

で兄にこんな才能があったなんてまったく知らなかった。しかし兄が『スタンド・バイ・ミー』をしていた通りに森を進んでも線路はなかなかみつからない。それ以外はほとんど完璧に記されているのに線路の場所だけを間違えたのだろうか。地図のことを疑った瞬間、風に地図をもっていかれた。木々の向こうに飛んでいく地図。森は何も答えてくれない。沈黙が辺りを支配する。木々の向こうから一羽の白い鳥が上空を飛びたっていった。

墓と棺

唯一の指針をなくしてしまった僕たちはひどく疲れていた。腰を落として草叢の上に座る。手のひらに何か硬いものがぶつかる。

石かと思つて目を向けて見ると枕木の一部だった。森のなかにたしかに線路は存在したのだ。枕木は朝露でしっとり果物のように濡れていた。その腐りかけた木片を辿り僕たちは再び歩き出す。クロエはパンの切れ端を僕に渡してくれた。僕は口に含みながら歩いた。ふと気が付いた。クロエは森に入ってから何も食べていない。「クロエはどうして食事をとらないの」

「お腹は空いているんだけど、気持ち悪くて食べられないの。祖父の魂とわたしの胸

騒ぎが何か関係しているのかもしれない。わたしと祖父の意識はどこかずつと遠いところであつながつているのかもしれない」

足どりも重そうだった。僕は水筒の水だし紅茶をアルミ製のカップにそそいだ。そしてパンの切れ端をひたしてクロエのくちびるを濡らすようにそれを食べさせた。クロエは抵抗もせず、そのパンをやさしく噛みはじめた。

「こんな方法しかないけど」

「いえ、おいしかったわ」

木の葉や草花の匂いが濃くなる。湿度が増してきたようだった。

ひと雨来るのかもしれない。風が急に止んだ。

三時間は歩いている。その枕木はもはや幻影のようになどどこまでも続いているようだった。僕たちは会話をせず、僕は前方を見て、クロエは僕の背中をみつめて歩いていた。藪蚊にさされながら、額に汗をかきながら僕たちは睨むように枕木の終わりを待ち続けた。そこに何があるのだろう。そしていよいよ本当に雨が降り出した時、僕たちはびしょ濡れになりながらも合羽を着て、どちらともなく走りだした。息遣いが聴こえるくらい近くを走っているのにクロエが何を考えているのかは全く読めなかった。僕はおそろおそろクロエの顔を見ようとしたりした時、クロエの表情が変わった。

「ジェイムズ……。あれをみて」

そこには小屋があった。農具を入れておくような小さな建物だった。

僕たちはそこに入り、合羽を脱いだ。呼吸さえ上手くできないような重い熱気に包まれている。僕は大きな溜息をついた。暗い小屋にはどこから隙間風が入ってくるのか、空虚な風の音が聞こえた。クロエは肩を震わせていた。泣いているようだ。気持ちにはわかるが泣いても何も解決などしないぞ、と言おうとしたとき、クロエが泣いている理由が分かった。小屋の隅には石板のようなものが据えられてあり、そこには「グスターフ・ダダリオ　ここに眠る」との墓銘が刻まれていた。

クロエはお祖父さんの墓をやっとみつけたのだ。クロエは泣いている。祖父の死などさして気にしていないようだったのに、実物を目の前にすればやはり感情に何かがながれたのだろう。僕は胸に手をあてて、目を瞑った。

墓の前でしばらくの時間が過ぎた。ある疑問が取り残されていた。小屋の周りで風など微塵も吹いていないのに風の音はどこから来ているのか。墓碑に目を向け、耳をあてるとたしかにびゅうびゅうと風の音が石のなかより聴こえてくるのだ。

「クロエ、ごめん」

僕は許可を取るよりも先に石を押しつけた。その途端に風が舞いあがる。僕たちは髪を逆立てるほどの風に驚いた。さらに石の下には地下へ続く階段がある。泣きやんだクロエの頬に涙のあとがかすんでいる。僕は階段を降りることにした。クロエも続

く。懐中電灯で照らすと階段はとても狭かったがしっかりとした造りになっていた。誰が何のために造ったのか分からないが、やがて階段は終わりひとつの部屋に出るところになる。

不思議な感慨だがその地下の部屋に入った時、炭鉱夫たちのにぎやかな声が聴こえるような気がした。明るい部屋で酒を飲み交わし、トランプをする人々。それらの像が浮かび上がる。けれど瞬く間に消える。実際にはがらんとした部屋だった。風が吹き古い新聞紙がくしゃくしゃになってころがっている。風は部屋の奥の格子窓から入ってきているようだった。窓からは何とファイエット郡の街並みが一望できた。街に面する崖面のなかにあることが分かった。懐中電灯であたりを散らすと、書きもの机に伏した白骨の遺体があった。僕は壁面を見てさらに驚く。壁には幾つもの新聞紙が貼りつけてある。

「この遺体はおそらく祖父のものだわ。この部屋そのものが棺なのね」

クロエは袖をめくってみずからの肩のあたりを撫で始めていた。無意識にしているかわからないが彼女は何か祖父の孤独という感情の冷たさを肌身で感じているように見えた。二匹の蛇が絡み合うような形象の銀の腕輪をしていた。

クロエがそんな装飾品をつけているなんて、今までずっと気がつかなかった。

「狼少年は、わたしの祖父そのものだったのね」

クロエは寂しそうにそう言う。「誰も彼のことを信じていなかった。あたまがイカれた老人だと思っていたの。当然、わたしもね。だから彼が森に消えた時、やれやれって思ったわ。やっとやかいかいものがいなくなった。わたしの父も母も少なからずそう思っていたはずよ」クロエは黙り込んでしまう。

彼はこの場所で「魔女」に会えなかったのだろう。机の端にはノートが置かれ、開いてみると小さな字で小説や詩のようなものがいっぱい書かれてある。読まれる可能性のなかった文章たちが寂しさの断末魔のように映った。クロエはそのひとつを朗読する。

雨土の記憶

グスターフ・ダダリオ

黎明のひかりが

柵の葉から垂れて

アンファンテリブル

淡い陸橋によりかかる

角笛形の杯に

ひかりはそそがれて

王の目にとまる

汝、望むなら

我が国の紋章にならないか

断ると

ひかりは王の喉に

消えてしまう

ひかりは死に

またよみがえる

うまれかわった

アンファンテリブル

ひかりはやさしく
街をともしながら
ちいさな郵便局に
忍びこむ

ひかりは配達人の
鞆のなかに

手紙は

海を越えて

国境を越えて

地球上のあらゆる場所へ

ムザブの谷を

特別便に任せて

自由旅行

アンファンテリブル

紅い頬の少女と
月夜の晩にだけ
踊り明かす

遊覧の歳月が
背負い始めた
約束とそれから

ひかりは聖堂の
錆びた蛇口へ
神様のお告げを
きくために

風になったひかりは
紅い頬の少女の
故郷へ

アンファンテリブル

風葬された
祈りの言葉が
雨になって谷を濡らす

空の街に
虹がわたり
鳥がわたる

ひかりは
燃えて
灰になり
星になり
また消える

エミリアの朗読と比べて抑揚のない読み方だったけどクロエの声には独特の深みがあった。長く気まぐれな春の雨。気だるそうな猫。水たまりに落ちた枯葉。そんなイメージが彼女の声から浮かんだ。

グスターフの夢

白骨のまわりには Power Macintosh で入力された新聞の原稿がいくつか散らばっていた。壁には大きく「巨人」の文字が躍ったタブロイド紙が何枚も壁を埋めるように貼り付けられていた。

「これ、西暦じゃないよ」

タブロイド紙に記載されている年号は見ただこともない暦だった。

架空の新聞に存在しない街の名前が描かれて、巨人に街を破壊されたことが伝えられている。巨人のことについては詳細に記述されていない。クロエはノートを開いて読んでいる。「ジェイムズ……グスターフは『帝国の巨人』の続編をやはり書こうとしていたんだわ」

「え」

「『緑の行進』というタイトルで構想がまとめられているの。これ『ダブリンアース』っていう組織が出てきているし、わたしやあなたの名前も出てくるわ」

「いったいどういうことなんだ。僕らが生まれてからこのノートは書かれているだろうけど、『ダブリンアース』という会社組織はグスターフとつながっていたんだらう

か」

「あるいはファイエット郡の街や村がまるごとグスターフの幻想のなかに飲み込まれてしまったってこと？」

「どちらかしか考えられない。偶然思いついた会社名とは考えにくいし、『緑の行進』はこれらのメモから察するに巨人たちが不可視の状態によって―ひとびとの言説だけを通じて―出現する作品のようね」

「じゃあ、やはり巨人は存在しないのか。『緑の行進』と現在の世界がつながっているとしたら」

「断定するのはまだ早いと思うけど」

わたしのからだはどこかの海の色

筏は三度のあらしでもとのかたちにもどることもなく海底にしずんでしまった
いっそしずんだのが筏ではなくわたしであればよかったのにおもいながら 波間
をただよっているうちに いくつものあめにうたれて わたしはみずに同化してい
くような感慨をえた

その感慨にふけり夜を迎え満月を迎え 気がついたときにはついにわたしのからだは海のみずとの境界をなくしてしまった
いまはもうわたしのからだは海の色

海の巨人

雷が鳴る。雨がつよさを増して降ってきた。風もつよく格子窓から森の枯れ葉が入り込んでくる。灰色や土色の枯れ葉たちが風によって舞い上がる光景。灰色の雲はすでに雷を忍ばせた黒雲に変化していた。そのとき、幻影だろうか。青く美しい海の色が窓に広がったのだ。

「海？」

「え」他のノートを読んでいたクロエもそれに気が付いて窓の方を見る。

たしかに窓の外にはセルリアンブルーの南の海が広がっているのだ。しかしそれは奇妙なことに海の風景ではなくて海面が絵のように切り取られた平面的な幻想だったのだ。

「あれは……あれが……巨人の正体！？」

平面の海は遠のくにつれてそれがひとの形になっていることが分かった。波は揺ら

めき、陽の光さえ反射しているのにそれはひと形の枠におさまっている。

「マグリットの『大家族』みたい」

マグリットの『大家族』は鳥の形に切り取られた「空」の絵画だった。それが巨人の枠組みになって、「空」は海になって現れてしまったのだ。

「祖父グスタフはマグリットが好きだったわ。一度幼いころ、美術館に連れて行ってもらったことがあるの」

「巨人がこんなに幻想的な存在だったなんて、あれは倒したりすることができるとか、あらしのなかのセルリアンブルーは優雅に街を破壊していた。

「とにかくここを出て、一旦僕の家に戻ろう。兄のことが気になる。ここにあるノートやメモは持ち帰ってもいいかな」

「いいと思う。おそらくこの場所は祖父の死後誰にもみつからないと思うし、誰も知らない場所で合った方がいいと思うの」

クロエは何かを決意したような顔をしていた。

「巨人もやはり存在していることがわかったから、対策を打たないとね。祖父の夢に終止符を打たないといけない」

「『ダブリンアース』社はこの夢と世界との混濁を予期していたかのような犯罪をしでかしたわけで、彼らに聞けば何か分かるのかもしれないね。僕たちはこれか

らあの会社の本国アイルランド→ダブリンに向かうというのはどうだろう」

「わくわくしてきた。ファイエット郡を出るのは久しぶり。海外旅行なんてしたことないけどきつと何とかなるよね。……ダブリンまでお祖父さんの夢に食われてしまっていないといいけど」

「何が起こるか分らないよ……。この骨はここに置いていいのかい」

「この地下室はお祖父さんのお墓なのよ。幻想のなかに眠らせておいてあげたい。でも私たちの世界がお祖父さんの夢に食われてしまうのはナンセンス」

「話しながら歩こうか、一旦僕の家まで。兄のことも気になる」

兄と僕

「父さん、母さんのことは俺が何とかする。クロエの両親もきつとみつけどす。それよりきみたちは、きみたちしか過ごすことのできない時間の旅をつづけてくれ。グスターフ・ダダリオの夢に世界が浸食されているという想像は馬鹿げているが一面では真実だ。きみたちにしか解きほぐせない、からまった糸なのかもしれない。それからアンファンテリブルのことも頼む。大切な家族だから」

家を出発するとき、父の部屋から銃と弾薬を持ち去ったことを兄は気付いているだ

ろうか。兄には昔からすべてを見透かされているような気がする。

横断

アイルランド―ダブリン行きは船で行くことにした。時間はかかるが、大勢の旅行客にまぎれることができる。空港はおそらく待ち伏せされているだろう。

大西洋横断の遠洋定期船が出ている港街につくと僕たちはそれだけでもう長旅をした気分になり疲れ切ってしまった。クロエは黒髪で目だっってしまうことから僕はその港町で帽子を彼女に買った。彼女が別の買いものを済ませているうちに買った。クロエは特に嬉しそうにもしなかったけど、そのとき以来外にいるときはいつもその帽子をかぶるようになった。ホットドッグとコーラを買って、船底の自分たちのベッドにおさまり靴をぬいだとき、やっと思をつくことができた。同室には家族連れがいて、もうそれぞれのベッドで眠りについていて。双子の子供が仲よくひとつのベッドで眠っている。睫毛が長い子供だ。寝台の上段に僕が、下段にクロエが眠る。格安の切符だったから、もつとスクリーン音やエンジンの音がして眠れない場所かと思っていたけどそこはまさに深海のように静かな場所だった。クロエの寝息が聴こえる。僕は安心して瞼を閉じた。

星宮

巨蟹、獅子、獅子、処女、処女、天秤、天秤、天蠍、天蠍、人馬、人馬、磨羯、磨羯、宝瓶、宝瓶、双魚、双魚、白羊、金牛、金牛、金牛

エミリアの憂い

ルネ・マグリットの「白紙」と題された絵画を見ているうちに涙がわたしの頬を伝っていた。この涙がどこから来たのか、本当に自分の瞳からこぼれおちたのかわたしには分からなかった。わたしはいつも憂いのなか。学校にいるときは虚飾したみずからに成りきる。エミリア・パーキントンを演じることにためらいはない。話題の中心にいる自分を誇らしくも思っていた。

プールの時間。周りの友達は大胆に肌を露出して着替える。わたしはそのときだけは慎重にだれにもわたしの肌を極力見せないように更衣室の隅で着替えをする。水着に着替えてからもわたしはそわそわしてばかり。べつに痣もタトゥーも入れていない

肌。だけどわたしのからだに視線があつまるとき、わたしはわたしの肌以上の何かを盗まれた気がする。わたしの心の奥にある抽斗に入れた一冊の個人的な過去の記憶を綴ったノートを読み返されたような気がする。笛の音。笑い声。波しぶき。夏の太陽はわたしがノートを隠すのを手伝ってくれないし、輪になってわたしを尋問しているように感ぜられる。憂いがこの塩素たっぷりの水にも含まれているだろう。だってわたしが泳いだのだもの。わたしのからだからわたしの憂いがながれだしている。

暗い部屋。わたしはドアを閉める。帰宅するとマグリットの画集を眺め、水槽の魚たちに餌をやることしか、愉しみは見いだせない。これから、眠るまでは英語と数学とギリシャ語と化学と物理を勉強し続ける。そうじゃないと明日のエミリアが剥がれ落ちてしまう。先生、わたしをあまり褒めないでください。

自画像

鏡をのぞいてもいまの自分を見ることはできない。

いまの自分でも過去の自分でもなく、鏡に映るのはあなたが愛さなかった他の誰か。

豎琴の橋とダブリンの魔女

サミュエルベケット橋を渡りながら、僕たちは曇り空のダブリンの街にいた。ダブリンの街を北と南に分断するリフィー川は鋼のように白くひかり、薄らと雲を映していた。『ダブリンアース』社の本社はこの近くと調べて訪ねてみたものの、それらしきなかなか建物はみつからない。仕方なく僕らは近くのブルームハウスというホテルに予約を入れた。壁の色は少し濁っていたがなかは清潔に掃除されていて、僕たちはすぐに気にいった。翌日、ホテルのカフェで朝食をとっているときに、相席した老婆に僕たちは話しかけられた。

「新婚旅行か何かかしら」

「僕たちは高校生です」

「あら、そうなの失礼」

「いえ」

そこから沈黙がしばらく続いた。クロエは見知らぬ大人と上手に話すような性格ではなく僕もその手のことは苦手だったから何を話せばいいのか分からず気まずくなつた。老婆はそんなことは気にする様子は見せずに、茹で卵と野菜を食べ続けている。ハンカチで口をぬぐい、またこちらを見つめる。

「探し物はみつかった？」

「え」クロエと僕は目をまるくする。

「やはり、まだのようね。それから知ってる？あなた達どうやら人気者みたいで近くの怖そうなおじさんたちがじっと見ているの」

老婆はハンカチで口を押さえたまま小声で話したから、遠くからは何をしゃべっているのかは分からなかったろう。僕たちはティーカップに映る人影を意識しはじめていた。

「肩のちからを抜きなさい。警戒されるわよ」老婆がつよい口調で言う。

「あなたは、いったい？」

「昔、香草を庭で育てていたの。ありとあらゆる香草を育てて、あたしの衣服や肌になれそれをふりかけたとき、夢のような匂いがわたしを纏った。あたしは魔法使いになれたと思ったの。それからこのダブリンに来たわ。懐かしい友人に会えないかと思っただね。でもそれはあたしの思い違いだったみたい。あのひとはもうとっくに死んでいる年齢だから」

「あなた、魔女なの？」クロエはティースプーンを落としてしまう。

大理石の床にスプーンの音が響く。大勢の客がこちらをみつめる。クロエは震えている。魔女を見たことに驚いているのだろうか。

「あたしはアン。ただのばあよ。生活保護を受けているの。でも着ている物はぜいたく品ばかりよ。こうしてホテルでお茶もするの。あなたはあたしのような女にはならない方がいいわ」それから老婆がふいに僕を見る。

「男の子は果たせない約束をしないこと。じゃないとあたしみたいな女が増えてしまうからね、まったく！」

遺言

レーメルシュタット通り。預言者や占い師がかつて住んでいた街。まとわりつくような視線。石畳の下り坂を僕たちは歩いてきた。歩調を変えながら、複数の足音に追跡されている予感。エージェントなのか。銃と弾薬が胸のなかで燃えたきりようだ。銃はいまにも火を噴きそうなイメージで僕は心臓の傍に忍ばせてある。クロエは目深に帽子をかぶり、平静を装っている。

歴史ある街で交わされた様々な憶測。それらが呪文のようにあたまのなかで反芻し僕たちを襲うようだった。クロエも頭痛に襲われているようで互いにからだを傾けあいながら僕たちはバランスをとり、前へ前へと歩いている。ふいに胸ポケットから芳しい香りが放たれていることに気がつき、さぐってみると出てきたのはハーブだった。

ドラッグのような危険度の高いハーブではなく、変哲もないマジヨラム。僕はマジヨラムの匂いを嗅いでそれをクロエにも渡した。クロエも幾らか気分をとりもどしたようだった。引き金に指をかけるのを止めて、僕は緑色のマジヨラムの葉を握りしめていた。

ポート

セントステイブンスグリーン湖の中央にある湖へと向かう。僕たちは一艘の手漕ぎボートをポート小屋で借りる。季節外れのマフラーをまいた老人にお金を支払い、棧橋に向かう。老人はくすくすと笑って僕たちを見ている。

「何か？」と僕は聞いてみた。侮辱されているのかと思った。

「いや、失礼。いまふいにね、自分のこれまでの生涯のいっさいを忘れてただひとり老人として若者二人に向き合った時、この情景がどこかで読んだ本のなかに出てきた気がするんだよ。ああ……変なことを言ってしまったってすまない」老人はそう言って別の方向を向いてしまう。僕はまた棧橋の方へ歩き出した。そのとき、老人はクロエの耳元でそっと何か助言のようなものをした。クロエは何の反応も示さずに夏の湖のなかに佇む。風が帽子から出た彼女の髪の毛をそっといたずらのように揺らした。ク

ロエはまた僕の方に向かって歩きだした。先にボートに降りてクロエの手をつかみ、彼女をボートに乗せたとき、音楽が鳴りはじめたように僕は嬉しくなった。逃げることも忘れて懼をこぎながら、クロエを正面にみつめて僕は時間を忘れる。水面は周りに群生する高木をきらめきのなかに映していた。舟をとめて湖上で僕たちが静かに過ごしているとき、波紋があちこちから届く。奴らが半円を描くようにしてこちらに向かってくる。公園に不釣り合いな背広が滑稽だった。奴らはいらだった表情を浮かべている。湖に栈橋は三つあり、それぞれから舟を出すことができ、奴らはそれぞれの栈橋から囲むように僕たちに向かってきた。三角形の中心に位置する僕らはいかに銃をだすべきか迷った。発砲すればこちらは無事では済まされない。彼らも恐らく武器は所持しているだろう。水面に円錐形の黄色いポールが立っている。何を意味するものなのか分からない。穏やかな風が公園を横切っていく。水面に波紋がいくつもの円をつくりながら、水際に生える木立と一緒に揺れている。水底から大きなものが浮かんでくる。水柱が立つ。追跡者たちの舟は転覆してしまう。

黄ばらの花束

昼日中のダブリンに人の形に縋りぬかれた海が突然現れたことに、市民たちは驚い

ていた。幻なのか、前衛芸術なのか、ホログラムなのか誰も判断することはできなかつたろう。白いポロシャツの若者たちが合唱の練習をしている横を走り抜けた。噴水を隔てて水しぶきをなかに彼らが歌っているのが見える。彼らの「ロンドンデリーの歌」が公園中に響くようだった。それから動物園と、世界の花の温室と、野菜市場を通り抜けて僕たちは雑踏の街に出ようとす。セントステイブンスグリーンのちょうど入口のところまで黄ばらの花束を両手いっぱいを持った婦人とクロエが正面衝突をしてしまふ。夏の陽ざしのなか、黄色の花びらが宙を舞う。婦人は「ごめんなさい」と言いながらクロエの方を見る。クロエは立ちあがって婦人に手をかして婦人を起こす。何も言わず一礼だけしたクロエはからだについていた花びらを撒きながらまた走り出す。帽子の上には一輪の花が崩れない形で残っていたのが可笑しかった。

アン・リーシエンタルプの手記

あたしが森で暮らすようになったのは、隣人とのささいなトラブルからはじまる、あたしは動物が好きで、九官鳥を飼っていた、その九官鳥は滅多に啼かないはずなのに、偏屈な隣人はあたしと会うたびに「鳥の啼く声がうるさくて眠れない」としきりに言いたてた、あたしはそのたびに謝罪をして、隣人をなだめた、ところが隣人の嫌

がらせはエスカレートしてクラックフ通りの掲示板すべてに、へ手に負えない動物を飼うことは控えましょうとあてつけに九官鳥のイラストが書かれた張り紙をはり出した、あたしはあたまに来て、抗議にいくのだけドインターフォン越しに「自業自得でしょ」、といわれてそれ以上は話をする機会もとってもらえなかった。

あたしはついに引越しを決意するのだけど引越し先はこの街からずっと遠い、森のなかに決めた、「九官鳥を飼っても誰も文句を言わない場所」というのがあたしの第一条件だったの、ところが不運はまた続き、一年も経たないうちに九官鳥はノラ猫にさらわれてしまった、あたしは家のなかで三日泣きつづけてようやく涙が涸れるころに、ひとりの旅人があたしの家の扉をたたいた。「泊まる家がなくて困っている」とだけ言い、勝手に部屋の中に入ってくる、旅人の言葉はまるで異国の言語を聴くように耳に新鮮な話し方だった、あたしは不思議に思いながらも誰かと話がい気分だったから彼にシナモンの紅茶を淹れてあげた、彼はその紅茶の匂いが格別気に入ったみたいでいつまでも紅茶を飲まずに匂いを嗅いでいたから、そんなに惜しまなくてもまだいくらかもあるわ、と言うと彼は笑って紅茶を飲み干した、舌をやけどしたみたいで彼は犬のように舌をだして冷まそうとした、わたしは彼の可笑しな姿を少し笑ってしまう。

束の間、彼はあたしの森の住まいに滞在することになる、口笛ばかり吹いて何もし

なかったが、裏庭に育てている香草の面倒は見てくれた、彼が来てからあたしの香草はますます良い香りになっていくようだ、しかし実際のところ、彼は何もしていない、小川から汲んできた水を定期的に撒いてくれるだけだ。

ある夜、少しも眠気が訪れなかったから二人で森を散歩して横たわった大木にピニールシートを敷いてその上に座り、あたしたちは月を見る、満月に近い大きな月はあたしを雄弁にさせて、いろんなことを彼に話した、彼は自分のことは一切話をしなかったのだけど、「あなた職業は」とあたしがつまらない質問をすると「小説家」と彼は答えた、びっくりして名前を訊いたが耳にしたことのない名前だ、あたしは本を読むのはわりと好きでジェイムズ・ジョイスで学士論文を書いてもいた、ジェイムズ・ジョイスという名前がでた途端、彼は目の色を変え『ユリシーズ』や『フィネガンズウェイク』について語り出す。

夜が過ぎ去って月はいつの間にか消えて、朝焼けが地平線の彼方から訪れる、あたしはサンドウィッチを作って旅人に渡す、それから庭の香草も彼の上着に忍ばせる、彼は匂いに敏感だからすぐに気がつくかもしれない、彼はシャワーからあがってきて、何も言わずに上着を着る、彼が一瞬微笑んだそのときの表情をあたしは死ぬまで忘れないだろう。

「いつか、僕たちの好きな小説家の街―ダブリン―で再会ができればいいね」
「そのときは、またシナモンの紅茶を淹れてあげるわ。あなたももう少し有名になっていてね」そう言ってあたしたち二人は再会を誓った。

うずまきもよりの犬

空腹を感じて僕らは街の片隅のレンガ造りの塀を持つ、パン屋に入った。挽きたての珈琲と自家製ジャムをそろえた店でオーブンテラスには芝生が敷かれていた。混雑しておりじっくり選んでいる暇もなかったから、僕たちはそれぞれ「焼き立て」と言う札のたっていたバトルを買い、店を出て路上でちぎりながら食べていた。店の前で同じようにパンを食べていたひとは他にもいて、白い犬に分けている少年もいた。僕たちは近づいてぎょっとした。くすんだ白い毛にうずまきもよりの茶色いしみ。アンファンテリブルそっくりだった。それどころかアンファンテリブルに間違いないと僕らは喜び、クロエと僕は手を差し出した。けれどその犬は僕らに気付かず、夢中で少年の撒いたパンくずを食べていた。

「この犬は……？」

「ああ、つい最近みかけるようになったんだ。たぶん誰かの捨て犬だと思う。よく公

園をうろついているからこうして時々パンを食べさせに僕が連れだしているんだ」少年の顔は十三歳の頃の自分によく似ている気がした。

僕はアンファンテリブルのくすんだ白い毛を撫でてみた。アンファンテリブルはやっと僕に気が付いて僕とクロエにまなざしを向けた。懐かしい友人を見るような潤んだ目に見えたがそれは僕の勝手な思いすごしかもしれない。彼はひとしきり僕とクロエを見るとまたパンに夢中になった。それ以降、まるで別人のようにアンファンテリブルは僕たちを無視した。

「たぶん、この犬は耳が不自由だと思うんだ。だから僕が世話することに決めただよ」少年は誇らしげにそう言った。

ものかき

わたしのはだが海の色と同色になったとき わたしの存在に気がつくにんげんはごくわずかしかいなかった ある夏至のひ わたしは始まりのみさきの灯台がたつ崖のしたにねぐらをつくりねとまりをそこでしていた

やわらかいきれいなしろい砂浜がありそこにねころぶと 遠い海の星の砂が奏でる

さぎなみすらも聴こえるようだったから 目をつぶりながら海とひとつになつているとひとりのにんげんが目をまるくしてわたしをみている

そのうちわたしになにかをはなしかけてくる 真珠のような瞳をしてちいさなさかなのようにクチをぱくぱくさせている にんげんなどわたしにとってはわらい草のいっぽんにもなりはしない

けれどその真珠のような瞳をしたにんげんはあくるひもあくるひもまたあくるひもわたしのねぐらをおとずれる ごうを煮やしたわたしは朝靄うかぶまだほのぐらいしずかな海にそのにんげんをつきおとしてやろうとしたのだがにんげんは抵抗をせずになすのままにされてそのまま海におちていった

わたしはまた筏のようにわたしよりもさきに死んでいく者が憎くて憎くてならなかったから 死のまぎわでにんげんをすくいあげ のみこんだ水をはきださせてやった にんげんはよろこびまたそのしぐさがわたしの癩にさわるのだった にんげんはげいじゅつかだとみずからをしようして何をしているのだと問うと「ものをかいている」とこたえた あろうことかわたしをものがたりのなかにだしてよいかとたずねた

二十二通目の手紙

フラクタルと言う言葉は数学用語でいまだ厳密に定義されていない。二人は知っているだろうか。聞いたことがあるだろうか。たとえば君たちは海を廻るとき海岸線と言うものに辿りつくだろう。人間が作った図形はどんなに凹凸があろうとも拡大すればいずれ滑らかな直線に辿りつく。けれど自然は微視的に海岸線を捉えていき、拡大の倍率をどれだけ上げて言ってもそこに直線は存在せず、繊細な凹凸が繰り返されている。海岸線そのものが凹凸の形を地図上の大きさでも表現しているながらそれを拡大しても、なお相似的な輪郭の連続——このような現象を借りにフラクタルと定義する。フラクタルはもちろん人工的に図形を組み合わせることによって創造可能だ。だけど私が真に美しいと感じるフラクタルは自然の造形物だ。風と波の摩擦によってできた海岸線が全体と細部を相似形にしている。興奮してこないか。その偶然の事象に。きみたちは自身の輪郭を思い返してみればいい。きみたちは「海」と「森」の輪郭に縁取られている。海岸線同様に海は世界の様々な陸地と凹凸あるいは曲線を描きながら繊細に隣接している。もちろん曲線そのものも凹凸によってできている。そう、森もその形を人間が想像で作った図形にあてはめることは不可能であり、すべての森はひ

とつひとつその全体像を固有しており、その輪郭もまた様々な樹木の肌や枝ぶりによって複雑な形を成している。わたしが言いたいのは、きみたちは人間のつくったちやちな図形などではなく自然が産んだ繊細な凹凸の実態そのものであるということ、それだけなのだ。

旧市街の洪水

ホテルブルームハウスの部屋。冷たい雨が窓を叩いていた。僕たちは窓辺の椅子で向かい合い、故郷への帰り支度を済ませ、珈琲を飲んでいた。雨の日に飲む珈琲は美味いと兄が呟いていたことを思い出した。クロエは何も語らず、僕も兄のことを思いだすばかりで何を話せばいいのか分からなかった。

「わたしたちの旅に収穫はあったのかしら」

「海の巨人の正体を掴むこともできなかったし、『ダブリンアース』社をみつけることもできなかった。おまけにアンファンテリブルはダブリンの街に消えてしまった」
「誰にでも行きたいところはあるわ。アンファンテリブルは首輪をつけていなかったじゃない。彼は彼の自由意思でダブリンを歩いていたのかもしれない。わたしたちをみつけても帰ってくることはなかった。住みたい街があるのに無理に引き離してしま

うのはかわいいそうよ」

「そうかもしれない。目に見える収穫はなかったかもしれないけど、こうして色々な出来事に遭いながらも特別な時間を過ごすことができた。クロエ、帰ったらきみは何をしたい？」

カップを傾けながらクロエは少し黙った。眠そうな目をしていて。大分考えてから「ゾンビ映画を一日中見たいわ」クロエはそう言った。

テレビでは洪水のニュースが伝えられていた。ダブリンのリフィー川南側にある旧市街で大洪水が起こっているそうだった。僕とクロエはテレビの方をぼんやりとみつめる。

アナウンサーが「旧市街に溜まる水の成分を分析したところ、どうやら海水の成分とよく似ていることが分かりました。なお、この雨の影響でもなく、津波発生もありませんでした。専門家が洪水の原因について調査中です」と伝えている。「海の巨人のせいだろうか」僕は呟いた。「分からないわ……。でもグスターフの夢からやっと解放された気がする」

クロエがそう答えた。ダブリンの街に降る雨はまだ止む気配を見せない。

二十年後の浜辺

僕とクロエは三十五歳を超えても結婚もせず、恋愛らしいこともせずお互いが独身のまま友人関係を続けていた。クロエは生物の教師になり、僕は住宅設備機器の営業をしている。時折休みになるとお互いの家で昼食を作って、シャンパンを飲み映画や本の話をした。公園に散歩に行くこともしょっちゅうあった。周囲の友人たちからは結婚を勧められたが僕たちは、不思議とそれに従わなかった。幼馴染の友人という関係以上は望まなかった。

ある日、ファイエット郡から三十キロほど離れた浜辺に巨大な鳥賊が漂着したという知らせを聞いた。腐臭が浜から少し離れた港町にも漂ってきていて、住民たちはマスクをかけて歩いていっているらしい。巨大鳥賊はまだ回収されることなく、浜辺に横たわったままだと聞く。

先月買ったばかりの中古車のクーペを走らせて海沿いを走る。海は穏やかなのに、色が灰色だったから何だか気分は晴れなかった。やがてその浜辺に到着すると報道陣や野次馬たちでいっぱい。巨大鳥賊を見るのはまるで順番待ちだった。かきわけてその鳥賊の正面に出たところ、トラックのタイヤほどの瞳が僕を見据えた。もちろん、動かない。周囲は鳥賊だ、鳥賊だと騒いでいたけれど僕にはどうもそれが鳥賊に見えなかった。

「いま、あなたが考えていることがわたしには分かる」クロエが言った。
「それは僕も同じだよ」相槌をうってそう返した。

(了)

この物語はフィクションであり、実際のレキシントンやファイエット郡、ダブリンの街に創作を加えているので、本物とかけ離れていると思われます。

平仮名五十音喧嘩（文庫版）

「あっちいけ！」

いきなり突き飛ばされた。僕の身体はクラスのみんなと比べるとかなり小柄だ。腕つぶしが強くないタイラ君にも簡単に突き飛ばせた。僕は床に倒れ込み、いてえっと思わず叫ぶ。それがなんだか情けなくて誤魔化すようにタイラ君のことを思いつきり睨んだ。一瞬、びくっとしたタイラ君だったがすぐに睨み返してきて、

「カナ君が悪いんだからな！ 小さいクセにいつもナマイキだから……」

教室ではクラスメイトが何事だと此方を見ている。僕も何が起きているのかよく分かっていない。一番の友達だと思っていたタイラ君が急に怒り出したのだ。ケンカなんてしたことなかったのに。どうしてなんだろう。今までの友人関係はこちらの勘違いだったのだらうか。不安に思う、と同時にむかつきもする。なおさら彼が怒っている理由を聞き出したいと思った。僕は一層睨む力を強めた。少

し眼がしんどかったけどタイラ君が睨み続けている限りは負けてはいられない。鋭い眼光が僕とタイラ君の間で衝突する。しばらくその状態が続いた。教室内で先生を呼ぶかどうかを相談しているのが耳に入ってくる。冗談じゃないと思った。それならいっそのこと突き飛ばされたお返しをしないと気が済まない。そう考え、立ち上がってすぐにタイラ君に体当たりをした。うっ！と、タイラ君が呻いた。チャンスと思った僕は勢いを利用して押し倒し、タイラ君の身体に馬乗りになった。ぎゅっと力を込めて拳をつくり、それをタイラ君の眼前に突き出すと、

「てめーは僕を怒らせた」

と言いつ放つ。これは父さんが持つ漫画に登場するキャラクターの台詞だ。奇妙なものだ。自分が強くなったように感じる。『強い言葉』——それを行使することによって僕たちに力を宿らせる。良くも悪くも。無差別に。そして無自覚に。

ぬめりとした感触が手の甲を覆った。気付くと僕の手は血だらけになっていて、眠ったように倒れているタイラ君のものか自分のものかは判然としない。己がどのくらい彼に拳を浴びせたのかなど、今となっては興味がない。現在、僕の関心は何とも言い表せない爽快感を自身が感じていることだった。しかしタイラ君も一人だけ殴られたわけではない。必死の抵抗を示したのだ。僕の肉体にも多大な負荷を与えている。だから完璧にすっきりしたとは言えないものかもしれない。

変な気持ちだ。妙な気持ちだ。喧嘩なんてこれまで一度もやったことがないので予のおさめどころが分からない。高揚した自分が自分じゃないみたいだった。

真っ赤に染まった手を眺める。鉄の匂いがして手が金属に変化したようだ。意味もなくぺろりと血を舐めとる。そうでもしないと心まで鉄製になる気がした。無論そんなことはない。でもぺろぺろと舐め続けた。すると、クラスのみんなが目を逸らすようになった。何を怖がるのだろうか？ 不思議でたまらない。先生もいつの間にかやって来ていたが、僕を眺めて立ち尽くすだけだった。

やれやれと頭を振って、僕は教室を出るために歩き出した。

「歪みないねえ、本当に君は。でも言ったはずだよ——それがナマイキだって」

よく確認しなかったのがまずかった。声が出た、後方を急いで振り返った。ふらふらで血みどろながらも僕の目前に接近したタイラ君の姿がそこにはあった。理解した。僕は本能で把握したのだ。己の敵と、それに伴う自身の生命の危機を。

「ルールを破ろう、一度だけ。最大の罪を背負おう。馬鹿野郎のお前のために」
憐憫の眼差しを僕に向ける。何故そんな顔をするんだ。何をしたというのだ。ろくでもないど理解していても言わないと分からない。変える術がない。突然な

わとびで首を強く絞められた。脱出しようと試みたが相手はびくともしない。何をして駄目だ。意識が遠くなる。彼はどうしてこんなことを。タイラくんらんろうろう——………………。彼の意識はそこで完全に途絶えたのだった。

(平仮名五十音喧嘩 了)

※作品の性質上、雑誌版と文庫版は表現が少々異なりますがご了承ください。

意思のゆくえ

小野寺那仁

「三十歳まで生きられる気がしないよ」千草が言うがその前の言葉は聞き取れなかった。寄り添う影のような志保が千草の隣りに座っていた。私はこっそりと千草から手紙を貰っていた。私の書いた作品を千草が主演で演じたものの評価はとても低かった。私は仲間たちと口論になったが誰も作品を書かないから仕方がない。私たちは解散することになった。私は反対した。存続を希望した。私がつくったサークルだ。千草は「どっちでもいいけどあたしはあんまり来ないよ」と言う。それは承知していた。病気のために学校に来るのも週に二三度だったのだから。志保は千草のためにノートを取っていた。

「宗像でも誘ってみたら」藤堂は苦み走った表情を浮かべていた。笑みとはうらはらに眼は真剣そのものだった。

「話したことないから」私の代わりにのように千草が言った。千草は無意識だったかもしれないが、性質の悪い冗談にしか聞こえない。宗像が話してくれるのなら彼でもよかった。だが彼が話しているのを誰も見たことはなかった。

「だからああいう陰気な役は俺はできないんだって。あれは宗像くらいにしか演じら

れない。もっとも演じているというよりもそのままといった感じだけだな」わからな
いでもなかった。無気力と退廃を記述した私のシナリオは受け入れられるものではな
かったのだろう。千草のくすぐったい声が救いになっていただけだった。

「とにかく俺はもういいよ。池田もやめたけど俺もやめる。別にみんなに呼びかけて
るわけじゃないけどみんなやめるだろうから」

「理由は？」

「池田も気に入らなかったけどお前の作品も気に入らないね。面白くなかったから」
私には痛烈な打撃だった。前回の作品は何人かは面白いと言ってくれたのだが、私自
身もあまり評価していない。ただ藤堂に言われるのは癢に障った。だったら自分で書
いてみるよと言いたくもあった。

志保は黙り込んでいた。志保の父親は放送作家だった。もう何十年もラジオの十五
分番組を担当している。作品を見てもらおうかという話になって志保の家を訪ね、面
会したのだが彼は私たちをまったく相手にしてくれなかった。気難しそうな人だった。
物別れに終わったと私は思っていたが解散は決定的であった。自然に誰も来なくなっ
た。いままで私を事あるごとに擁護してくれた池田でさえ今回の私の作品には失望し
たと直接には言わず間接的に誰かに伝えていた。

その日の午後千草は倒れて体操着のまま救急車で運ばれた。車が走り出した後には志保が佇んでいた。

どういうわけだか暑い盛りに球技大会が行われる。真夏の日差しの中では千草でなくても倒れる生徒は多い。授業の時は眠ってばかりの小堺や島野が浚刺とプレーしている。鋭い当たりが外野に抜けて面白いように点が入った。そのナインの中に場違いであるが私もいた。ルール上、全員参加が義務づけられている。ルールを破れば失格で敗者となる。それで次々にさほど上手くない者は交代していくのだがその試合で私は球がよく見えたらしくヒットを重ねていた。初めて守るセカンドにも打球が飛んでこないのが幸いしてノーエラーで凌いでいた。守備機会がほとんどないのに泥だらけの体操着を見て仲間たちは笑い転げていた。よくは覚えていないのだが何度か足がもつれたようだ。無意味に何度か転んでいたらしい。私たちは勝ち進んでいた。上級生に勝つことはよほど珍しいことらしくいつのまにか同学年は全て敗退していた。それ以外のクラスも私たちを応援していたのだった。そこには藤堂の姿もあったが、目が合いそうになり慌てて伏せた。藤堂も同じくそっぽを向いている。藤堂の自意識が鼻につく。やたらと委員長らしく振る舞う。そのくせ舞台になんか興味を持つ。私の中の倫理ではありえないことだった。たとえば池田のように三日間の球技大会の間、ズ

ル休みを決め込んで東京に遊びに行く方がよほど気が利いているじゃないか。

藤堂は私たちを監督するかのようには花壇の最前列にどっかりと座っていた。その時になって藤堂の隣りに座っている男が制服姿であるのに気がつく。小首を傾げ藤堂が何か語りかけている。男がうなづく。そう、かすかだが男の頭がぐらりと揺れたのが見えた。セカンドから三塁側のベンチの更に遠方だから目を凝らさないと見えないのだが、藤堂の隣りに彼よりもひとまわりも体格の良い男が座っている。彼の周囲には黒い渦巻が発生し死角になっていた。彼が誰なのか見極められなかった。褐色の小塚がふざけたスライダーを投げ込んで上級生はポップフライを打ち上げた。振り返りもせずマウンドを降り小塚の吹く口笛が後に残った。ダグアウトに戻ると日頃はロクに口も利かない仲なのに、それからなんとなく反りが合わないと思っっているのに、気持ち悪いほどに互いにプレーの巧みさを褒め合っている。

「あんな強烈な当たりをよく捕ったな」

小塚はサッカー部、サッカーでは補欠で試合も満足には出させてもらえず最近腐っていた。煙草の味を覚え、盛り場で他校の女子を口説く毎日。数日前、志保がうるついていたと教えてくれなくてもいい情報をもたらした。他校の不良とつるんでいた。不良と決めつけなくてもいいだろうと私は言うのと、いえいえ不良ですよ、俺知っ

てるんだ。あれはとんでもないよ。キミ、仲がいいんだろう。志保と。あんなのときあうのはよしたほうがいと止めてやれよ。あ、それからキミのサークルもって頑張った方がいいよ。藤堂や池田が協力的じゃないそうだがね。まあ癖の強い奴らを集めているから上手くないのはわかるけど俺は個人的に応援してます。ところどころですます調で語るのは彼の癖だった。なんで内情を知ってるんだろうね。私が尋ねると秘密だと答えた。

発散する汗がコロンの香りと入りまじって匂うので以前の会話が思い出されたのだ。「小堺くんみたいにおーデコロンをつけてよ」千草のまた別の日の言葉が響く。性的な気分を開放する匂いだ。入りまじった場面に翻弄される。私は千草に自分のプレーを見てほしかったのだろうか。それはわからない。ただ志保に見てほしかったとは思わない。どっちでもいい。そうすると比較するならば私は志保よりは千草の方が好きなのかもしれない。

気がつくとも藤堂がおなじクラスでもないのにダグアウトの中央に立っている。傍らには同じくらい体格のいい宗像もほとんど無表情ながらもかすかにはにかんで直立していた。ふたりとも体操着ではなく制服姿だった。宗像だったのか。私は制服姿で思い出した。花壇からここまで彼が移動してきたことは奇跡だった。藤堂が連れてきたにせよ自分の意志にせよそれは奇跡だった。小堺をはじめ他のメンバーは呆気に

とられ声を掛けていいものかどうか迷っている。私たちの日常がふつふつと戻ってき
てしまったのだ。

「なんだ、いたのかよ」小堺はぶっくらぼうながらも多少は考えてそう言った。彼が
何か言わなければ気づまりな雰囲気はいっそう濃密に立ち込めていただろう。誰もが
宗像から目を逸らしていた。それでいて意識しないわけにはいかなかった。意識は宗
像に縛られながら私はフェンスの金網にくっつきりと真夏の太陽が動いていくのを眺
めていた。すると意識は焼き尽くされていく。宗像に立ち向かう勇気を与えてくれる
ようだ。時間の経過がほかのメンバーにも同様の効果を与えているようだった。何も
起きはしないんだ。コミュニケーションなんてくそくらえだ。私はいつのまにか小堺
はじめ他のメンバーに同化していた。はつきりと確認できるわけでもなく何とはなし
の直感に過ぎないがおそらくは間違いないであろうと私は信じていた。いつしかその
気分は藤堂をも巻き込んでいく。

「キミたちのそういう態度って俺は気に入らないな」そうは言うものの小堺の言葉に
反応したのではなくむしろ同調しているのだ。

「だいたいルール違反じゃないか？」

「全員参加しなきゃいけないんだらう。宗像は試合に出ていない」

みんなの創りだした雰囲気抗っているのだ。藤堂は細切れに畳み掛けてくる。誰

に言うでもなく。だが私に向けて言っているのだらうとは想像できる。

「だから今気づいたんだよ。これから出ればいいんだらう？」小堺は試合に負けたくないものでそう言った。

「俺らとの試合にも出ていなかったぜ」

「藤堂、君は違うクラスだからわからないかもしれないがそんなことを今さら蒸し返すなよ。授業でも先生は誰も宗像には当てないんだ。何も答えないのが分かりきっているし、成績は君より遙かにいいそうだから。どうしてそんなに気になるんだ」

「いや、俺も気にしてるよ」私は思いがけずにそう口にした。しかし雰囲気から発せられた言葉を人は黙殺する。小堺は匂いを嗅ぐように宗像の頬に顔を寄せた。

「どう？ 出場する気あるの？」直立して固まった宗像はいつものように、そう、まったくいつもと変わらずはにかんだ。声を掛けてもらったのが嬉しいようにも受け取れる。けれどもやがては目の色が少し変化して輝きを失いはにかむのもやめてしまう。ただの愛想に過ぎなかった。それもいつものことであって私たちはすっかり慣れていた。

「ま。見てのとおり、やる気はまったくないようですな」

「だからと言って」藤堂は絶句していた。

「無理強いしちゃあダメだって、田畑先生も言ってるんだぜ」

「悔しいとか悲しいとか感情はないんだろうか」藤堂が言う。私は思い切って自分の考えを言ってみる。

「彼は自分自身と闘っているんだ。でも勝てそうな気がしないんだ」よせ、と宗像の方から声が出たが、それはここにはいない池田の声のような気もした。そして口に出して言ってみたもののこんな考えは自分のものではなかった。突然の闖入者に調子が狂ったのか、その回は三人とも凡退した。善戦はしていたが零点に抑えられていた。相手も零点であったがこれまでとは違って勝てる気がしない。

数人が宗像の制服の釦を外し始めていた。私は行動に加わらなかつた。

宗像は体操着を制服の下に着ていたのだった。けれども動く気配は感じられなかつたので私たちは守備に散った。何人かは確かに声を掛けて守備に着くように促していたのだろう。だが、私は諦めていた。藤堂でさえも諦めた様子でベンチの片隅に腰を下ろしていた。

マウンドに立った小塚は身体をくの字に折り曲げプロの投手を真似て長い間合意を取っておどけていた。嫌でも視界に宗像が入ってくる。彼は何らかの病気なのだろうか、目を追うごとに身体は重く石化している。彼はちょっとした動作をするにも顔を顰めていた。精神が肉体を蝕んでいく。そんなことであるのだろうか。

バットがぐるりと廻ると三遊間が割れてボールが転がっていた。次の打者はライト

への大きな飛球でライトの川口が取り損なった。セカンドがバックアップに外野に走って行く。ひよっとしたらセカンドで刺せるかもしれない。私は走り寄った。川口はワンバウンドで捕球して私に思い切り投げてよこした。ちようどグラブのところへ私の意志とは無関係にボールは吸い込まれた。そこへランナーの脚が滑り込んできたのだ。一瞬、ベースを踏む脚の方が早いと私には思われたのだが審判はアウトを宣告した。そのとき私の手首がランナーと交錯して振じれていた。激痛にうずくまった。しばらくはグラブもはずせなかった。審判をしていた田畑先生や上級生が覗き込んでくる中で私はグラウンドに横たわりのたうちまわっていた。

「交代してくれ」私は言った。

「もう交代する奴なんていないだろう」小塚が言う。

「いるだろう」

「無理だろう」

ベンチから何人かが無理やりに宗像を連れてきた。彼の少し大柄なだけにずっしりとした質量をとまなう肉体が目の前に現れた。私は立ち上がった。手首はぶらさがっているように情けなくたれさがっていた。宗像の眼の前に手首をつきつけた。

「見てのとおり、折れている。キミがやるしかないんだよ。代わってくれ」

私は右手でグラブを差し出した。宗像の手が伸びてくるとは期待していなかった。

けれども彼の手に渡せばきつと受け取ってくれるだろうと信じていた。グラウンドに
いるすべての人が注視していた。彼の手にわたる瞬間に拍手する者や何やら声を掛け
る者もいた。ただ私はよく覚えていない。私の役割は終わったのだ。ボールをしまか
りと手渡した。私はランナーに手伝ってもらいグラウンドを後にしはじめた。ところ
が急に静けさが襲ってきて何やら冷たいものを背後に感じた。ふりかえると私のグラ
ブが地面に静かに落下していった。振り返るといつにも増して哀しい眼と苦痛をこら
えているはにかんだ顔がそこにあった。(了)

黒い秋の訪れに

安部孝作

※

階段を上りきって左に進むと突き当たりに工場主の部屋がある。吊り掛けられた金属製の通路が、固い靴底に打ち鳴らされ、高い天井に音を反響させる。扉の窓にはブラインドが掛かっていた。取り込み中のようなだった。一応扉の前で待っていた。手にしている書類が扇風機に煽られている。工場の内部で唸っている機械、軋んでいる歯車や発条、鉄板と銅線の巨塊、この複雑に連絡しあう単細胞生物の群体——反復的に生産される小さな金属の数々と、型違いの系統種の数々——進化の袋小路に突き当たった部品の塊——が発する音は、結局通り沿いの木立で翅を擦りあわせている蟬の声に負けてしまう。噴出する生命は短くとも激しく、哀感の漂う様は遠く北国の詩人の姿を思わせる。食堂で他の工員が話しているのを聞いていた時、昆虫は地球外から飛来した生物だという話を聞いたことがあるが、なかでも蟬は土星の生命体だったとい

う。話していた男は肺を病んでいるような顔色をしていて、以前内装業の会社で働いていた時、石綿をマスクなしで扱っていたというから、実際病んでいるのかもしれない。彼はカレーライスのスプーンですくったまま、ちっとも食わずにしゃべり続けていた。前に座っていた二人の男は相槌こそうってはいるが、話している男の後方にあるテレビを見ていて、ちゃんと聞いているのかどうかはわからない。テレビでは熱中症での死亡者数が増えていることを報道していた。

手摺に寄りかかり、工場の内部を見渡す。外から差し込む陽射しが影となす境の、波打つ縁が気になって見つめているうちに、感覚の一切が鈍磨して、次第に見えているものを見ているとは思えなくなり、見ているものは見られていることから解放され、人には見せることのない姿を見せ始めているような気がして、明暗の扉が開かれて覗き込もうとする、見えているものには見ることのゆるされぬ世界が足音を立てて——それは甲高い、細いヒールが釘打つ音で……。扉を開けて、一人の女性が出てきた。亜麻色の豊かな髪は緩く巻かれ、気だるげな瞼に切れ長の目、その奥には大きな、漆黒の瞳があった。帽子も服も黒く、その人の肌の白さ、唇と頬の赤さが際立っていた。挨拶を交わす様に一瞬眼が合い、その眼は強く印象に残り、瞳孔の奥から漏れ出していた赤い光が鮮明に思い出される。高貴で知的な雰囲気を漂わせていたのは、服装によるものだろうか、もう何度か眼を合わせたことはあるが、まだその女性のことを何

も知らないのだ。誰なのかも、一体工場主とどういう関係なのかも知らない。

ノックを三回して中に入ると工場主は窓際に立ち、背を向けていた。どうやら携帯電話を弄っているようだ。「失礼します」、と言うと工場主は漸く気が付いたようで、「お前か。まだ少し外で待ってくれないか」と言う。黙ってまた外へ出て、手摺に寄りかかると、高いヒールの釘打つ音が下方から聞こえてきた。手摺を乗り出して見下ろすと、切断されて山積みになっている材木の間を、あの女性が歩いている。綺麗な黒の服の通った後は空気が渦を巻き、舞い上がっている黄色い木粉が吸い寄せられている。

ちょうど昼休みのベルが鳴った。このベルの音が、どの機械の発する振動音や軋み、打音に比べて大きい。これもまた蟬と同じく、生命の、その欲求の鳴らす音には違いない。そして警報としても用いられるこの種のベルは、暗鬱と恐怖の入り混じった気を掻き立てる。それが飢餓感を盛り立てるのだろうか、こうして食欲解放の許可を報せる音として用いられていると思うと、人の欲求の罪深さを覗くような心地になる。仕事に没頭していた工員は顎の先で雫となった汗を拭いた。

※

電車がひとつ通るたびにテレビの映像が乱れる。じつと野球中継を眺めていた中年はしかし、何事もないかのように依然テレビに釘付けだ。眼の前におかれた気の抜けたビールと冷めた餃子が震えている。蠅が暴れ回り、蜘蛛の巣が撥ねる、埃や木屑が轟音とともに落ちて来る。明治に敷設して以来改修の進んでいない煉瓦造りの高架は、未だに多く残っており、ここの中華料理店へ龍安もそうした高架の下で営まれていた。

小さな音量で実況と解説の途切れがちな会話が流れている。厨房の換気扇やボイラーが低く唸り、店主が包丁で固いものを切っている音がする。壊れかけの扇風機が力なく、不器用に風を送っている。そのうち、僅かな慣性に従って数回回転し、そのまま止まってしまふだろう。時が止まったようだった。ここはいつでもそうだった。

下駄の齒が打ち鳴って一人の青年が入ってきた。いつまで経っても日本語が話せない店主が、通訳兼使い走りとして雇っている学生だ。出前から還って来たところで、空いた机に岡持ちを置くと、懐から取り出した蝦蟇口を手に空けてレジに入れると、店主に中国語で何やら話し出した。店主は短い返事をしただけで黙りこみ、仕込みを再開していた。ジョッキが空いたのもう一杯頼むと、青年は陽気な声で返事をして冷蔵庫から瓶をとり、栓抜きとともに渡した。栓を抜き、ゆっくり注ぐと余り泡が立たなかった。

「最近みえなかったですね」青年は近くに腰かけ灰皿を寄せると、啜えた煙草に火を点け、燐寸を揉み消した。「忙しかったんですか？ 少し疲れた顔してますよ」微笑んでいる青年の声は乾いていて、軽かった。

「どうかな。たしかに忙しかったけれども、それは誰でもそうだろう」

そこに蛍光灯に引き寄せられた蟬が一匹、店内に迷い込んできた。青年は箒を取ると、追っ払おうと柄を振り回した。しかし蟬は俊敏に飛び跳ねて、蛍光灯から離れて行くうとしない。

「これが終われば連夜実験レポートです、今夜も。忙しい事には変わらんですけど」青年は上を向きながら、苦しげにそう言った。蟬は一向にとらえられない。

「そうだ、変わりない」

「そうですか？」青年は諦めたように一回腰を下ろし、燻らせた。そしてすぐに、そうだ、と思いついて立ち上がった。「一回電気消してみますね」青年はスイッチを切った。続けざまに蟬を狙って箒を振ると、蟬は軽快に避け、そのまま煌々と光るテレビに引き寄せられ、壁に留まるとじりじり鳴き始めた。

「さて、勘定を頼むよ」ビールを一気に飲み乾し、ポケットから取り出した千円札をカウンターに載せた。「またどうぞ」お釣りを渡しながらそう言った青年の声はやはり、乾いていて、軽かった。

※

灰色の空から不透明な雨がビル群に降るのを眺めていた。窓の前に立っていると、正面遠くにあの看板が目につく。この街を監視するかのような目の描かれた政党看板だ。はがれかけた白塗りの壁に黄色や青、緑に赤で明確な輪郭をもって描かれている。その目は厳かで、憐れむような目つきで常に街を見下ろしている。誰もがあの目を前に、見透かされ、裸にされた気分になる。なにもかも見通す目をもつ者は不幸だ。

今朝は朝食を食べる気にならなかった。医者からは毎朝きちんと摂るようにと言いつけられていたけれども、とにかく今日は食欲がなかったのだ。この雨のせいだ。昨晩のうちから雨はしとしと降り始め、サッシの隙間を抜けて湿気が入りこんでいた。どこか近くのビルの屋上で騒いでいる連中がいた。爆竹が鳴るたびに興奮して上ずった声、鋭い叫び声が響き、三十年も前のダンス・ミュージックをかけて遊び始めた。それから硝子の割れる音が時折して、何時までも終わりそうになかった。紫色のレーザー・ポインタが時折部屋の中に照射され、天井の一点を中心に、部屋の中を霧のようになりに光が行き渡った。まどろむうち、そうした音が昔、自分も学生だったころを思い出させた。しかし、思い出させた事柄は余りに少なく思えた。もう忘れてしまったのか

もしれない。疑い始めると穴に落ちるような感覚がした。眠気が強まって来たようだった。

枕に据えられた首が、どうも収まりが悪く、息苦しい。集中出来ずにいるとうとうとはするのだがちっとも寝つけない。そうなるの外音も気になって仕方がない。湿気が皮膚に張り付く。布団の中は蒸し暑くなって、蹴りあげる。五分も経たないうちに布団から脱け出すと、扇風機を着けた。風を浴びていると気分は穏やかさを取り戻した。だが、再び布団に戻るには躊躇われた。ぼうっとするにはあまりに気が昂り、焦りを感じていた。だが一体なにを焦っているのか、何から追われ、何を追っているのかわからない。鬱勃とするさまざまな疑惑を払いのける必要があった。慌ててテレビを点け、リモコンを落とした。暗い部屋の中では少し眩しく、いつもよりも色調が白んでいた。その中で笑顔をつくるアイドルは、普段より数段色鮮やかに見えた。何を話しているかには気がつかず、ただ漠たる気持ちで画面を眺めていた。移り替わるありとあらゆる色、剥がれ落ちた金属片が眼に降りかかってくる。それは眼球に突き刺さってくるようで、次第に眩しさは痛みに変わった。コカ・コーラのコマージュルが真っ赤な映像を点滅させている。テレビの光、蛍光灯の光、こうした光は人類が未だ嘗て体験したことのないほどの刺激をもたらしている、それはもう耐えがたいほどの刺激を——何よりもこの視覚刺激への罪悪感に耐えられなくなる日もそう遠くは

ないだろう。破片はさらに眼球を突き破って脳にまで達したのか、軽い頭痛がして、そのまま視界が暗転してしまった。

※

工場の中は照明がついていないため真っ暗だった。何かを忘れ物したのか、懐中電灯を頼りに狭い通路を進んで行く。途中ねじを踏んで転倒しそうになったり、台から頭が飛び出していた金鋤に膝をぶつけて痛めたりした。どこかで生き物の気配がして、慌てて灯りを向けると鼠の死骸を啜えた猫がこっちを睨んでいた。いつも歩き回っている工場内の通路も、夜中に懐中電灯一つで歩くと全く違う様に見える。だが確かに、ここはいつもの工場ではないという気がしてくる。周囲をぐるぐると照らし出すと、本来スイッチのある場所に禁煙ポスターが貼ってあったり、機械の塗装の色が変わっていたりする。

コンベアの上にはなぜかマネキンの首や上体、腕や足がばらばらになって並んでいる。近づいて手に取ってみるとまだ温かかった。精巧にできていて、質感も人の皮膚とそっくりだし、この顔も見たことがあるようだ。誰の顔が思い出せずにいると、プザーが鳴ってコンベアが動き始めた。あちこちの歯車が動き始め、モーターが呻吟してい

る。コンベアにはいくつもマネキンが乗っていて、次々と目の前を流れてゆく。こんな時間に誰が機械を動かしているのかと思ひ、階段を上がって回廊を進んでいく。ところが、いつもの通り歩いてても機械室に辿りつかない。真つ暗な工場の中をいくら歩いてても同じ場所を行ったり来たりしているようだった。

やがて疲れてしまい、欄干に寄りかかった、その時、——肘が金属の棒に触れる感触がない——慌てて脇に視線をやると、そこに欄干はなく、下方に幾百もの大きな歯車がか複雑にかみ合っている機械の内臓が露わになっていた。だが重力は質量を見誤ったのか、それとも特殊な気体が身を包んでいたのか、紙切れが高所からひらひらと舞い落ちる様に、この身体もひらひらと落ちて行った。そして静かに機械の上にかぶさっていくと、駆動している歯車は熱を持っていて、首筋や太腿を酷く火傷した。続けざまに服が剥ぎ取られ、毛髪を釜り取られ、指を切断され、皮膚が引つ張られたと思つたら、そのまま肉が少しづつ歯車の奥へと、骨と共に細かく碎かれながら消えて行った。手足の一本一本、肋骨の一本一本潰されていった。その間、悲鳴をあげることなく自分が落ちてきた通路をじっと睨んでいた。そこに誰かの人影を感じたからだ。誰かがそこから見ていると思ったのだ。

※

肩を叩かれて酷く驚いてしまった。大袈裟な動作を伴って飛び起きると、爪先に掛かっていたコードを引っ張ってしまい、卓上照明が転倒するとともにペン立てが床に落ちた。何本ものペンが散乱したが、そばにいた同僚が急いで掻き集めてくれた。その同僚はちょうどシュレッダーで不要になった書類を処分していた。振り向くと工場主が眉を顰めて立っていた。

「昼休みはもう終わったよ」そう言って書類の挟み込まれた一冊のファイルを差し出した。

「すみません、今取り掛かります」

「居眠りなんて珍しい。顔色も悪いが、寝不足なのか」

「大したことはありません」

「夜更かしもほどほどにするといい。そのうち本当に眠れなくなってしまう。そうだと後でちょっと来なさい。大事な話があるのだった」

工場主は励ますように背中を軽く叩いて事務室から出て行った。ペン立てを直してくれた同僚に「ありがとう」とだけ言って、早速仕事に取り掛かった。二時間ほど集中したところ、挟まれていた新たな帳簿と在庫リストの計算はほとんど終わった。途中コーヒーを淹れに給湯室へ立ったが、その時女性の同僚三人が工場主について噂をし

ていた。どうやら不倫をしているような気がするの、と一人が言うと、もう一人が、ああ、と納得したように相槌を打った。最近電話口でもめているのが聞こえてきてね、見ると工場主だったんだけど、どうやら相手は奥さんだったと思うの、と根拠を添えた。するともう一人が、ねえ、あの人見たことある？ 時々工場主の部屋に出入りしている、お金持ちそうな女、と訊くと、さっきまで黙って紅茶を啜っていた一人があるよ、と答えた。あの人とても綺麗ね、でも多分不倫じゃない気がする、と落ち着いた声で言うと、後の二人は少し醒めたようで、何もその人と不倫しているとは言っていないわよ、と言って、再び噂話を続けた。黙っている一人は、なにか物思いにふけるような面差しで相変わらぬ紅茶を啜っている。

コーヒーを淹れて一息つくくと、残り少しの仕事を仕上げて工場主の部屋に向かった。昼間でも証明がなければ薄暗い工場の中を、いつも通り進んで行く。工場が急に変わることはないのだから、それで迷うこともない。時々見る禁煙ポスターも、夢で見たものとはデザインが異なっている。しかし見慣れているにも関わらず、きよろきよろ見渡して歩いていると、急にこの場に自分が馴染まないように感じられてくる。初めて訪れた土地で感じる緊張感が胸を撃った。その時、——足元が不覚だった——転がっていたねじを踏みつけてしまい、滑って転んでしまった。傍にいた工員が大丈夫ですか、と抱えて起こしてくれたが、暫く呆然としていた。すると不注意は重なり、台

から飛び出していた金鎚に膝をぶつけて痛めてしまった。やがて階段に差しかかった。鉄板を撃つ音が何重にも響く。

そのうち踊り場から階段に足を掛けてすぐ、誰かに呼び止められた気がして踏みとどまって振り返った。壁には姿見が掛かっており、自分の背中と驚いたような横顔が映っている。映っている自分の姿は、普段自分が思っているよりも人間らしくないと思った。そこで立っている自分は石像のように固く、無表情で、現実には存在する自分よりも、より存在しているようだった。そして本物でありながら霞のような存在しか持っていない自分に対して、その質量をもった存在は威厳を発してささえるようだ。その座を譲り渡せと、今にも本物の自分を追放してしまいそうだった。実際彼がぎょっとして硬直していたのは一瞬で、彼の視界から虚像が消えるのと同じくして、前方を見、階段を上り始めていた。だが背中には、いまだに消えない虚像の気配が漂っていた。

※

窓からは強い日差しがさしっていて、思わず手を翳すほどだった。逆光で窓際に立っている人も黒い影だけになっている。その影の周りを碎けた蜻蛉玉が万華鏡のように

様々な形を作り出している。その影は丸みを帯びた曲線で縁取られ、肉体の古典的な美しさを露わにしていた。恐怖のあまり混乱しながらも陶然とし、激しい頭痛と吐気に襲われながらも、目眩の浮遊感に肉体を忘れる快楽を覚えていた。その場で倒れ込み、そのまま横になっていると、どこからか工場主の呼びかける声があった。そして日光が突然弱くなり、室内は真っ暗になった。

「大丈夫か。痙攣してるぞ。一体どうしたんだ」そう言いながら工場主はカーテンを引いているようだった。「私がないうちに何があったんだ。勝手に入ったことはともかく、どうして倒れていたんだ」工場主が駆け付けて抱き起してくれた。そして肩を組んでソファまで運ぶと、暫く横になっているといい。寝不足で疲れているんだろう」

そうして誰かが蛍光灯のスイッチを入れる音がした。この時視界がまたも暗転したことに気が付いた。真っ暗で何も見えない中、忙しなく動き回る足音が一つ聞こえていた。そして微かに煙草の臭いが染みついたソファの上で横になっていると、誰かが扉をノックする音がした。工場主が扉に近寄り誰が来たのか確認したのか、僅かに間を置いて「どうぞ」と、扉を自ら開けた。

「お待ちしていました、どうぞかけてください」

工場主のその声の後に聞こえてきたのは、あの細いヒールの釘打つ音だった。あの

人がまた工場主を訪れている、そう思うと腹の裡がむずむずとして、僅かばかり痛みが感じられた。あの眼の赤い輝きを思い出した。眼も見えず、声も出せず、力が入らず身動きもままならないため、まるで捕縛されているようだった。

「どうやらあなたがいらっしやる時は晴れと決まっていますね。今朝はまだ驟雨が止まずにいて、雲がどんよりとかがつていたのですが、今ではこんなに晴れて、空は真っ青ときた。太陽に愛されているのでしよう」

「それなら廷臣の雲にもこぞって歓迎してほしいくらいです。出かける度こんなに暑くては、偉丈夫のあなたのような人でも身が持ちません。そうじゃないかしら」

「全くです。こうして屋内にいないと、肉体はもとより、頭蓋骨まで溶けてしまます」

「冗漫な挨拶はここまでにして——」

「ちょっと待ってください」

工場主はそこでいったん口を噤み、ソファへ歩み寄ると、ひっそりとした背中に向かって「そろそろ起きられないか」と訊いた。しかしまだ口もきけないため、返事と言えば規則的に整った、寝息のように細い吐息だけだった。

「その方は——」

「さっき部屋に戻ってきたら床で倒れておりましてね。いやはや、困った部下です。

最近眠れていないらしくて、恐らく疲れていたんでしよう。直によくなります。そうしたら出て行ってもらいますから」

「その必要はありません。いずれその方も招かれることになるのですから。とにかく始めましょう」訪れてきた女がそういうと、室内は沈黙が支配し、外から聞こえる工場の操業する騒音や蟬の鳴き声が浸入してくるばかりになった、その中で、わずかに衣の擦れる音が聞こえていた。その脇でどうにか耳を閉ざそうと思ひ、首を動かそうと上半身を揺らしていた。やがてバランスを崩してソファから転落し、床の上を虫のように這いつくばり、自力で部屋から出ることができた。扉の前で息を吐くと、すっかり草臥れてしまつて、そのまま眠りこけてしまつた。

※

電飾に照らされた看板、ネオンが点滅する看板、一文字光つては消え、波を打つ電気の海に日が沈もうとしていた。再び雨の降り始めた空は、灰がかつた紫に染まつた。電車は高層ビルの間を縫って敷設された線路の上を黙々と走っていく。遠くに見慣れた政党看板の巨大な眼が見える。海中にひとつ聳える奇岩のような影をしている。今日は生憎雨に濡れ、その瞳は曇っているようだった。薄暗く蒸し暑い、こういう天気

の時には犯罪が増えるそうだ。高架の下に川を挟んで延々と続く住宅街と、その間の路地を細かく見ていると、帰宅途中の車や、傘を差して走り抜ける自転車の中に、不審な歩行者を見つけたりする。そして一分ほど経った距離の団地前にパトカーが停まっていたりする。遠くで煙が立っていると思うと、手前で消防車が路上駐車の手で立ち往生している。塀から飛び降りる猫が見えると、川に浮かんだ猫の死骸が目につく。橋の上から川を眺めている人の、瞳に映る反転した世界まで見える気がする。

自宅の最寄り駅より三つ手前の駅は、乗換駅になっていて、多くの人が乗り降りする。ある程度の人がまとまって入れ替わると、なぜだか車内の空気も一変する。しかしいったい誰がこの社内の空気を支配していたのだろうか。特殊な緊張感を作り出すのがうまい人がいる。こうした人物は極めて巧妙に議論を支配したり、場の決定権を握ったりするが、決まって口数が少ないために、誰からも気づかれることはない。口数の多いものは物事が決まってから、選ばれた過去がどうしてそうなったのか理解できずに戸惑う。自分が話すことに夢中で何も見ていないからだ。そして自分の意見を出せば出すほど議論を誘引できていると思ひ込む。勿論できていることもある。しかしできる場合ですら、周りの人物も同様の思ひ込みに掛かっているにすぎないのだ。こうした寡黙な支配者が、街の中にも現れる時、より注意深いものは慎重に見守らなければならぬ。

暫く電車で揺られ、いつも通りの駅で降りた。そして改札口の前で定期券をポケットから抜き出すとした時、一枚の紙片がひらりと飛び出してきた。慌てて立ち止まり、拾い上げると、それは一枚の写真だった。乗り込む時にすらその存在にも一切気が付かなかった。後ろから人が来るので、とりあえず再度ポケットにしまい、改札を抜けた。それから傘を差す一群を避ける様に沿線を歩いていく。

〈龍安〉の前まで歩いているうち、雨は小止みになり、虫の音が聞こえてくるほどになった。晩夏の涼しい夕風が穏やかに吹いている。月の見えない夜闇の中、赤い看板がけばけばしく光っている、その下にあの青年は卓を運び出しているところだった。声を掛けるといつも通りの陽気さで返事をした。どうして卓を出しているのか聞くと、時間が停まったようでは、どうも息が詰まるからだという。それなら、と言って椅子に腰かけ、ビールとラーメンを注文した。ガラス戸越しに見える店内は、確かに何一つ変わらない。壁紙やポスターは、酸化した油で薄ら黒ずんでいたが、その色もそれ以上変化することもなさそうだった。古びて劣化した蛍光灯とテレビは色褪せた光を煌々と発している。今日は演歌のヒットパレードが放送されていた。ここの店主は日本語がわからないが、演歌はわかるのだろうか。常連の中年がカウンターに肘を立て、餃子とビールを前に据え今日もぼうっとテレビを見ていた。この間から全く動いていないのではないかと思った。更に一人、座敷に座って雑誌を読みながら炒飯と酢豚を

食べている若い男が一人いた。

ビールが運ばれてきた。青年はそのまま煙草に火を点し、うっすらと灰がかった黒い空を眺めていた。一口飲み、写真を取り出す。その写真には白黒の絵と、カラージュサれた女性の顔が写っていた。天使のように翼を生やした巻き髪の人間が、頬杖を突き何かを書いていて、その後背には十六の数字が区切られた正方形に並んでいる、前歩には筋張った子牛や子供がいて、天が啓けている。鉛で描いたような色だ。女性の顔は、間違ひなく工場主の愛人と思われるあの女性だった。裏書には電話番号が端正な字で記されていた。

※

家の中は蒸されていて、人肌の面を漂う空気のようにだった。今さっきまで誰かがいたような気がする。いや、人のいない家に戻ると、この蒸し暑さがより一層一人であることを身に染みて実感させるといふものだろうが……しかし——カラン、と台所の方から音がした。やはり人がいる、そう確信して、足音を忍ばせ台所へ行くと、シンクの中に積み上げてあったビールの空き缶が一つ転がっていた。蛇口が緩んでいて水が一滴一滴垂れている。どれだけ強く締めても漏れてくるため、もう諦めている。

服を脱ぐと汗が冷える。シャワーの蛇口をひねる。数分して湯気が立ち始め、首元から流れ落ちる湯が浴槽を濡らす。夏なのに体の芯は冷えていることに気が付く。頭から湯を被っていると次第に冷え切った繊維がほぐれ始め、何度か体が震えた。息ができなくなるまでシャワーを顔に当てた。溜まったお湯の中に座りこみ、膝を抱えた。このまま何分もぼうっと何も考えずにいられるなら、そうしたかった。だが落ち着かない。一分と同じ姿勢を維持し続けることが困難に思えた。あの女と眼の合った瞬間が繰り返し現れる。現れる度に、なにかを伝えようとしているような、あるいは誘いかけているような気がしてならない。本当に工場主の愛人なのだろうか。勤め先で逢瀬を重ねるとは工場主もなかなか大胆ではないか。常々苛立ちを感じさせられる、人徳を給与明細に記された数字と比例させるような、小市民的な勤め人とは違うのだろうか。しかし、あれほどに綺麗な女性を愛人とする可能性などあるのだろうか。自信のない男ほど綺麗な女性を手に入れたがると聞く。ならばあのような女性を愛人とすることこそ、卑屈な自信を隠し持つ小市民的な勤め人であることを示しているのではあるまいか。マルクスが自らの富で自らを美化できると皮肉を言ったように。とはいえ、自信のなさを自覚すればするほど、美しい女性との、淵のような隔たりを感じるものだが……。

しかしなぜポケットにあの写真を忍びこませたのだろうか……電話をしてみよう

か、どうしようか……どうするのか……風呂場の照明はどうしてこうも暗いのだろう……顔を思い浮かべていると、自分でも気づかぬうちに鼻歌を歌い、その歌がどこから聞こえてくるのかわからなくなった。空からだろうか？……遙か上方より聞こえてくるようだが。そう思い見上げると結露する天井から水滴が落ちてきた。汗の滲む顔を湯で漱いだ。立ち上がり再度シャワーを浴び、タオルを取った。台所へ行き、水を一杯飲み、ベッドに入るが眠気はやはり来ないようだった。火照った体から汗が垂れている。窓の隙間から緩やかに入ってくる冷涼な空気が繰り返し押し寄せてきた。テレビをつけようとリモコンに手を伸ばした。どこかで爆竹が鳴った。

※

工場に戻ってきたら既に真っ暗だった。沈みかけの太陽が薄明りを東に向かって投げかけているが、通勤に慣れた並木道には人気がない。幅の広い歯に、灰色の光が照りつけている。この時間なら帰宅者が歩いていたり、自転車をこいでいたりするものだが。そう思った途端、なぜ自分があちらの空を東と思ったのか、根拠がないように思われた。もしかして明け染めの時間なのかもしれない。日差しは東から西に浸みていき、白骨のような月が浮いているのは南東の空だ。雲一つなく澄み切っていて、落

ちて行きそうだ。それにしても自分は何を思つて工場まで来たのだったか。何か忘れ物をしたように思える。

鉄門の鍵は開いていた。トラックが数台停まっているだけの駐車場は、いつにもまして広々とし、空虚に思えた。遠くで名も知れない鳥が単調に啼いているのが良く響く。ゆったりとした足取りが、啼き声とずれたテンポのまま合うことがない。入り口は陽に背を向けて陰になっていた。足元には綿毛になった蒲公英が寒そうにじっとして居る。中に入り、照明のスイッチを押したが何も起きず、そばに備え付けられていた懐中電灯を手取る。両側から鋼鉄の巨体が圧倒している、狭い通路を小さな灯りを頼って歩いてみると、転がっていたねじを踏んで転倒しそうになったり、開けっ放しになっていた抽斗で膝を打ったり、肘をぶつけて金鎚を床に落としてしまったりした。危うく足の上に落ちて来るところだった。拾い上げる時、陰で腹を向けて眠っている蟬がいた。いや、眠っているのではなく死んでいるのか。啼き疲れてその姿は、すっかり抜け殻のようだった。その乾いた背中を破って、再び新たな生命体が飛び出してくるかもしれない。

そのうち階段に突き当たり、見上げると工場主の部屋に電気が点いている。誰かがそこで待ってくれているような気がして、迷わず足を掛けた。一段一段金属板が踵に打たれて響く。登りきって左に進み、窓にブラインドの下がった扉を敲く。すると一

人の男が出てくる。夜会服を着ていて、油で丁寧になでつけた髪が硬質な光を放っている。口髭を揺らしながらこういう。「招待状をお持ちでしょうか」。一瞬何のことかわからなかったが、その表情を読み取ったのか、指で四角つくり、あの写真のことだと示唆した。この時、忘れ物をしているという漠然とした感覚が明瞭なものに変わった。どのポケットを探しても、あの写真はなかった。忘れたようです、と言うよりも先に、その挙動を見た男は、整えられた口髭を指で撫で、眉を擧めると扉の向こうに消えてしまった。するとあの赤い耀きを宿した両目が脳裏を過り、何か取り返しのつかないことをしたように思い、焦って扉のノブを掴むなり、回して押し込んだ——が、忽ち手ごたえと共に扉は消えてしまい、先ほどまで沈黙が支配していた工場に突如鳴り響く機械音が、そして数多の刃が肉体を包み込んだ。八つ裂きにされていく間、見上げていた両の眼は最後に扉が開かれるのを目撃し、闇を呑みこんだ。

※

海岸線を走り、電車は南西へ向かう。崖壁は岩がむき出しになり、黒っぽい苔が点々と生えていた。線路沿いには、痩せた灌木や、短く密生した雑草がだらしなく葉を広げ、青い花が咲いている。うっすらと曖昧な色の空の下には、黒い海が穏やかに波打

ち、水平線は墨で引かれたようだった。昨晚乗り換えたこの寝台車は、過ぎてゆく夏の、冷涼な潮風を静かに切り裂いていた。

工場主はいつになく温情的な態度を取っていた。昨日は遅刻をし、昼休みのベルが鳴る頃に漸く工場に着いたのだった。そして経理部の事務室を開く。冷房が反って首筋から汗を噴き出させた。昼食を摂りに殆どが出払っていた。そこに電話が鳴り、慌てて受話器を取ると工場主が部屋へきなさいと言っている。振り返ってL字型の回廊を斜に眺めると、工場主が部屋から手招きをしている。今行きます、と言って部屋を後にした。遅刻したことを咎められると覚悟をした。ところが、部屋に入ると開口一番に体調はどうかと訊かれた。答えあぐねて視線が定まらなくなったが、幸いにも工場主が先に切り出した。「暫く休養を取った方がいい」と、一か月の休みを与えられた。「一か月もよろしいのですか？」と訊くと、工場主は柔和な笑みを浮かべて首肯した。顎には白い鬚が生えていた。

その日はそのまま一旦帰宅し、荷造りをした。出発する時、寝室の棚に無造作に置かれていた写真が目についた。それをポケットに押し込むと、鍵を手の中で振りつつ家を出た。普段用いている電車に乗るのは止め、地下鉄で中央駅まで向かった。階段を下りていくと、地下道は湿気と臭いで充満していた。あちこちに落書きと吸い殻の詰まった空き缶が目立ち、いくらかの商店はシャッターを下ろしたままだ。多くの人

が往来するにも関わらず、足音ばかりが目立つ。改札を通り、更に階段を下りて電車を待つ。天井から漏れてきた地下水の水溜まりが足元に広がり、蛍光灯を反射させている。

陽は傾き、中央駅は街を外れていく電車を待つ人で一杯だった。郊外の住宅街や、市や県をまたいでベッドタウンへと帰っていくのだ。車窓を覗いてみると、住宅やビルは絨毯のように山陰の手前まで広がり続ける。帰宅する人々で満ちた電車の中で、自分も同じ方向を向いているにもかかわらず、自分はどこへ向かっているのか、確信が持てなかった。彼らの顔には疲れが見えるようだった。車窓に薄く映る自分の顔には、何が見えるのだろうか。私は携帯してきた文庫本を広げたが、一向に集中できず、夜が沈み込んでくる外を何度も瞥見していた。そして一駅毎に下りていく人たちの背中を見つめていた。

寝台車の乗換駅に到着し、重い旅鞆を提げて電車を降りた。扉が閉まり、目の前をぬっと進んで行く電車と、窓から見える人の影をぼうつと見ていた。既に辺りは真っ暗で、照明の下に虫が集っていた。その虫を捕食しに、蝙蝠も飛んでいた。ベンチには小さな甲虫が何匹も這っていて、座る気になれなかった。幸い待合室があって、中に入る。先に五人の男女が座っていた。正面には同じく旅行だろうと思われる中年の夫婦が会話もなく座っている。夫は週刊誌をじっくり読んでいるようだったし、妻は

うとうとしている。その左横には女が一人足を組んで座っていて、イヤフォンをして携帯電話をいじっている。その正面には、若い恋人たちが白けたように座っている。男は待合室に飾られた風景写真を眺めていたし、女は所在なさげに視線を落ち着かせなかった。手を見つめたり、誰かを見たりして、時折目が合うことさえあった。自分もまた所在なかったのだ。時計を見ると寝台車が到着するまで一時間弱あった。中年の男が咳払いをすると、その左の女が足を組み替え、低いヒールが床に当たって音を立てた。

自由投稿

ファイナルファンタジー

うさぎ

仕事から帰ってくると妻の笑顔がいつも以上にわずらわしかった。

「今日は、とんかつを揚げてみたの」

家に入るなり油くさいのは、妻の料理のせいだと理解した。食べる前から胃もたれをしているような感覚になった。私の本音はレトルトでいいから早く食べて寝たかった。仕事で疲れたからなにがなんでも寝たかった。日本の経済や政治、世界情勢を淡々と語るニュースキャスターが深刻そうな意見を言うコメンテーターに相づちをうっている。「自分は安全なところにいるくせに」と毒づきたくなる。キッチンからは、カラカラと揚げている音がきこえてくる。夜の十時にとんかつを食べてはたしてすきり眠れるのだろうかと考えてしまふ。

ふと、私は妻のいる方をみる。妻の笑顔はいまもお健在で、私は恐怖を覚えるしかなかった。

「もうすこしで出来上がるから待っててね」

不気味なことをしている妻の原動力はなんなのか私にはまったくわからない。

結婚して丸四年経って、妻も私も段々とお互いから気持ち離れていくばかりだっ

たはずだった。それなのに今日は結婚したときのような振る舞いで、妻の意図がまったく読めない。三度目に妻をみたときには、妻と目が合って恥ずかしかった。妻はもりつけが終わったらしく、「よし」と調子をつけて「できたよ」といって料理を運んできた。それから、右に味噌汁、左にご飯をおいた。そんな細かいことまで妻が気遣うはずがないと思いつつ、現実で起こっていることを素直に受け止める努力をした。

「いただきます」

私も普段はいわない言葉を発して妻の料理を食した。つけっぱなしのテレビでは、今日のプロ野球の結果が流れていた。私は黙って、目の前の衣をまとった肉塊を食らうことだけに集中した。私が料理を食している姿を妻は微笑ましくみている。しかし、私の内心は、こんな食事はとっとと終わらせて、風呂に入り、ベッドで寝たいという欲求が一番に來ている。

「あのさ」と妻が口を開いた。

「裕子っているじゃない、私の高校からの友達の」

「ああ」

「裕子がね、子供できたの。さっき電話があってね、四ヶ月だって。安定期に入るまでは黙ってたんだって」

「ふうん」

私の薄い反応で妻の顔が少し曇った。しかし、すぐに妻の顔は元に戻り、話を続けた。

「今度、みんなでお祝いするの。何がいいかな？ やっぱりベビー服かな」

少しは妻に知恵を貸そうと同僚で同じケースを思い出してみたが、みんなで飲んで、子供ができたヤツは数回タダということがあっただけだ。男と女では考えることが違う。ましてや、夫は妻に寄り添うことしかできないで出産まで迎えることになる。子供を実際には孕んでいないので、当事者意識が薄くなる。

「それでいいんじゃない。たくさんあって、邪魔になるものではないし」

「今度の休みにデパートに付き合ってくれない？」

「ああ、いいよ」

妻は本当に嬉しそうに喜んでいて。私の気持ちはその反対に、肉塊を残したくてそれをどうやって伝えようと憂っていた。自分の中でルールを作る。四分の一まで食べたら、妻にギブアップのサインを送ろうと。それまではひたすら我慢して肉塊に食らいつく。明日の体調をベストなものにしたいがための悲惨な忍耐。寝たい。ベッドに寝転がりたい。夢を期待しているわけではない、ましてや明日なんて待ち遠しくない。ただ、仕事に支障がないようにしたい。他人に迷惑をかけたくない。ウスターソースを多めにかけて、キャベツを間に食べてアクセントをつける。そして、ニューズキャ

スターが「また、明日」と頭を下げた時に、私は意を決して妻に「もういいや、風呂に入る」といった。私が思っていたのとは反対に、妻は気分を害した様子ではなかった。

私は安心して、風呂に入り一日の疲れをとった。

風呂から出ると、妻はバラエティ番組をみていた。私は「明日もあるから、もう寝るよ」と声をかけた。「はい、おやすみ」と返ってきた。

寝室に入るとベッドに倒れ込んだ。ただ、それが仕事からくる疲れなのか、さっきの惨めな戦いからきたものなのか、はたまた、どっちもなのか。さっきの妻の笑顔とトンカツの記憶がよみがえる。違うことを考えるように努力をする。明日、朝一番にやらないといけない仕事が出てくる。取引先に電話をして、明後日の打ち合わせの資料を作成しなきゃいけない。いや、その前に総務に電話して先日なくしたデスクの引き出しの鍵の弁済代金についてやりとりしないと、データが入ったディスクがそのままだからそれを取り出さないと。同僚でデータを渡した人間がいるから、そいつに借りればいいのか。

明日の仕事をのことを考えていたら、眠れない気がしてきた。寝返りをうつ。鏡台が数歩先にあって、妻の化粧品が全部キャップをして乱雑に置いてある。几帳面なのかめんどくさがりなのか判別がつかない。

笑顔でいる妻。なんか今日は変だ。何があったんだろう。何か悪いものでも食べた

のか？ たとえば、隣に住んでる私の母に何か悪いことでも吹き込まれたのか？ まさか。そんなはずはない。母と妻は結婚以来仲が良くない。でも。何かをきっかけに二人が雪解けして、今日がその日にあたるのでは。たとえば、妻の溜まった私へのストレスを母に話したとか。とんかつは話が弾んで、その流れで作ってしまったとか。ない。ありえない。悪いことを考えていると段々と目が冴えてしまう。

寝返りをうつ。ドアがあつて、そのむこうの光が隙間から漏れている。反対側をおくと気になって眠れなくなる。

反対側を向いてもう一度寝る体勢を作る。気になって、目覚まし時計をみる。ぼんやりとした黄緑色の光が長針と短針で一二と一を指し示している。もう本当に寝なくては、まずい。でも、胃のあたりが重い。さっき、ゲップが出た時に逆流しそうになった。やっぱり、夕飯をあんな時間に食べるんではなかったと後悔してしまう。

ドアのおこうで明かりを消す音がきこえる。妻も寝るんだと思って、これで寝れると安心できる気持ちと隣に妻が寝るんだという不安が半々である。妻の足音はかすかにきこえる。私が寝ていると思って気を遣っているんだと思う。しかし、ベッドに入ると思っていたら、妻は布団をはいできた。

「眠れないんでしょ？」

私は驚いて言葉を発することができなかった。暗闇の中で妻の表情はわからない。

それが私の恐怖心をさらに増長させる。

「まあ、そうだよね。寝る前にあんなもの食べさせられたら、だれだって眠れないよね」

そう言ったあとに少し笑った声がきこえた。

「ど、どうしたんだよ？」

やっと出た私の台詞は間抜けなものだった。妻は私の上に跨がった。そして、妻の手を私の胸から顔の方へ滑らせた。妻は私の顔をしっかりと両手で掴むと耳元で囁いた。

「私ね、裕子がうらやましいの。私も子供欲しいの。わかる、この気持ち？ 嫉妬じゃないの。私もね、欲しいの。欲しくてたまらないの」

「でも、今すぐじゃなくても」

「いやなの、そんなの。早ければ早い方がいいじゃない。それに、私、あなたのお母さんに言われた。孫が早くみたいって。その時は腹が立ったけど、今の私は納得しちゃったもん。ねえ、いいじゃない。ちようだい。ほしいの。ちようだい」

ここまで積極的な妻を今までみたことがない。妻は私の全身を「ほしい」と「ちようだい」を言いながら撫で回す。私の頭は行為をしたいと思いますの、妻の言葉と愛撫で、下半身が反応をしめしている。しかし、仕事の疲れからか、十分な固さは

ない。妻はそこにさらに刺激を与えはじめた。それと同時に妻は、パジャマのズボン
を自ら脱ぎ、自分の裂け目を触りだした。妻とこうしているのはいつ以来だろうなど
と余計なことを考えた。からだがり出出した。十分に愛撫をしたので妻に挿入できる
程度になった。私は寝たままで、妻は私の上に馬乗りで乗っかる。妻はゆっくりと妻
の中に入れる。そのときの妻の声はどこか苦痛を孕んでいた。数年ぶりの行為で妻も
十分ではなかったのだろう。最初は緩慢な動きだったのに、次第に昔を思い出したよ
うに激しくなる。

「気持ちいいでしょ？」

妻の言葉は、私のこころの中を知っているように、私をマインドコントロールして
くる。段々、腰の辺りに重い感覚があって、それを出したくなる欲求が高まっている。

妻の微笑みは、帰宅してきた時と同じだった。その顔をした妻の口から怪しい笑い
声が出た。

「さっきよりも大きく固くなるけど、もしかしてもうすぐ出ちゃう？　じゃあ、もっ
と激しくしちやおうかなあ」

妻の動きが大きくなる。それとともに快感を増幅させられる。妻は私が果てるのを
まっている。いや、それを望んでいるのは自分なのかもしれない。こんなくだらない
ことをさっさとおしまいにさせて、とっとと寝たい。自分の気持ちが一瞬してきた。

この状況は悪くないと思いつながら、仕事のことを考えている。そして、目の前には裸の妻が乱れているし、時間はもう二時近いように思う。妻の動きが収まる。先に妻が絶頂を迎えたらしい。呼吸が荒くて、肌にくっすら汗をかいている。しかし、妻は少しのインターバルで私を絶頂に導こうとした。私も快樂の方が思考を支配しはじめた。そして、頭がはじけてすべてが考えられなくなるように妻の中で爆ぜた。

しばらくの沈黙。闇の中に私と妻は動かさずにとけ込んでしまっている。

妻はなにもなかったように服を着て部屋を出て行った。蛇口をひねる音がした。一連の運動でのどがかわいたのだろうか。

私も昼間の疲労感とは違うものを感じていて、神経は興奮していて、眠気がどっか行ってしまったようだった。

妻が帰ってくると私の隣に寝転がった。妻はくすくすと笑い出した。子供が欲しいのはわかるが、私に選択権がなく一方的に子づくりをしている感じがした。妻が顔を上げるとこう呟いた。

「今度から、とんかつが合図ね」

その言葉が、死刑宣告のようで私は絶望にまみれるようだった。こんな日がしばらく続くと思うと昼も夜も何かに縛られているようで窮屈な気持ちになる。さっきまで想像していた明日からの仕事の予定が崩れていく音がきこえた。

次の日、目覚まし時計のアラームがけたたましく鳴る音で目が覚めた。しかし、アラームを止めるボタンを押すとまた眠ろうとした。もうあと数十秒あったら本当に寝ていたかもしれない。

「朝だよ。起きて」

妻が、昨夜とは全く違う声色で私を起こしに来た。昨夜のことは、あまり思い出したくない。でも、トラウマっていうほどのものでもない。だけど、後味が悪い。テンションが眠る前から変わっていいから、そんなことを思うのかもしれない。

寝室を出ると朝食がテーブルに並んでいた。簡単なグリーンサラダとハムエッグ、普段はあんまりみかけないイチゴジャムの入ったヨーグルトが朝食の献立だった。

白いヨーグルトの真ん中に真っ赤で粒の残ったジャムがあった。私は少し吐き気をもよおした。生命を感じる色合いで今の精神状態だと食欲がそがれる気がした。

それでも食べないとしたがたがないと思えばそれらを食べる。私たちの間に会話はなかった。妻のむこうは朝のニュース番組がやっていた。円安になると世の中がどうなるかを大学教授が淡々と説明していた。私にとっては、朝食を完食するほうが重要だった。

「ごちそうさま」

なんとか食べきった私は満腹感から軽い睡魔に襲われた。このままソファに倒れ込んだらさぞかし気持ちよく寝れるだろうと思えた。気分も悪いし、意識もはっきりしていないのでシャワーを浴びて着替えることにした。

そんな気分転換も単なる悪あがきで、けだるさには勝てなかった。

昨夜寝る前に頭の中に渦巻いていたことなんてどうでもよくて、その日一日を波風立てずに過ごすことにした。自分の神経を周囲三メートルにばらまいて降り掛かってくる仕事は回避した。それでも、じっと椅子に座ってモニターを眺めていても飽きてしまうし、営業という仕事上の気まづさを感じたので、外回りに行ってそのまま直帰してしまおうと決めた。しかし、自分が働いている会社はそんな甘いものではなかった。夕方に電話で、明日行く取引先に配布する資料の修正がかかったからだ。「残業か」なんて心の中で何回か呟いていると、案外そっちの方が悪くない。「災い転じて福と成す」と長い半紙に綺麗な行書体で書かれたものが頭に浮かんだ。

外回りからオフィスに帰ってくる途中に、駅前歩道を歩いていると、どこかでもたことがある男が立ってピラを配っていた。反射的に立ち止まるが、彼と会わないように反対側の道に行こうとした。だが、オフィス街から来る雑踏と横断禁止の鎖が塞いでいたので、しかたなくこのまま歩くことにした。

案の定、彼は私に気づき声をかけてきた。

「よう、久しぶりじゃないか」

「久しぶりだな」

「なんだよ、その返事は。せっかく、大学の時の友人に再会したのに。感動はないのかよ」

「なんか久しぶりじゃない気がするだけだよ」

「そうか？　こんな都会の真ん中で俺たちが偶然出会うなんて『奇跡』じゃないか」
「……そうかもな。ピラ配りなんかして、まだちゃんとしてないかよ」

「バーカ。そこで俺の個展やってるんだよ。ほら」

渡されたチラシには彼の名前と個展の題名と簡単な紹介文があった。

「なあ、お前来たか？　無料でいいから。サクラとしてあそこに入ってくれないか？」

「お前、まだ仕事なんだぞ」と言葉にする前に、一旦落ち着いて吟味する。どうせ会社に戻ったら仕事をして、それが終わったら帰るだけなんだからここで時間をつぶしてもいいんじゃないか。

「それも悪くないな」

思わず口からこぼれ出た。

「ずいぶんと上からだな」

とかなんとか言いながら、私をギャラリーに連れて行く彼。彼はこれから私をどこか不思議の国に連れて行くみたい。に個展の説明を楽しそうにした。その話は私にしているようでいて、通り過ぎる人達をターゲットにしている。そのことが、当事者からみたら甚だ迷惑であった。

彼は、目的地に着くと話すことをやめて受付の女性に引き継ぎを頼んでまた外に出て行った。受付の女性は営業スマイルで「ご自由にご覧ください。もし、気になるものがあつたらお声をかけていただければ私が伺いにまいります」と言った。

私には彼女の発言の意味が分からなかった。絵を観ていたら下に値段が書いてあるのでここが即売会もあわせて行っているのだとわかった。思わず叫びたくなる、「なんて人間なんだ」と。

実際に発狂するなんて到底出来ない。最初は適当に眺める程度だった。しかし、実際にお金が取れるのではないかという説得力が絵から発せられている。彼の描いているものは主に風景画である。机に置いてある果物や花があつたりする。水彩画だった、油絵だったりした。水彩画は絵に繊細さがあり、緻密に描かれていた。油絵では大胆な色合いと力強いタッチでみているだけでエネルギーを感じた。

彼の絵のバリエーションに自分が圧倒されると同時にアイツは絵が好きだったなと学生時代を懐かしむ気持ちが生じた。「継続は力」という言葉が浮かんだ。

不真面目だった私の態度もギャラリーの奥へ進むほど真剣になっていた。そして、一枚の絵に出会った。今までみてきたものとは別のものがそこにはあった。そこに描かれているのは人であった。その人は服装から推理するに女性だった。しかし、服は所々破れている。その隙間から下着らしきものが垣間みえる。また、服や地面や後ろの壁らしきところに紅いものが点在している。私が一番驚いたのは、描かれている女性の頭部に黒い渦があることであつた。それは、安いたとえをするならムンクの『叫び』のように歪んがんでいた。その思いつきはただの直感的なものであつて、人の顔があるべき箇所には黒の強い灰色の渦巻きがあつた。私は戸惑つた。インパクトが大き過ぎて途中でふらつくことがあつた。今まで観てきたものとは明らかに別物で、悪いものに取り憑かれたようなものだつた。段々、気分が悪くなる。絵の螺旋に魂が吸い込まれるような気がした。椅子に座りたい衝動に駆られる。歩いて来た順路を逆走した。私の視界はモノクロで色を認識することができなかつた。できることなら眼球を取ってしまいたい。そんな悪い妄想に祟られていた。救いを求めて叫びだしたかつた。もう目の前は真っ暗になつた。私は感覚だけで歩いてきた。

突然、私は何かにぶつかり倒れた。倒れた私は床に頭をぶつけた。

「なんだよ、大丈夫かよ」

その声で目を覚ますと目の前には友人である彼が立っていた。

「なんでもない。なんでもない」

それは彼に言っているのではなく、自分に言い聞かせていた。

「お前、面白いな」

「ああ」

私の返事をきいた彼はけらけらと笑った。

「これから飲みに行かないか？ 近くに安くてうまい店があるんだ」

私は腕時計をみて考えるフリをしながら、用意していた答えを発する。

「わかった、終電まで平気だ。明日も仕事だから」

私に憑いた悪いものを彼の手で払ってもらうために了解した。

「二十分ぐらいしたらもう一度ここに来てくれ」

彼はギャラリィで片付けみたいなのがあって、私は近くのデパートの本屋で時間をつぶした。

彼を待っている間に会社に電話して、直帰する旨を同僚にいった。電話に出た彼は「明日は大丈夫なんですか？」といたずらとも心配ともとれることをいった。私は「明日、早く出社するから平気だ」と冗談とも本気ともきこえる言葉を返した。「平気ならいいんですけどね、へへっ」と彼は笑った。喋っている様子から察するに、今日は

会社で何事もなかったんだと思った。会社には厄介な上司がいて、数字の映し出されたモニターを毎日みている。しかも、数字が悪かったり仕事上のミスがあったりすると当事者だけでなく周囲の人間も怒鳴り散らす。だから、会社に一日いることは、だれも来ないで雪山で遭難して助けを待つみたいに厳しいものである。でも、電話からの声で私は安堵した。そして、適当な言い訳をして電話を切った。

電話を切って顔を上げると本屋にいた客の数人が私のことをみていた。その瞳にはうるさいから端っこでやれという恨めしい念が込められていた。私はその場にしばらくなり、同じフロアを彷徨った。大きいデパートで区画を「番地」で示していた。本屋のあったのが一二番地で、今いる場所が三番地である。そして、そこはマタニティドレスやベビーカーなどを売っていた。すぐ近くにお腹を大きくしたマネキンがポーズを決めて立っている。私はうんざりして時計をみる。待ち合わせの十分前という中途半端な時間だった。しかし、私はこの場にいることよりギャラリーの前で彼を待たほうがだいぶましであると思った。私はすぐ近くのエスカレーターで一階に戻り、待ち合わせ場所まで行った。

ギャラリーはカーテンが閉められていて外から中が伺えなかった。私は通りを行く人達をぼんやり眺めることしか出来なかった。周りの人は私がどうみえているのだろうか。寂しい男が立っていると思われたくない。私は携帯電話を取り出して、自分の

居場所を確立しようとして努力した。

「おお、なんだ、ここに居たのか。いえよ」

笑った彼の顔が子供みたいだった。その笑顔で許される年ではなくなっていると私は改めて感じる。

「じゃあ行くか、ついて来いよ」

彼は勇ましいことをいってに歩き出した。私も別に普段から知っている場所なので迷うことはなかったが、彼の早歩きにおいてかれてはたまらないと思った。

歩くこと五分。駅を中心に考えると南口から北口へと歩いてきた。ギャラリーのあつ場所はおフィス街と駅前と境目にあつて、スーツ姿の人が多かった。また、近くに予備校があるので制服を着た生や野暮ったい服を着た浪人生がいた。北口は、数年でチャイナタウンとなつていて、漢字だけが書かれた看板が周りをみわたすとあちこちでみえる。店員と客の会話も早口で何をいつてるかわからない。

彼が「ここだ」とさっきの笑みを浮かべた。

外見からすると築三十年以上は経っているようだった。もしかしたらそれ以上かもしれない。お店の看板は日に焼けていて、お店の名前も「若大」まではあるが、その後の一文字が剥けている。

彼は私がよそみをしている間に中に入っていて、席に着いていた。

店内もこの店の独特の雰囲気醸し出して、壁のポスターは色が褪せていて、メニューも手書きとプリントしたものが混在している。そして、何よりも私が驚いたのは店内がすべてカウンターであることだ。昔ながらの一杯飲み屋の雰囲気が店全体にある。まるでこの店だけが現代から取り残されているようだった。

彼は店の一番奥に座っていた。

「とりあえず、ビールでいいか？」

「ああ」

「すいません」と彼が言うと中国人の店員が応対した。

「ビールを二つと鶏の唐揚げとモツ煮といか刺しと鯨の刺身。とりあえず、以上で」「かしこまりました」と店員は発音したつもりだが、「し」がうまく発音できていなかった。彼はタバコに火をつける。一吸いするとビールが来た。

「じゃあ、俺たちの奇跡に乾杯だ」

彼は私の持っていたジョッキに勢い良く自分のジョッキをぶつけてきた。その時に少しビールが私の手にかかった。私はそれを気にしたが、彼は気にせず半分くらいまでビールを飲んでいた。彼が気持ち良さそうな声を出す。発した言葉はもう酔っばらっているのか滑舌が悪く私の頭で日本語に変換が出来なかった。彼は胸ポケットから新しいセブンスターを取り出しながら喋り出した。

「お前さ、仕事どうなの？ 忙しいの？ 大変なの？ もう俺たち年じゃん？ いい年齢じゃん。もう俺は無理だわ、組織の一員になって社会に奉公するのはさ。ダメ。年齢がアウトだし、ひとりの方が気楽だわ」

「まあ、なあ、会社に勤めてるとお前が楽でいいなあとは思うけど、その反面大変なんだろうなあとも思うよ」

「いやいや、会社員は偉いよ。持ち上げてるわけじゃなくて、本心で。俺は生活が大変だもん。どうにか絵を売ってさ、その月の分の金を稼いでるんだよ」

「絵を売ってるって、夢に生きてるなって思うよ。学生の頃からそうだったじゃないか」

「それがいばらの道なんだよ」

「鶏の唐揚げとモツ煮お待ちしましたあ」

「いやな、自分の描きたい絵を描けているなら俺だって満足するよ。そうじゃないんだよ、例えば地方のデパートが主催する人があんまり来ない美術展に出したり、それが良かったらデパートのあるだろ？ ログの隣に絵みたいなの。そんな自分の書きたい物とは違うの描かされて嬉しいかっていう話」

「でた、学生の頃語ってたプロとはっていう講釈。変わらないな」

「変わるわけないだろ、そんな簡単に自分の精神を曲げられるわけないだろ？ って

か、お前まだ俺のこと子供だと思ってるだろ？」

「そうかも」

「腹立つなあ。すんません、黒ビール一つ」

「はいー」

「だって、変わってないんだろ？ 良い意味でだ。外見もまだ二〇代で通るよ。社員のおっさんからみればうらやましい」

「ふざけてるようにしかきこえないな」

「黒ビールとイカ刺しです」

「若いということはいいいことだ」

「気持ちの話だろ？」

「それもそうだけど、全体的に」

「同い年だろ」

「そうかもな」

「鯨の刺身です」

目の前に出された赤黒い肉片をみて私はめまいを起こしそうになった。その肉は魚とは違って光がなかった。生のまま出された牛肉や豚肉の様に思えた。肉片の不気味な色は人の肉体を想起させる。もうしばらくは抱きたくない妻の肉体。年のせいかわ

体がだらしなくなつた腹や尻。薄暗い中で上下に動く妻。思い出したくもない。昨夜の出来事なんて……。

「なあ」私が声を出す。

「お前、結婚しないの？」

「結婚？ こんな身分の俺が結婚なんて輝かしい未来を手に入れられるか？ 今は自分で手がいっぱいさ」

「付き合っている女性はいないのか？」

「ああ、さっぱり。こんなこと言いたくないけど、大学の時に真紀のこと好きになつて以来、次の相手はみつからないよ」

「いたな、真紀ちゃん。今何してんだろうな」

「そうだな、結婚してるといいな」

彼はそういうと鯨の刺身を一切れ食べた。私もそれをまねて一口食べてみようと思つた。

「それ、いい男がいう台詞だな」私が言った。

「俺はいい男だ」

「まあ、まあ、まあ、ここで議論するのは野暮だからやめよう」

「なんだよ？ お前いちいち突っ掛かってくるな」

私はそのままふざけた笑いをして、店員を呼んでサワーを頼む。

真紀の名前を出した時、彼は素面のような顔だった。まるで今までが茶番だったかのように。彼と真紀の間に学生時代に何があったのか思い出せない。おぼろげな記憶では、彼女は三年生の時に大学を中退したような気がした。何が原因かはきかなかった。四年生になった彼はしばらく大学に来なかったことは覚えている。

もう一度、鯨を食べた。割り箸の先が赤くなっていた。私が嫌いな血だった。

店を出る前に彼は私にこういった。

「お前に次やる個展をまたみに来てもらいたい。そのためのダイレクトメールを送りたいから住所をここに書いてくれ」

「わかった」と言って私は彼の差し出した手帳に住所を書いた。それから店を出て駅まで二人で歩いて、彼とは反対方向の電車に乗った。

家に着くと妻が昨日の笑顔で待っていた。店でも食べた揚げ物がテーブルに並んでいた。私の逃げ場は何処にもないと覚悟を決める。

「わかったから、これは明日に回してくれ。カツ丼でもなんでもいいから弁当でもたせてくれ」

妻は喜んだ。その姿をみないままシャワーを浴びた。このまま眠れたらいいのにと切望した。

寝室には先に妻がいて、私は搾取をされた。

行為の途中に運動をやめて妻は急いで部屋を出て行った。

「生理になったみたい」と暗い部屋で黒い影がいった

私の嫌いな血だった。

彼女が生理になってから間をおいたが、終わるとまた私と妻は毎日一つになった。日課みたいに毎日に組み込まれてくるとだんだんと私が能動的になる必要がないことがわかってきた。ここ数日は私はただただ仰向けに寝ているだけだった。妻もこれがシステマチックなことに薄々気づいているようだった。だが、妻はあきらめなかった。目的と手段がわからなくなっても、私を求めた。子供を望んでいた。言葉には出さない妻の強い意志が働いているのだろうと私は思った。

要領がわかってきた私は仕事のペースを落とすことはなかった。仕事にいきがいを感じているわけではない。そうしないと食べていけないし妻を養えないのだ。

ある晩帰ってくると、油のにおいはしなかった。煮込みハンバーグと簡単なサラダと左右逆においてある茶碗とお椀があった。妻はソファでテレビをつけたまま寝ていた。顔は少し赤かった。三五〇のビール缶の空き缶が危険物のところに捨ててあった。

こんな日もあるのかと身構えて帰ってきた自分の心が解かれる。準備された料理を

食べながら、最初はつけっぱなしのテレビをみていた。それがCMになると自分の座っている近くに目をやった。市の広報があったり、電気料金の明細などがあったりした。その中に私の名前が書かれた封筒をみつけた。差出人は先日会った絵描きの彼だった。ダイレクトメールにしてはちゃんとしているなど思った。

急いで食べて、妻から逃げるように寝室に入り封筒を開けた。そこには便せんで五枚の手紙が入っていた。

※

私と彼と真紀は大学一年生のときに同じ第二外国語だった。私と彼は初回の授業で隣になり、お互いが同じタイミングで授業に飽きてそれ以来友人になった。数回の授業を経て、教室の座席が決められていないのに固定され始めた頃に真紀は私たち二人の前に座っていた。彼女も授業がつまらないらしく、休み時間や昼休みに四人で話すようになった。このもうひとりの女性はささいな諍いで我々のグループから一年後いなくなつた。彼女の名前を今は覚えていない。彼女は真紀と同じような身長で、まるで姉妹のようだった。でも、性格がお互いまったく違った。真紀の好きなのを彼女は嫌い。彼女がいいと思ったものを真紀は嫌がった。彼女が離れていった原因は私に

ついてだった。

彼は真紀と段々仲良くなった。しかし、二人が結ばれることはなかった。残された私と彼女はほどほどに仲良くなった。二人きりで会うこともしばしばあった。一年生が終わって、二年になって一月経たないくらいのことだった。四人の中では一番先に教室に来ていた彼女が二番目に来た私におかたってヒステリックに真紀のことをのしった。鬼気迫る勢いというのは彼女のそれだけだった。私は彼女のマシンガンのように出てくる言葉を黙ってきくしかなかった。彼女は言いたいことを言い切ると何もなかったように教壇の方を向いた。もう二度と私と視線を交わすことはなかった。彼女がいなくなつて、男二人と女一人といういびつなグループが出来上がった。周りからはどう思われていたのだろうか。私にとってはアンバランスだと思った。そのアンバランスも数の問題ではない。彼が抱えていた真紀への思いのせいで私の存在がいないように感じられた。

「ねえ、昨日の比較文化論の授業のノート貸して」

狭いキャンパスの隅の唯一のベンチのある喫煙所で私と彼が時間を潰していた。それをみつけて真紀は私たちにいった私たちはお互いの顔を見合わせた。

「ごめん、俺たちも出てないんだよね」

彼が私の代わりに昨日のことを話した。私と彼は大学の喫茶店でだらだら漫画を讀

んでいた。それはちょうど午前中の講義が終わってから昼食を食べに行った時のことだった。そうしているうちに講義に出るのがめんどくさくなったから、夕方までコーヒーとクリームソーダで粘っていた。

「そうなんだ。サボリかぁ」

「なんだよ、真紀も出てないからおんなじだよ」

彼は真紀に子供のように反抗した。「ほかの人に頼ってみたら？」私は真紀に尋ねたがその言葉が真紀に届くことはなかった。

「私はバイトしてたの。サボリとは違います」

この時すでに悲劇は始まっていた。真紀には付き合っている年上の男がいた。年齢が二十五、六で働いていなかった。実際には真紀と付き合うまでは働いていたらしい。いや、収入があったみたいだというほうが正確なのかもしれない。しかし、その収入がなくなると男は真紀に働くように迫った。私はなんとなくだが、真紀の態度から彼氏がいることを前から薄々感じていた。実際にその話をきくのはもっと後になってからだった。彼は真紀に彼氏がいることを知っていた。以前から相談を受けていた。真紀が男に惚れているのは一過性のものでいつかは彼のものにくることを信じていた。それとともに真紀の自由を奪うことで真紀が不幸になることはさけたかった。

真紀がバイトをしていたときいて彼は不安に思った。実際に真紀は男のために働い

ていたのだから。でも、彼にとって唯一の救いは真紀が笑顔で大学に来ていることだった。彼はそれだけで嬉しかった。

私は「何か食べ物買ってくる。なんかいる？」ときいた。真紀がオレンジジュースで彼はコーラと答えた。私は「代金は後でいいから」といってその場を後にした。

「バイト忙しいの？」と彼は私が生協に行くのを見届けると真紀に尋ねた。

「まあね、接客業だから決まった時間にラッシュがくるよ」

「彼と会えてんの？」

「それは大丈夫だよ、会えてるから」

「そう、よかった」

彼は手持ち無沙汰になり、タバコを一本取り出して火をつけようとする。強い風が吹く。なんどやってもつかないので彼はタバコをくしゃくしゃにして灰皿に捨ててしまった。

「なんか、怒ってるの？」

「怒ってないよ。しいていえばタバコが吸えないことかな」

「吸えなくていいじゃん。私、彼がタバコ吸うのは嫌なんだ」

「タバコを吸う人間に悪い人はいないよ」

「屁理屈だよ。自己を正当化してるよね」

二人は笑った。もしその光景を他人から見たら仲のいいカップルにみえるだろう。私もそうであってほしかった。そっちのほうがこれから起こる複雑な事態もなかったと思う。

二年生の間は、真紀はなんとか大学に来て居眠りしてでも授業に出席した。彼はそんな真紀を段々とサポートするようになっていく。それは私の見えないところで最初は行われていた。しかし、彼の真紀を思う気持ちが私に打ち明けさせた。

「真紀のことが好きで狂いそうだ」

彼の行動を側でみていた私はもうわかっていた。彼の言葉で確認がとれた。

「正直に言って真紀のことが出会ってからずっと気になっていたんだ。それが好きかどうかということとはわからなかった。でも、毎日いるようになってわかった。でも、その時にはもう遅かったんだ」

彼は素面で吐露しているようには思えなかった。真紀が幸せになるのは彼自身が本心から望んでいることだった。でも、真紀は男に不当に働かされている。あいつは男にだまされているんだともいっていた。その目にはうっすらと涙を浮かんでいた。私は彼を慰める言葉を多く持たなかった。しかし、それでも彼は充分だったらしく、その日は朝までファミリーストランで語り合った。

彼の家は裕福であった。どれくらい裕福かといえば、広い敷地内にアトリエと称し

ている建物があるくらいだ。私はその建物をみたこともないが、彼から話はきいていた。彼はもともとは美大に入れる知識や技術を持っていたが、美大の教育が気に食わないのと自分の力がそこでは発揮できないと思って、私や真紀の通う普通の私立大学に入學したらしい。彼は酔っぱらうと「美大は教育の場所であって、発表の場ではない」とか語っていた。彼は真紀と出会ってから彼が持ったイメージを画像化させようともがいていた。そのイメージを丁寧になぞるために、思い通りに描けない場合は一から描き直した。そして、そのイメージは常に流動的なので想像している彼でさえ描けない日があった。たまに真紀のイメージを確かめるために彼は電話をした。

「もしもし、真紀？」

「なに？」

「今、大丈夫？」

「次のバイト先に移動中だよ。でも、平気。」

「お金そんなに必要なのか？ もうたくさん稼いでるだろ？」

「まあねえ。でも、足りないの」

「なんで？ どうしてだよ？」

「彼が立派に社会に出るためには、お金がたくさん必要なの。それに、私は彼に成功して欲しいの」

真紀はだまされている。彼氏はみたこともない男だがきつとキャンブルに使ってしまったり、お酒に使ったりしているんだと彼は思った。でも、それを正直に真紀に伝えることが出来なかった。

以前、一回真紀を説得したことがあった。彼の気持ちは隠したまま、真紀の男に対する行動が異常であるという論理で真紀に説明をした。真紀は何も反論をしないまま目に涙を浮かべた。その表情をみて彼は少し言い過ぎたとも思った。大学に来て疲れた顔をしている真紀をみたくなかった。真紀と彼の間に重い沈黙が流れる。時間が止まったように二人は動かなかった。彼は真紀の言葉をききたかった。しかし、それをきくための次の言葉を考えるとそれは真紀への正直な思いを伝えることになってしまふ。彼も黙るしかなかった。大学のだれもいない昼下がりの教室。外では生徒の楽しそうな声がきこえてくる。二人の姿を廊下から眺めて過ぎ去る者もいた。二人だけの世界がそこには構築されていた。だれもはいることのできない領域だった。真紀の視線が下のほうを向いていた。

「彼の笑顔がみられれば私は幸せだから……かな」

彼は真紀を傷つけていたことを察知する。真紀から幸せを奪う権利が自分にはないと思った。しかし、真紀も自分と男の關係に半信半疑なのだろう。だから終わりが疑問のようなニュアンスになったんだと彼は思い込んだ。それから彼は真紀に干渉する

ことをやめた。

それでも彼は真紀のことを考えて絵を描いた。しかし、どうしても不安になると彼は真紀に電話をした。サポートはするが二人の間に割って入ることはなくなった。

「今度、飲もうよ。おごるから。大丈夫、三人だから。浮気じゃないだろ？」

「ええ、悪いよ」

「気にすんなって、あとでメールするから返してくれよな。じゃあ、また」

彼は真紀をどうすることもできないもどかしさに苛まれ電話を切った。描いていたページを破り捨てて、新しいページに新しい絵を描き出す。彼の気持ちはそれで平衡を保っていた。

大学に入学してから二回目の冬が終わった。

私は彼に講義が終わったら時間が欲しいといわれて、たまり場になっている喫煙所で彼と会った。彼は少しイライラした様子で、タバコを吸って吐いてを繰り返していた。顔もどこか怒っているようだった。私は何かを悪いものを感じ取っていた。それを彼の口からきくまでは、どうせいつもの真紀についての気持を私に告白するのだろうと楽観的に考えていた。彼の甘くて熱い言葉をきいている間は、私は心を無にすることでその場をやりすごしていた。今日なんか外は少し暖かくて風にそよいでる木々の枝をみながら彼の話をきこうなんて思っていた。

「やあ、すまん。このあとなんかあったか？」

この後に講義なんてとってないし、アルバイトも夜なので大丈夫だと忘えた。

「真紀がさあ……」

今まで吹いていた風が止んだ。いつものパターンが始まったと私は安心していた。

「真紀が、風俗で働く、らしい」

満開ではないはずの桜の花びらが私と彼の間を通り抜けた。

彼の発言は今までのものとは違った。いつもなら冗談まじりに彼は男のことをけなしたり、冗談とも思えないことを言ってみせたりしたが、今日の彼は違う感情が入っていた。それは鋭く尖った剣のようだった。それと一緒にどこかやりきれない思いや言葉で表現するにはあまりにも非情ことを考えていたのかもしれない。いや、考えていた。彼の絵の目的が変わった。表現するものを真紀への片思いから、男への怨念へと変化していた。しかし、そのことに彼は気づいていない。彼がアトリエに入って描く女性は真紀だった。自分のイメージをうまくトレースしても、描いた真紀には何か異物が入っていた。それを取り除くことはできなかった。彼から見たらわたしは驚いているようにはみえなかったかもしれない。それでも気持ちぶつける人間がいないよりは良かったのかもしれない。私は少し後悔している。このときもっと的確に彼にアドバイスができたならば彼は間違った方向に行かなかったかもしれない。その時の私に

は心残りだった。彼は私の前からいなくなった。彼はアトリエにこもってひたすら絵を描くことに集中した。

秋が始まって大学の銀杏がばらばらと道路に落ちている季節だった。

彼の絵に完成がみえてきた。全体像ができているがまだ心に迷いがあって描ききれていなかった。その間彼は真紀にメールをするだけだった。

『今、バイト中？』

『最近、調子どう？』

『気がついたらでいいから、メールちょうだい』

その言葉に返信が来ることに期待をしていなかった。しかし、彼は時間がある時に真紀をねぎらいたいと思ってメールを送った。自分が献身的に真紀を支えていて、いつかは報われることを彼は願った。彼は何枚ものキャンバスを無駄にしようが今描いている絵は完成させようと努めた。そう決めて彼は絵と対峙した。

ある晩のことであった。その日に彼の絵が完成することになる。真紀から電話があった。彼は慌てて電話に出た。

「もしもし？」

「久しぶり」

「久しぶりじゃん、どうしたの？」

「あのさ……、私さ……」

「どうしたんだよ？　もしかして久しぶりに話すから緊張してる？　やめてくれよ、俺と真紀との仲だぜ？」

彼は道化になろうとしていた。このあと、真紀が深刻なことを話し出すことを必死に遅らせようとしていた。それを悔い止めるためなら、自分の真紀への好意を無視することなんて容易いことだった。からだはその反対で椅子にしっかり座っているのに、膝が笑ってしまっているように上下運動が止まらなかった。空いている手では筆を弄んでいた。彼は真紀の次の言葉を待った。あの干渉した日とは違う状況になっていることはわかっていた。

「あのさ、私さ、赤ちゃん妊娠してたんだ」

彼は真つ暗な闇のそこへ突き落とされたようだった。膝の震えは止まり、片手に持っていた筆は折れていた。それを認識するまでの神経は彼のからだにはなかった。しかし頭では彼の冷静な意識は現実にとどまっていて、言葉の不和が気になっていた。

「えっ？　どういうことだよ？　『してたんだって』」

「だからね、赤ちゃんがね、死んじゃったの」

「それって、なんで？　あいつに何かやられたの？」

真紀はその言葉をきいて、負の感情が流れ出すように泣き出した。その時に彼の描

いている絵が完成した。あとはキャンパスに描くだけだった。彼は電話を切ってアトリエを出た。終電間際の電車に乗って真紀の住んでいるアパートに向かった。今まで乗っていて気づかなかったが、電車がこんなに遅いものだとは思わなかった。彼の心はもう真紀のアパートの前にいるのに、身体は動く箱に閉じ込められている。駅に着くなり、彼は大学生なって初めて全力で走った。次の十字路を曲がった左手が目的地だと思っただけで最後の力を振り絞った。玄関の前で急停止してインターホンを鳴らす。返事がないので、ドアを叩く。「真紀、真紀」と呼ぶ。しかし、もうここに真紀は住んでいなかった。真紀は実家に戻って親に守られていた。彼は途方にくれながらアトリエに帰ってきた。真紀を不幸にさせた男に復讐したいと思った。その気持ちが渦巻き女性の絵を完成に導いた。

絵が完成すると彼は、男をうまく真紀から引きはがした。その方法については何も知らない。しかし、もう絶対に見つかからないようにしたらしい。

年末にあった彼は今までにない晴れやかな顔をしていた。彼は「合コンをしよう」と純粹無垢にいった。そのとき、私はまだ知らない。彼が人の道を踏み外したことを。ゼミ生やバイト先なんかの女性を集めて彼は楽しそうにお酒を飲んでた。私はそのとき彼に何があったのかわからないが、楽観的に人間が成長したのだからとか真紀のことは諦めたと思っていた。

手紙の最後に彼は、俺はお前が友人だからこの告白をしたと書いてあった。次の個展をやる時は奥さんと来てくれとも追伸にあった。

※

手紙を読んだ私は今まで知らなかった事実が出てくるたびに驚いた。妻が寝ていると思っけていても、もしかしたらみられるかもしれない不安にかき立てられた。想像を絶する物語があったことを読んで初めて知った。私の中の曖昧だったものが、これを読んでいて具体的にくっきりとした気がする。

私の知らなかったことを理解すると同時に私は行動に移した。

ソファでは妻が寝ていた。長い時間を一緒にいたのに、妻がこんなにも愛おしく感じことはなかった。よく見ると妻は髪の色が昔とは変わっているではないか。そんな変化にも気づかないで生活していたなんて私は旦那として失格だと思っていた。

私は妻を揺さぶって起こした。もしかしたら、妻がそのまま意識が戻らなくなるかもしれないと思った。しばらくして妻は「なあにい」とけだるそうに目覚めた。

「なあ、今度デパートに行こう」

「はあ？」

妻が素っ頓狂な声をだした。たまにデパートに妻が行っているのはわかっている。もしかしたら、メランコリックな気持ちで「あれ」をみていたかもしれない。妻を拒むなんてひどいことをしてきた。私の心は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「一緒にみたいものがある」

その晩、私たちは心もからだも一つになった気がした。私の感じた快樂は今までは比べ物にならないものだった。何回も交わり、朝を迎えた。しかし、私の昂りは収まらなかった。

二ヶ月後、妻の中に新しい生命が誕生したと妻がいった。

(了)

マーシャル諸島を目指そうよ

る & 深街ゆか

その白い右手がラリックで

わたしの舌べろがラダックであるように絡みついたら

白い波頭の打ち寄せる白い浜辺に眠っている白い貝殻に

その肺から一粒の赤い夕焼けが落ちました

夕焼けの赤い、赤い日付けに

お尻に出来た赤いくちづけの痕みみたいな

シリアスな靴をはいていましたから

裸にとまるモノトーンのひかり、翻して

あなたは適当なステップを踏んで

石楠花いろのさよならを繰り返すふたりの口から

溢れた海の中で

その白い右手がラリックで

わたしの舌べろがラダックであるように絡みついたら

ピーナッツの栽培が盛んなんです

落花生ともいいますね

マーシャルピーナッツの花は世界のどんな花よりも白くて

マーシャル語で白いって言うとき、落花生と言うんです

ちなみに、ですが

長年連れ添った伴侶と死に別れるときにも

なぜだか、白い

って言うんです

なぜだかは知らないんですがね

その白い右手がラリックで

わたしの舌べろがラダックであるように絡みついたら

マーシャル諸島で生まれて

なぜだか赤い糸と呼ばれる糸を手繰りおえたら

マーシャル諸島を目差そうよ

落花生、の一言をもらって

地球上の点の点となり

ほんとうのマーシャル諸島人になって

たどり着くことのできるはずの場所

あなたと出会って別れるための

ピーナツの花が咲き乱れてる

あいりーんらぶらぶ

落花生という意味を持つ

マーシャルで一番白い言葉

たべられたい

深街ゆか

東のほうに飛行船が飛んでる、わたしたちはどこへ帰ろうか、お父さんとパチンコ屋から出てくるところを見てたサトミが、サキちゃんとサキちゃんのお父さんて鼻のかわちが似てるね、なんて言うからあれはほんとうのお父さんじゃないのほんとうのお父さんはわたしが生まれる前に死んじゃった、そう言って髪の毛をいじくったらほんとうにそんな気がしてきて、天国のお父さん元気にやってるかな、お父さんに会いたい、枝毛を抜き取って、分裂とつぶやいた、空に点在する雲、分裂したあと、ユーラシア大陸の向こうへ行くんだって、そんなでたらめ言ったら癒着し、いつかはそんな気になって、分裂してたはずの嘘とほんとうが癒着し、わたしの夢になる。わたしとわたしのお父さんの器官は結びついていない、結ばれないのに結ばれない、縛りつけられたら、告発するようなお父さんだから

風船はすぐにも空へ逃がしてあげて

そうすればわたしたちの未来へ舞い戻ってくる
分裂して空を覆いつくすくらいの数になって

鰐園の餌の時間はわたしとお父さんが鰐を見下ろす時間、ピンク色の肉にかじりついて、お父さん、鰐が肉を食う姿と宇宙とお父さんの財布は似ているね、お父さんはなんのことかわからないような顔して、うなずいて、そうだねと言った、その三つの共通点を言葉にできるほどわたしの脳内の語彙は乏しくて、それでも、大人になるにつれて語彙が分裂をくりかえし、増殖して、いつか三つの共通点を言葉にできるかもしれないけれど、分裂をくりかえす以前の濃密な言葉で伝えられない、お父さん、鰐が鰐である前かれらは名前が無いだけで存在してたの鰐以外の生物として、そう言い残して、わたしは鰐の檻へ入り込み、ぱっくりと口を広げた鰐の体内へ頭から侵入した、真っ暗でぬらぬらしている、わたしひとり分の空間、ぬらぬら、分裂をくりかえして引くに引けなくなつたわたしとお父さん、親族たちとみんなの夢、それから誰が誰から生まれたとか、誰を産んだとか、もう、どうでもいい、鰐の養分になって、排泄される、わたしは、それを選ぶことができた、そのためだけに生まれた、わたし、

天使のはしご

R a i n 坊

天使のはしご

教会で日課の祈りをささげていると、おいぼれの私の前に希望の光が立っていた。私の前にいたのは一人の小さな女の子。彼女が着ている絹の衣はまばゆいほど白く、まるで白百合を纏っているかのようだった。しかしそれ以上に印象的だったのは彼女の肌。透き通るほど純白な彼女の肌は、触れるにはあまりにも美しく、そして儚く見えた。私と同じでくるとした髪をしているが、おいぼれの私と違ってその髪は実に艶やかで見事な金髪だった。一方、私は艶と色をどうの昔に失ってしまい、肌だって一度刻まれたしわやシミを受け入れてしまっている。

それにしても見かけない子だ、と私は思った。

「あなたは何を望むの？」

口を開いたかと思うと、少女は唐突にそう言った。私を覗き込んでくる女の子の瞳から目を離せなくなっていた。

「……の、望み、とな？」

彼女が何を言っているのか理解できず、言葉を繰り返してしまった。それに呆れる

ことなく、彼女はこう言い直した。

「あなたをずっと見ていました。あなたは毎夜、熱心に教会に来ては祈りをささげています。けれど、見ている限りあなたはどうも神に祈りをささげているわけではないみたいです」

私の手が震え始めた。彼女の言ったことが当たっているからだ。彼女は続けた。

「ですので、何かあなたには叶えたいこと、つまり望みがあるのではないかと思いついてね。だから私はあなたに問うたのです。『あなたは何を望むの？』、と」

持っていた本とペンを落してしまった。

震える手を私は力いっぱい握り締めた。痛みが走ったがそんなことお構いなしにぎゅっと握った。そうしなければ私の双眸から涙があふれてしまいうさだからだ。おいぼれとなった私がこんな小さな女の子がかける言葉によって、長年胸中に秘めていた想いを奮い起こされたと知られるのが我慢ならなかった。何より——何より一番嫌だったのは目の前の彼女にそんな醜態を見せることだった。彼女にはそのようなものを見せるのはいけないことだと私の何かやさやいているのだ。穢してはいけないと切に訴えてくるのだ。私は揺れそうになる声を必死に整えて叫んだ。

「私の望みは、偉大な小説家になることです！」

静かな教会に私の声が隅々までわたっていく。彼女は、

「ほう」

と、興味深そうにうなずいた。だから私は言葉を続けた。

「私は妄想をするのが好きな子どもでした。貧乏だった我が家には玩具など買う余裕もなかったものですから、その影響もあるのでしょうか。しかし一番の理由は、自分がどんな立場や境遇であろうと色々なことを体験できるからです。経験できるからです。とある事情で貧乏暮らしをしていた私が王様になって国を治めることになったり、勇者となってモンスターや悪党を軽快になぎ倒していく、はたまた水の中を自由自在に駆け回り、休息の場として利用していた湖で出くわした妖精と恋に落ちたり——等々。本当にそれは多種多様で、現実では無理だと諦めてしまうことも私の頭の中では不可能ではないのです。無限大なのです。なんなら空を飛ぶことだって可能なはずです。私の妄想においては」

彼女がクスッと笑っているのを目の端で捉えた。何がおかしかったのか分からなかったが、興が乗ってしまった口を閉じることはできなかった。

「妄想する時間は私の中で最も至高な時間でした。こんなすばらしいことはないでしょう。こんな輝かしい特技は他にはないでしょう。皆も私と同じように妄想ができれば幸せになれるのに。当時の私はそのように思っていました。そんな幼少期を過ごした私ですから当然、そのような妄想を活かせる職業として作家を目指すのは必然と

「言えるでしょう！」

ここで私は言葉を区切った。自分でも気づかぬうちに熱くなっていたようだ。息が上がっている。ここまで熱くなったのはいつ以来だろうか。私はしばらく息を整える。そして、

「……けれど、やはり現実から逃げることは叶わなかった」

続けた言葉は先ほどまでの熱はなくなっていた。私は喉から言葉を捻った。

「私の書いた話は面白くないのです！ これっぽっちも!! 妄想であれほど輝いていたお話も、いざ書いてみるとどれもこれもちんけな話へと変貌を遂げるのです。あれほど勇敢で格好良かった妄想の中の私が、現実と同じように惨めで醜い奴へと変わり果ててしまうのです。どうしてもそれが嫌で嫌で……」

喉が詰まり、言葉が止まる。何か得体のしれない大きなものが喉に引っかかっているようでとても苦しかった。私は顔を引きつらせながらゆっくりと正体不明のそれを嚥下する。

「……これは私の勘違いなのでは、と思い友人たちに見せたこともありました。しかし一様に眉間にしわを寄せ困った顔をするばかりで何も言っただけはくれませんでした。これほど我が胸中を苦しませるものはありませんでした。しかし、これで確信しました。私の話は面白くないのだ、と」

言葉の最後の方は自らを嘲笑するかのように喋っていた。まるで己の過去を軽蔑するかのよう。

「これでは売り物にならないだろうとそれら駄作全てを葬りました。書いては友人たちに見せ、芳しくない反応をとられ、己の不甲斐なさに嘆き、葬る。そしてまた書き始めるのです。これらをおいばれとなる今の今まで続けてきました。けれど歳を重ねるにつれ、私の書いたものを見てくれる友人もめっきり少なくなってきました。一人、また一人と。今となっては私が何をやっているのか知る者はいません。それほどまでの時が経ってしまった。あつという間に経ってしまった。私がやっていることは何も変わらない。故に私は町の者たちに嫌われていることでしょう。偏屈な、気味の悪い爺とでも罵っていることでしょう。面と向かってそういう態度を取るものはいないが、恐らくそう思っているに違いありません。歳だけは無駄に取っていますからな。町の最年長者として気遣ってくれているだけ。本当に偉いものです。私だったらこんなじいさんに近付こうとは思わないですからな。夢に現を抜かす大人など、迷惑なことの上ない。まあ、ですがそれはいいのです。私がやりたいようにやって、なりたいようになれるよう奮闘した結果がこれならば甘んじて受け入れましょう。まったく、我々を通すというのはそういうことでもあるのでしような。だからせめて私は良きことも悪きことも分別なく自分の内に抱え込むぐらいいはしておかないと、あまりにも振り回

された人たちが可哀相すぎる」

ここで私は一息つく。そしてため息交じりに、

「……それにしても時というのは真に残酷ですなあ」

と、しみじみとした気持ちで言った。

「変わらないつもりでも変化を余儀なくされる。ほら、見てください、この我がみすばらしい身体を。私も若い頃は二日三日徹夜で軽く書いていたものですが、段々と身体が利かなくなってきました。自分の書いている字も見えづらく、筆を執るのもやっとの日も出てきました」

私はしわくちゃになった自分の手を俯きながら眺める。そして改めて彼女の方を向き、

「ですが、私は諦めたくないのです!!」

目の前にいた彼女の姿がぼやけて滲んだように見えた。私は泣いていたのだ。あれほど見せたくない、いやだと思っていた姿を彼女に晒しているのだ。あまりにも齒痒くて、下唇を噛んで必死にこれ以上の痴態だけは避けるように我慢した。おいぼれになってもこれほど恥ずかしくて悔しくて惨めなことがあるのかと思った。

「あれほどまばゆい私の妄想を、現実などに冒されたままにしておけるほど私が私の妄想に対して抱く愛情とも恋慕とも呼べるような感情は軽くはない。それらの言葉に

はできない『何か』がおいぼれた私の胸を、頭を、腕を、指を、そして筆を突き動かすのです！ あんなに美しく楽しいものを現実に出せないなんてこと、私はそれがとても悲しいのです。そして悔しいのです。これでは私は死ぬこともできません。いや、私の妄想を完璧に書ききるまで私は死ぬわけにはいかないのです。ですから私が私にできるうるかぎりのことをしておきたいのです。祈りを毎夜ささげておりますのもそれ故にです。私は神にすがりついてでも誰もが唸るような、誰もが魅了されるような、誰もが目を輝かせるような、誰もがふと思わずため息をつきたくなるような、そして誰もがづらい現実から身軽に旅立っていられるような——それほど完璧な私の妄想を書きたいのです!!」

自分を語っている内にどうやら涙も流れ切ったのか、ぼやけた視界は元どおりになっている。彼女はいつの間にか足を組んで、説教台に座っていた。そして人差し指を唇に当てて何か思案しているようだった。小柄な彼女がどうやって説教台に座ったのかも謎だったが、それよりも彼女の様子がまるで講壇に立っているようで奇妙に感じていた。罰当たりな行爲であるはずなのに、どうしてか私はこれから彼女から説教を受けるのではないのかとふと思った。座っているというのに、講壇に立たれている気がするとは我ながら本当に奇妙な感覚だ。

「なるほど、ね」

彼女はそう呟き、口元をゆるめた。

「いいでしょう。あなたの願い、私が叶えてあげましょう」

そう言って彼女は説教台から勢いよく飛び降りた。不思議なことに着地音がまるでしない——彼女の足は地についていなかった。万物の法則に縛られている私たちには到底叶うことができない現象が目の前で起きていた。

彼女は宙に浮いていたのだ。

「だって私は——」

小さな背には絹の衣より彼女自身のまばゆい肌よりも艶やかに、そして教会の窓から漏れ出る月光に照らされて白銀に輝く羽根がそこにはひろがっていた。

そう。これではまるで——、

「天使なのだから」

私は彼女が悠々と飛んでいる姿を、阿呆みたいに口をあんどりと開けてただただ見惚れることしかできなかった。教会内の煌びやかな装飾たち。その中でも特に彩強いステンドグラスと十字架を背景に、月明かりがスポットライトのようで、中心にいる彼女をさらに引き立たせている。その光景はまるで現実味を帯びておらず、実に華々しいものだった。教会の静肅な空気がより引き締まった——ような気がする。澄んだ水辺にでもいるかのようなどこか清々しい心地になる。彼女の存在がこの場の空間を

浄化しているような錯覚さえ覚える。いや、実際にそうなのかもしれない。彼女曰く、私の目の前にいるのは小さな天使なのだから。

神に使えし、天からの光。

それがおいぼれた私の現実に降り立っているのだ。

教会は静寂に包まれている。お互い無言で、清廉な空気を漂わせるこの場、この瞬間ではそれがある種の緊張感を感じさせる。ただそれで私が委縮しているかというところは間違いで、緊張は確かにしている。でも長年内に秘めていたものを吐露したからなのか、それとも理解してくれるものがいたからなのか。どちらにしても、どちらであろうと今ほど良き時はなかなか見つけられないことだろう。

これから何かが始まる。

外に出した分を取り戻すかのように、そんな期待感が私の胸には詰まっていたのだ。

「改めてあなたに問いましょう。あなたは何を望むの？」

天使は悠然とした微笑みを浮かべながらまるで私を迎え入れるかの如く、両手と翼を広げ、幾度目かになるこの問いかけをするのだった。

「わ、わわ、わたし、わたし、し、私、は……」

開けっ放しになっている口をなんとか動かそうとするが、どうにも上手くいかない。それとは反対に眼だけはしっかりと彼女の姿を捉えて放さなかった。いや、これはこれで上手く働いていないのかもしれない。見蕩れて、見惚れて、まばたきすら忘れてしまうぐらいに私の眼前を優雅に、軽やかに宙に浮いている天使の彼女。それは触れてはいけない非現実的な、それこそ私の妄想に出てくるような存在のようで、まるで私の現実が麻痺を起しているみたいだ。幻想や幻覚を見ているようで恐ろしくも嬉しい。それにしてもただでさえおいさらばえたと身に染みて思い知らされていたのに、さらにここまで役に立たないものになれるとは思ってもみなかった。現在がどん底だと考えていたのだけれど、どうやらそこから先に穴を掘って突き進むほどの余裕があったようだ。驚くべき事実だ。この歳になってある意味での可能性を知ったわけだ。この場合の可能性は悲観思考極まりないのだけれど。

「どうしたのですか？」

先ほどまで威勢よく雄弁だった私の口先が急に鈍くなったのを不思議に思ったの

か、天使は首を傾げていた。なおも私は言葉を紡ごうとしたが、まるで駄目だった。「今、あなたが本当に望むことを言えばいいのです。気兼ねなく、心からやりたいことをあなたの口から直接私は聞きたいのです。それだけのことをあなたはやってきたのですから」

天使は諭すように、優しく私に囁く。それがどれだけありがたいことか。そういえば、胸に温かさを感じるのはいつ振りだろうか。少しばかり己の人生を顧みたような気がした。

「……今、私が望むこと。やりたいこと」

するりと言葉が出た。もごもごとそれらの言葉を繰り返した。恐らく呟きにすらなっていないこともあっただろう。ふと、天使に視線を移した。彼女は地に足がついていないからか、忙しくぶらぶらと足を動かしていた。その様子を見て、私は心を決めた。普段ならばそのような感情は心に留めて霧散するまで放置しておくところだが、今回に限りそれを良しとせず、外に出すことにした。言葉を、自分を出すことにした。

「————たい」

「ん？」

「私は——あなたを書きたい！」

「……へっ？」

彼女は実に間の抜けた声を発した。今まで少女らしからぬ態度をとっていた彼女は、ここで初めて年端のいかない少女らしい表情を見せた。そこで改めて私はしっかりと、はっきりとした口調でこう言い直したのだった。

「私にあなたを書かせてほしい！」

「……………あー、えっと、どういふことでしょうか、それは」

彼女はしばらく呆然としていたが、咳払いをして毅然とした態度を取りなおした。それがなにより可愛らしい。私は緩みそうになる目尻と口をきゅっと絞った。卑猥な爺と思われたくなかったからだ。少女を目の前に老人が緩やかな笑みを浮かべる。孫と祖父が戯れている微笑ましい光景ではないか。もしくは実は犯罪的な光景ではないか。しかし私と彼女は先ほどあったばかりの縁。似ている要素もくると捻った髪ぐらいで、後は似ても似つかない。これでは誰も祖父と孫とは思えない。何より可憐な彼女とおいぼれの私を同一視するのは彼女にとても失礼だ。そして後者の場合は洒落にもならない。言葉にするのもおぞましい。どちらにしても御免被る。だから私は自制しなければならぬ。自制して、こう言うしかないのだ。

「私は裸の君を書きたいのだ!!」

「はだかあああ？」

彼女は素っ頓狂な声を発して床に墜落した。翼が生えている背から落ちたのでそれ

がクッションとなって衝撃はそこまでないようだった。のっそりと立ち上がったかと思ふと急にこちらをキッと睨み、

「何を言っているんですか、あなたは！」

と、怒鳴った。私はその様子を見て安堵した。彼女の素晴らしい柔肌に傷でもついたら大変だ。それにしても彼女は威厳も一緒に落としてしまったみたいで、癩癩を起した子供のように感情を剥き出しにしていることが私を大きく戸惑わせた。どうして彼女はここまで怒っているのだろうか。

「何って……。だってあなたが私のやりたいことを、望むことを言えとおっしゃったではないですか。私はただそれを忠実に従って行動したまでです」

「だからって限度というものがあるでしょう。まったく、けがらわしい！ 大体、あなたは偉大な小説家を目指しているのでしょうか。何故それを願わないのですか」

「確かに私は偉大な小説家になりたいと言いました。だからこそ、私はあなたを書きたい」

「だからそれが理解できないというのです。先ほどまでの熱弁は嘘だったとしても言うのですか!？」

「まさか。あの言葉は真意ですよ」

「ならば——」

「ゆえに、私はあなたを書きたいのです」

「ああ、もう!!」

彼女は地団駄を踏んだ。翼もそれに呼応してか、ばさばさと荒ぶる。怒り震える主から逃げるように抜け出た羽根たちは無秩序に散らばり、有象無象の衆とかがして辺り一面を埋め尽くす。

「訳がわからない。本っ当に腹立たしい！これだから人間は!! 曖昧な癖に変に頑固で。繊細かと思ったら大胆で、柔軟かと思ったら融通が利かない。私には人が理解できない」

白々しいまでの頬を真っ赤に染めて、彼女は憤慨していた。

「かっはっはっは」

私は彼女のそんな様子を見て、思わず笑ってしまった。それはもう満面の笑みだ。腹を抱えるとまではいかないが、目許に涙が溢れてくる。笑い過ぎて咳き込むほどだ。それがさらに彼女の頬の色合いをより濃くさせることだと分かっているのはいたもの、どうにも止めることができなかった。案の定ではあるが彼女は、

「何を笑っているのですか！」

ますます声を荒げて地団駄を踏み、逃げ出る羽根たちの数もますます増えるのだ。私は溜まった涙を指で軽く拭くと、

「いやー、なに。大したことではありませんよ。まあ、でもあなたには分からないことではないでしょうかね」

と嘯くのだった。

「それはなんですか、私が阿呆とでもいうのですか！」

彼女は今にも襲い掛かってきそうな剣幕で怒鳴りつける。

「くっくっく」

さすがに明瞭な笑い方こそしなかったが、忍び笑いがつい漏れ出てしまう。

面白きことこの上ない。

彼女は人間を、私を理解することは一生できないだろう。天使の一生がいかほどあるのかは知らないが、それだけは確実に言える。

だがそれでいいのだ。

彼女は、それがいいのだ。

私たち人間を理解できないからといって私が彼女のことを侮辱するかといえばそうではなく、むしろますます好感を強め、崇拜すらするだろう。神さえ信じない私が、天使は信じることになるだろう。信じて敬うことになるだろう。彼女は我々人間を理解する必要はないのだ。彼女の存在は我々人間とは格が違う。生きているステージが違う。彼女は私の妄想に登場する人物たちのようにピユアで、そして決して汚しては

いけない存在だ。現実には汚されることなどないのだ。わざわざ私たちと同じ位置に落ちることなどあってはならない。そもそもこうやって相對していることさえ奇跡のなせる業だと私は思う。それこそ、神のなせる業だと思う。だからこそこの奇跡を使つて、私は裸のままの彼女を書きたいのだ。先ほどはいきなりで戸惑ってしまったが、今ならはつきりと言える。この彼女を見たかったのだ、と。今のような、素の、天の使いであることを意識せず、感情の赴くまま、自然体であるあなたという確固たる個を書きたかったのだ。それほど価値が彼女にはある。私が長年思い描いていた理想——つまりは私の妄想に近い、いやそれ以上の、予想外で想定外の至高とでもいふべきか。もう彼女と同じ存在など二度と私の前に現れることはないだろう。老い先短いこの身でもあるし、今までも出会うことがなかったのだ。これからもそんな幸運が訪れるなんてことはないだろう。また出会えるなどと、そこまで樂觀的になるには私は多くの別れを経験し過ぎた。だから今のこの機会しか私には残されていないのだ。

「もう知りません!! いかにも神に言われたこととはいえ、あなたのような下賤の輩のことなど私には関係ありません。私、帰らせていただきます」

どうやら彼女は怒りの限界点を通り越したらしく、今にも飛び立たんとしている。「ちよっとお待ちください。それは困ります」

私は彼女の衣を掴んで引っ張り、なんとか飛び立つのを阻止した。どうやら衣の強

度があまり高くないのか、彼女は無理矢理飛んだり、引っ張り返したりはしなかった。代わりに、

「それこそ知ったものですか。むしろ困りなさい、このケダモノ！ 人間の屑ニ あゝ、すみません間違えました。人間自体がそもそも屑でしたね。私としたことが言葉

を誤りました。訂正しますね——この屑以下の塵が。ちなみにこの発言に対しての誤り、ましてや謝りは絶対ありません」

などと、罵倒を私に浴びせかけのだった。背筋に奇妙な感覚があった。それは虫が這いあがってくるような、痺れるようなそんな感じだった。よく分からない奇妙な感覚に手の力が緩みかけたが、逃がしてはならないという強い思いから残り少ない歯を食いしぼる。それでどうにか衣を離すのだけは免れた。だが、このままではいずれこの手を離してしまい、彼女に帰られてしまう。だから私は彼女を宥め、説得することにした。

「落ち着いてください天使様。とりあえず、どうして駄目なのか教えてもらえないでしょうか」

「それは当たり前でしょう。その……なんか倫理的に」

口ごもりながら彼女はそう言った。

倫理的に？

それは一体どういうことだろうか。どうして彼女の自然体を書くことが倫理的な問題に繋がるのだろうか。私には不思議でならない。

「しかし願いを叶えるとおっしゃったのはそちらですよ。天使というのは一度言ったことを違えるものなのですか？」

「まさか！ それはあり得ない。神に誓ってもいいです」

「ならば我が願いを叶えることに何ら問題はないではありませんか！」

「それは……てっきりあなたの願いが偉大な小説家になることを前提とするものと高をくくっていたから——いや、何でもありません。とにかくあなたの変態的な願いには付き合いません。諦めて違う願いにするか、願い自体を失くしてしまうか。そのどちらかです」

「むう……」

このままでは埒があかない。

そう思った私は少々説得の方向性を変えることにした。

「そういえば話は変わりますが」

「……なんですか急に」

如何にも不自然な話題転換だったので、彼女に少々警戒されてしまったようだ。不審そうな顔をされた。

「先ほどあなた様は神に言われたから、といった塩梅の話をされましたが、これほどいう意味ですか？」

「……それをあなたに言う必要はないです」

これまで怒鳴りつけたり口調が荒くなることはあったが（まあ、どれもこれも私が悪いようなのだが）、その中で投げかけられたどの言葉よりもこの時の言葉は重く、そして冷たかった。

これは当たりだな、と私は思った。

「ああ、それもそうですな。失礼しました」

しかしここで押すことはせずに、一端引くことにした。核心を一気に突いて逆上させても困る。

「正直、無理な願いだとは分かっています。私のようなもの相手に身を任せるなど、到底できるものではないでしょう。しかし、それを承知で私は頼みたいのです」
地べたにおでこをこすりつけるように私は頭を下げた。

「……ふん、無様ですね」

私からは見えないが、恐らく彼女は軽蔑の眼差しで私を見下ろしていることだろう。本当に無様だと思う。

だが、今更誇りなどいらぬ。

願いを叶える——その大事の前では実に下らない。そもそも何かを成したことによって誇りは産まれるものだと思ふ。そういう意味では私はまだスタート地点にすら立っていないのだ。

私は頭を切り替えることにした。

現実と、妄想を入れ替える。

夢と現を行き交う私だからこそできる。

おいぼれのじいさんから——あらゆる事件を冷静さと理論によって、些かニヒルに振る舞いながらも解決へと導く、そんな存在。そう、今の私は名探偵なのだ。

「——ところで」

「もういいです。あなたが何と言おうと、何をしようと私の意志が変わることはありません。あなたの下衆な願いは取り下げです」

「まあ、そう言わずに。それに今から話す内容は私の願いのことではありません。例えば——そう、これは仮定の話。このおいぼれの達者な妄想力を働かせた戯言だと思ってください」

彼女は怪訝そうな表情を見せた。だが、私の話を遮ろうとせず、ふわりと飛んで足を組み、手に顎をのせながら説教台に座った。どうやら彼女の興味は引けたようだ。「あなたは先ほど神に言われて——といったようなことを言いました。まあそこはさ

して問題ではありません。あなた方天使は元より神の使いと、我々人間たちの中では呼ばれております。そんなあなた達のことです。神から何かしらの使いを仰せつかったのでしょうか。だからこうしてこのようなところにいる。まあ、そんなこと関係なくやって来る物好きな方も、もしかしたら天使の中にはいるかもしれないですが。それでも大抵は使命として降り立つことでしょうか。勿論、あなた様がその『物好き』だとしたら話は代わりますが」

ここで一度話を止め、彼女の様子を窺った。すると手に顎をのせたまま、ぶいっと横を向いてしまった。横からだけでも不機嫌なのが見てとれる。どうやら物好きは意外と多いらしい。天使でいることに誇りを持ち、かつ人間が嫌いな彼女にとってそれはあまり面白くないことなのだろう。そして自分がそれらと同類扱いされたこともまた——などと邪推してみる。確認はしない。あまり機嫌を損ねすぎると話を聞いてくれないどころか本当に帰られてしまうだろうから。

閑話休題。

話を戻そう、いや話を続けよう。

「つまるどころ、天使であられるあなた様は神に何かしらの『使い』を頼まれたのでしょうか。それが何なんのかまでは今の段階ではあまりにも情報不足ですので私には分かりません。ですがここで私が重要視するのは『what』ではないのです。現在注目

すべきなのは『why』——つまり、なぜ？ です。なぜ、の問いに關して既にあなたは答えをご自分で言っておられます。そう、それが『神に言われたから——』というあの發言です。ね——そして」

「話が長い。要するに何が言いたいのですか？」

彼女は結論を急かす。

「わかりました。私としては分かりやすく話しているつもりだったのですが、まあいいでしょう。それでは少々掻い摘んで」

軽く咳払いをしてから私は言った。

「つまり、神の使いで私の元へ来たと仮定すると、もし私の願いを断ったらあなたは墮天します、以上」

「何故そうなった!？」

いつの間にか私のところへ近づいていたかと思うと頭を叩かれた。しかし、まるで痛みを感じなかった。

「いや、だってそうでしょう。使いが嫌だってことは、それ即ち神の意向に逆らうってことではないですか。つまり墮天させられるでしょう、そんな天使」

「いやいやいや！ 神はそんなに狭量な方ではありません」

「そんなもの知りませんよ。だって私は神を見たことないのですから」

ましてや、

「——いるかどうかも怪しいものですよ、神なんて」

「なっ!! 侮辱とみなしますよ!」

「まあまあ。そんなに顔を真っ赤にしなくてもよろしいではないですか。ただの人間の戯言ですよ」

「いいえ! 例えあなたの発言を神が許したとしても——恐らくそうなることに違いないですが、けれど私は絶対にあなたを許しません!!」

「なるほど。どうやら神は器が大きい方ようだ。少なくともあなたは」

「——っ!」

彼女は悔しそうな表情を浮かべたが、私の発言を否定することはしなかった。否定すると逆に神の器が小さいと肯定してしまうことになるからだ。ふむ。どうやら私のペースだ。そろそろ畳み掛けるとしよう。

「ならば、同じ天使ならばどうでしょう」

「どういふことですか?」

訝しげな顔をして、彼女は問い返してきた。

「例えば、同じ職場の者が職務を放棄したと聞いてどう思いますかね。しかもその理由が嫌だからというだけで」

「それは——」

と、何かを言おうとしたが結局彼女は二の句が継げなかった。どうやら思い当たることがあるようだ。

「恐らく、我儘な奴だと思われちゃうね。そうなってくると慈悲深い神がいくら許したとしてもその辺りが黙っていないでしょう。そうなってくると神としてもけじめをつけなくてはならなくなります。一人だけ鼻屑を做的是はいけませんから。神として。だから墮天するしかなくなる。いやー、怖いですね。本当に怖い。私が関係作りで最も慎重になって、怖いと思うのは上の立場の者よりも同じ立場の者ですね。そこを敵に回すと守ってくれたり徒党を組んだりすることができませんからね」

「……………」

彼女は黙り込んで、愕然としているようだった。

どこの世界も環境も、変わらない。根本的に。根幹的に。何も変わらない。だからこそ私は妄想という世に影響されぬものを心に抱くのだ。

彼女は呆けたまま、びくりとも動かなくなった。

先ほどの私もこうだったのだろうか。

そう思いながら、このまま時間が過ぎるのを待つのも何だったので、

「……………墮天使」

ぼそりと聞こえるようにわざと呟いた。すると、

「うっ」

しかと彼女の耳に届いたようで一瞬怯んだ。そして悔しそうに、身悶えしそうなほど齒痒い表情を浮かべて、

「ああもう、分かったわよ！ 書きなさいよ、書けばいいじゃない!!」

と、半ば投げやりなりながらも彼女は確かに承知してくれた。

よし。

そこで私は目を閉じ、頭の中の現実と妄想を入れ直した。現実の私が帰って来る。そして今までの自分の行動発言を思い出し、多少の罪悪感に蝕まれた。今更ながら少し強引だったかなと反省した。これは詫びの言葉をかけなければと思ったところで、目をかっと見開く。すると驚くことに彼女はなぜか急に服を脱ぎだしているところだった。あまりの衝撃に咄嗟の言葉が出ない。そんな私の代わりに消え入りそうな声で彼女はこう言った。

「……綺麗に書いて、ね」

ああ。私は今日、死ぬかもしれない。

そう思いながら愛用のペンと本をしっかりと持つのだった。

私の手はもう、震えることはない。

少しばかり人が多い、しかし都会と呼ぶにはあまりに口寂しく、物足りないを通り越して物が無い、なくはないが何がいいのか当人には分からないような、そんな片田舎においてだけ名が通っている我が町。そんな町の今朝の天気は曇天の空模様。どんよりと町全体が暗く、重苦しく感じる。空と町は同調しているのか、憂鬱な表情を浮かべる住民たちを多く見かける。

そんな中、俺は口笛を吹きながらのらりくらりと歩いていると教会に大勢の喪服姿の人がいた。

「葬儀の参列者、か……」

指で輪っかを作ってその穴から人々を覗き込んだ。ちなみに、この行動にさしたる意味はない。意味のないことを意味ありげにするのが好きだけなのだ。

行儀よく並んで揃ってぞろぞろと動く黒い列は、まるで蟻たちのようでなんだか健気に感じる。蟻に健気さなど一度たりとも感じたことなどないのだが。

「それにしても——」

どこか高い身分の人が亡くなったのかな、と考えながらそのまま通り過ぎようとして、

「あり？」

輪っかの中に——もとい参列者の中に頭一つ分抜け出ている奴を見つけ、ふと足を止めた。何故なら、それは俺の友人の頭だったからだ。

「ん？ ああ、おーい」

友人も俺の姿を捉えたらしく、こっちに手を大きく振ってきた。友人は何事も大きいのだ。大勢の視線が友人と俺に向けられる。

「うう……」

浴びるほどの視線にたじろぎ、少々の居心地の悪さを覚える。この場からすぐさま逃げ出したくなる。

しかし、だ。

せっかく人目を気にせず友人がこちらに手を振ったのだ。これに応えずして何が友人か。俺は友人の元へ出向くべく、参列者で密集する地帯へ足を踏み入れ——ようと考えた時点でとてつもなく億劫になり、結局それを行動に移すことはなく、友人にこいこいと小さく手招きをしてみせたのだった。誰が何と言おうとこれが俺なりの友情

の示し方なのだ。

俺の手招きを見た友人はこれまた大きく頷くと、うごめく参列者の波とは逆方向にくねくねと動きながら抜け出してきた。わざわざ並んだ列を抜け出してくるとは。面倒なことだろうに、ご苦労なこった。どうも我が友人は俺に優し過ぎるきらいがあるようだ。

参列からやっとのことで抜け出し、俺の元へとやってきた友人は他の参列者同様、喪服姿だった。葬儀の列に並んでいるからそれは当たり前ではあるが、しかし普段一緒にあってふざけている友人の体裁を整えている姿はどこか新鮮に映った。

軽くまた挨拶を交わした後、

「随分と立派な葬儀じゃないか。どっかのお偉いさんでも亡くなったのかい？」

先ほど疑問に思っていたことを口に出してみた。

「お前知らなかったのか？ ほら、町はずれにある一本杉の丘に住んでるじいさんがいただろう」

「ああ。あの変人の」

「そうそう。そのじいさんの葬儀だよ」

「えっ、あのじいさんついに死んだのか。俺がガキの頃からじいさんだったからってきりずっと死なないもんだと思ってたよ」

「おいおい、不謹慎だぞ」

友人は一瞬、厳しい顔つきとなった。しかし直ぐに、

「まあ、正直俺もそう思ってたんだけどな」

と、俺の軽口に笑みでこたえてくれた。本当にいいやつだ。

「それにしてもあのじいさんの葬儀にこれほどの人数が来るなんてな。ひょっとしたら町の三分の一ぐらい奴が来ているんじゃないか？」

「さすがにそんなにはないだろう。あーでも確かにそのぐらいにも感じるな。こんなに密集していちゃあ、な」

そう言うと友人は懐から煙草を取り出して火を点けた。深呼吸をするように吸い込み、ふうーっと一気に吐き出した。その際に出た煙草の煙が、上空に広がっている雲に繋がっていくようにゆらゆらと立ち昇っていく。

「実はじいさんってお偉いさんだったのか？」

俺がそう訊ねると友人は首を振って、

「んーにゃ。それこそただのじいさんだよ。ただの、変なじいさんだったよ」

どこか遠くを見つめるように友人は言った。その際、煙草の先からぼろりと灰が落ちる。

「まっ、それでもあのじいさん、変人で無愛想ではあったけど、人柄だけはよかった

からなあ。お前も散々面倒見てもらっただろう」

「そうだな……」

友人の言葉に頷きながら俺はじいさんの姿を思い浮かべていた。

俺が知っている限り、じいさんはいつも本とペンを持ち歩いていた。そしていつでもどこでも『何か』を書きこんでいた。道を歩いている時も、誰かと話している最中であっても、所構わず誰彼かまわずそんなことをやっていた。だから町の皆はじいさんを変人と呼んだのだ。

一度だけ俺は『何か』について尋ねたことがある。するとじいさんは、

「さあね、何だろうね」

と、曖昧にはぐらかすだけだった。本当に何をやっているのかはさっぱりだった。他の町民たちも何をやっているのかは知らない。

そういえば昔こんなことがあった。とある悪戯心を起こした将来有望なこと間違いないの小僧が本を盗もうとする事件があった。その小僧は犯行を行う前に、俺がじいさんの本を盗んで謎を解き明かすといったようなことを町の人たちに吹聴していた。本来ならば叱って止めるべきなのだろうが、誰もがじいさんの本の中身に興味があるのは違いなかつたので小僧の悪戯を止めようとする者は一人もでなかつた。むしろ応援する者も出る始末。それがますます小僧を調子づかせる結果となった。

そしていよいよ実行の日。町の誰もが固唾を飲んで見守る中、小僧は走ってじいさんの元へ向かい、本を奪おうとした。しかし本に手が届いた瞬間、大胆にすっころんでしまい、見事に失敗してしまった。じいさんは小僧が本を盗もうとしたことに気づいてとても怒った。すさまじい形相をしたじいさんに睨まれた小僧は逃げるのを忘れ、一本杉の丘にあるじいさんの家まで引きずられながら連れて行かれた。そして二日ほどたってやっとじいさん家から帰ってきた小僧は言葉少なに、

「もうじいさんの本は盗まない」

と、だけ言って覚束ない足取りで自分の家に帰っていったのだ。その様子を見て、我が町の住人達は二度とじいさんの本には触れないでおこうと心に誓ったそうだ。そして、何を隠そうその将来有望で誰もが成し遂げられなかったじいさんの本を盗むという行為をやったのけた町のヒーロー的存在である小僧こそ俺なのだ。正直あれほど怖いことはなかった。まともに語るのも恐ろしい。だからたった一言、誰かの物は不用意に盗むのだけは止めておくとだけ言っておこう。

このようなことがあったとはいえ、それでじいさんから人が離れていったかというところではない。むしろ彼にはよくよく人が集まっていた。どうしてかは分からないが、じいさんには不思議な魅力があった。つい構ってあげたくなくなるというか、ほっとけないとでもいうのか。相手をそういった心持ちにさせるのがとにかく得意なのだ。

しかもじいさんにとってそれは意識的にやっているものではなくあくまで自然体でやっているのです、いくら不躰な態度をとられても皆、

「しょうがないなあ。あのじいさんだしな」

と苦笑しつつもやはり許すのだ。いや、許すというより受け入れるというニュアンスが近いかもしれない。敢えてそれを言葉にするなら相手の寛容な心を引き出すのが上手いじいさん、ということなのだろう。そう言えばじいさんは誰の隣にでもいるような人だった。

時には寄り添うように。

時にはつき従うかのように。

そしてまた、時には家族のように。

何も言わず。何も見返りなど求めず。

じいさんは傍にいてくれた。

ただ淡々と自分の世界に籠っているような人だったが、俺たちが誰かにいて欲しいと願うそんな時、じいさんは必ず近くにいてくれるのだ。

俺の母さんが亡くなった時もそうだった。

俺は母さんと二人暮らした。貧乏は貧乏だったが母さんが必死になって働いてくれていたのでそこそこ幸せに暮らしていていた。俺もやっと働ける歳となり、母

さんに楽をさせてあげることができると。

そんな風に思っていたある日。母さんは死んだ。事故死だった。

母さんの死は予期せぬもので、事前の構えもなく、ただ死んだという事実を伝えられた時の衝撃は今でも忘れられない。親戚の誰かが淡々と葬儀を済ませる中、俺はただ呆然と立ち尽くしかできなかった。泣くことも、喚くこともできなかったのだ。そこまで感情や思考が追いついてなかったのだ。感情と思考が追いついた時、螺旋状に交り、混じりあって激情になって俺に襲い掛かってきそうで怖かった。

そんな時だ。じいさんが俺の傍らにいたのは。

母さんの墓前で突っ立っていた俺の横に、いつのまにか胡坐をかいて座り込んでいた。勿論、足の上には本とペンが並んでいる。

彼は何も言ってくれない。慰めるとか助言をしてくれるとかそんなことは一切ない。いてくれるだけで何もしてくれない。彼はただペンをひたすら動かすだけだった。けれど、だからこそ、それがなによりありがたかった。今となってはそう思う。この時の俺に何かしら言葉をかけていたら、恐らく俺は発狂していただろう。それほどまでの情だったのだ。こればかりは言葉で片付けることはできない。自分で、時間をかけてちょっとずつ処理していくしかないのだから。

じいさんは言葉どころか態度にすら表さない、不器用どころか不親切、不謹慎にも捉

えられないそんな行動だったけど、俺は確かに助けられたのだ。救われたのだ。じいさんが熱心に一つのことには心血を注ぎこむその姿を見て、俺たちは励まされるのだ。頑張れ、頑張れよ、と。

そのことを分かっているからこそ皆、じいさんを慕うのだ。じいさんに集まるのだ。受けた恩を返すがごとく、じいさんを一人にしておかないのだ。甲斐甲斐しく、世話を焼くのだ。

俺たちが見守るじいさんは歳相応に弱弱しく、常にいつ倒れてもおおかしくない様子だった。それでもひたすら前だけを向いて頑張る姿に、我々は今を生きる力を貰っていた——そんな気がするのだ。

我が町を訪れることがある際はじいさんのことを誰かに尋ねてみるといいだろう。恐らく誰に尋ねてもこういうことだろう。

「変なじいさんだよ。けど悪い人ではない。ただ変で、人のいいじいさんだよ。」

「ところでどうしてここで葬儀やってるんだ？ あのじいさん、神様信じるような玉じゃなかったと思うんだが」

俺は教会を指さしながら訊ねた。

「ん？ ああ。いや、何でもここ最近通い詰めていたらしい。通い詰めて、いつも思いつめた顔をしていたらしいぜ。もしかしたら自分の死期を悟っていたのかもしれないな」

「……ふーん、そうか。ちなみに死因は？」

「それがよく分からないんだよな、これが。恐らく、年齢的に寿命だとは思うんだが。それにしたって妙な亡くなり方だったらしい」

「妙？」

「ああ。じいさん、教会の説教台のところにもたれかけるように亡くなっていたらしい。神父がそれを見つけたらしんだが、何だかこう——幸せそうだったらしいんだよな」

「幸せそうだった？」

最期の者を表す表現としてはあまり聞かない言葉だったので思わず繰り返してしまった。

「そう。幸せそうに、子供が満足して眠ってしまったみたいに安らかそうな表情だったらしいんだ。しかも大事そうに本とペンを抱きかかえながら。だから最初、神父も寝ているだけだと勘違いしたらしくってな。亡くなっていると分かって随分と驚いたらしいぜ」

「それはまた——」

よかったじゃないか、と続けようとして自粛した。思っても口に出すことではない。ましてや当人の葬儀が行なわれている日には、特に言うべき言葉ではないだろう。しかし、それでも。自分を偽ることはできない性分なのだ。だから、よかった。

と、口には出さずとも、態度に出すこともないけど、心からそう思うのだった。

「あれ？ それじゃあ、その本はどうなったんだ？ じいさんと一緒に弔うのか」

「いや、それがそうじゃないんだ。神父も他の町民たちもそうしようとしたんだけど、しなかった——本の中を見てしまったから」

「本の中!! 確かにじいさんが死んでしまった以上、止める者はいないものな。処分を決めないといけないし中身は見る必要があるか。うーん、それにしてもどんな内容なんだろうな。あっ、そうだ！ じいさんと一緒にしなかったのなら今どこにあるんだ、その本」

盗人になってまで中身を見たかった俺としてはこの事實はかなり興味をそそるものだ。ましてや見ることに失敗している分、お預けを食らっているようなもので他人よりも知りたいという欲求は強いと自負している。

「教会に置いてあるよ、誰でも見れるようにしてあった」

「そっかそっか。見に行きたいなあ。あーでも見たくないような気もするし。でも気になる。あっ、でもその言い方だともしかしてお前も見たのか、中身」

「ああ」

「どうだったんだ！ それはもう、ご大層なことが書かれていたんだろうな」

「いやー、それがさあ」

と、また煙草を取り出し火を点ける。俺は話を早く聞きたくて、煙草湿気ろと思っただ。友人は煙草を吸う最初の動作が実にのろまなのだ。緩慢な動作でやっと最初の一回吸いが終わった。その間、俺は友人の前を行ったり来たりと実に落ち着きがなかった。そして待たされた挙げ句、

「いやー、まったく分からなかった」

と、笑いながら言うのだった。

「ちよっ、分からなかったってどういうことだよ。お前、字が読めないってわけじゃないだろ」

「それはそんなんだが。だって分からないものは分からないんだよ。読めないんだから」

「読めるけど、読めない？」

俺は困惑した。字は読めるのに分からない。だって読めないから。どういうことだろうか。意味がわからない。謎かけでも出されているのだろうか。ここで小気味よい返しをすれば正解でいいのだろうか。それはそれで意味が分からない——などと思案しているうちに考えが考えを呼び、思考の袋小路に入ってしまった。

そんな俺を誘導するかのように友人は言った。

「だって文字になってなかったんだよ。字そのものが、さ。ミミズみたいなのたくさん並んでいるばかりで何て書いてあるのかまったく分かんなかった」

「ああそういうこと」

それならそうと早く言ってくれ。危うく勘違いするところだった。

「クセ字ってことなのかな、それって」

「どうだろ。もしかするとじいさんにも読めないかもしれない。今際の際にやっとのこと書いたものかもしれないしね」

「あー。あのじいさんなら有り得る」

「だろ」

互いを見合って俺たちは笑った。大いに笑った。

「そういえば昔、こういうこともあったよな。じいさんが公園で——」

「そうそう。これも覚えているか。冬の祭りごとの時にじいさんに言い負かされた——」

自然と俺と友人はそうやって昔の思い出を語り始めた。俺と友人が友人になってから現在まで。そのいずれにもじいさんはいる。彼は本当に俺たちの傍らにいたのだ。そして、いなくなったのだ。

——昔話をすればするほどそれを意識してしまう。友人もそうなのかもしれない。だって昔話に花を咲かせて笑い合いながらも、俺たちの間に緩やかな雨が頬を伝うのだから。

曇天の空はまだ晴れない。

中中中

「それで結局、じいさんの本はどうなるんだ？」

昔語りが一区切りつき、再び本の行方が気になった俺は友人に問いなおした。

「ああ、そうだった、そうだったな……」

友人は頭を指で搔きながら笑っていた。

照れ隠しにも感じるその微笑みが、どこか名残惜しそうに見えたのは俺の気のせいだろうか。

それとも――。

いや、これ以上は止めておこう。他人の心境を探ることほど詮無きことはない。俺は友人ではないのだ。他の誰でもない俺なのだ。友人が友人そのものであるのと同じように。誰にも推し量れないのだ、心というやつは。それでも友人は、

「あれなら教会だよ」

と、すっかり答えてくれた。それで俺は良しとするべきなのだ。探られたくない胸の内は誰の中にもある。友人にも、俺にも。だから俺は何も気付かなかった振りをして会話を続けることにした。

「教会に？」

「ああ。教会の中で展示されてたよ。誰にでも見れるようにしてあった」

「でも本の中身、読めなかったんだらう。何でそんなもの展示する必要があるんだ？ しかも教会で」

価値ある内容であればそれも分かるものだが、じいさんの本の場合そもそも読める代物ではないのだ。つまりは——いらなくねってことを遠回しに言っているのだ。

「まあ、そうなんだけど、な」

俺の意図が分かかったらしく、歯切れ悪くはあったが友人は肯定した。しかし、

「ただな——」

と補足が入った。

「ただ、確かにあの本は書物としての機能は果たしていないんだけど、だからといって価値がなかったわけじゃないんだ」

「ああ？」

友人の言っている意味が分からなく、思わず柄の悪い態度を取ってしまった。咳払いを一つして気を取りなおす。

「それでどういう意味だ、それ」

「ああ。確かにミミズみたいな字でとても読めたものじゃない。けれどな、その本、というか字？ を眺めていると奇妙な感覚に陥るんだよ。だからな。えーと、言葉にするのが難しいな。んーと、なんだかこう——神々しいんだよ」

「神々しい？」

俺は首を傾げる。それを見て友人は、

「そうだよなー。自分で話しても分からない。何て言えばいいんだろーな、ああいうのは」

苦笑しつつ友人はそう言っただけのけろのだった。

「おいおい、しっかりしてくれよ。見てもいない俺が分かるわけないだろ」

「いやー、全くその通り。でもな、本当にアレは実際に見た者にしか分からない感覚だと思ふ。敢えて言葉にするなら、思わず跪いてしまうような、神聖な何かと接している時のような感覚っていうのかな。うーん、ちよっと違うか。とにかく見れば分かるさ」

そう言って、快活に笑う友人だった。

じいさんの本の謎はますます深まるばかりだ。本の詳細を知ろうとすればするほど正体が掴めなくなってくる。雲を掴むようなものだ。分かったことといえばミミズみたいな字で本としては意味を為していないこと、そして友人が笑い終わった後にぼろりと呟いた、

「でも間違いない、あの本はじいさんの魂が込められているよ」
ということだけだった。

ふと空を見ると雲の切れ間からわずかに光が降りそそいでいる。

「……天使のはしご」

天使のはしごと呼ばれるその情景の美しさに思わず目を細めてしまう。微かに漏れ出る光は儚く、しかし眩しくもあった。眼を陽の光で焼かれてしまったとしてもいまでも見ていたいと思うほどに、それは素晴らしい光景だった。

光が徐々に強くなってくる。

あまりの眩しさに手をかざして遮ろうとしたが、それでも目を開けているのが辛かった。

視界いっぱい光が溢れる寸前——、
バサバサ。

と、何かが羽ばたく音が聞こえた。なんだろうと思ひ、少しだけ音の鳴る方へ視線をやってみた。視界の端に微かにではあるが、羽根が見えた。一瞬しか見えなかったけれど、しかしそれだけでも綺麗ということだけははっきりと分かった。その羽根は光芒に照らされて白銀に輝いていたのだ。

光がさらに強くなる。

もう目を開けていられない。

バサバサ。

また何かの羽音が聞こえた。

音の聞こえる方に顔を向ける。

そこで俺は——見た。

眩しさのあまり己の眼を一瞬疑ってしまったが、けれどしっかりと俺はそれを捉えたのだ。

死んだはずのじいさんと、見知らぬ少女の姿を。

少女は白い絹の衣を着ていた。そして少女の陽に当たっている肌は真珠のような光沢を放ち、くると捻じれている髪が実に可愛らしい。そしてその小さな背には——白銀の翼が生えていた。

二人は宙を浮いている。

じいさんは小さな女の子に手を引かれながらはしごのその先——より光が強く輝いているところへと昇っていく。

眩しさのあまり、そこで俺は目を閉じた。

その時間もまた一瞬。数秒にもみたくない僅かな時。しかしこのわずかがひどくもど

かしくあった。

再び俺が目を開けた時には二人の姿はなく、あれほど強かった陽の光も落ち着いて、実に晴れ晴れしいものだった。

あれは何だったんだろうか。

二人がいた場所を見つめながら、俺は先ほどの光景を思い浮かべた。

二人の姿はまさに蝶々囁々。

仲睦まじく、手を取り合って語らっているように見えた。些か、少女の方が煙たそうにしているようにも見えたが、握った手を離すことをしないあたり、俺の気のせいだろう。なんだかんだで仲が良いのだろう。

しかし何より印象的だったのはじいさんだった。少女と語り合いながら導かれていくじいさんの表情はほころんでいて——本当に幸せそうだった。

旅立つことに一切の不安も、未練も憂いもない。これからが楽しみで楽しみでしかない、そんな在り様だったのだ。

「どうしたんだ？」

呆気にとられ、俺が急に黙ってしまったので友人が心配そうに様子を窺ってくる。

俺は、

「何でもないよ」

と、少し頬を緩めながら言った。

そうだ。本当になんでもないのだ。

ただ、そう。

ただ単に俺は——嬉しいだけなんだよ。

「そっか、何でもないか。それでお前は どうするんだ。じいさんの葬儀、来るのか？」

「ん？ ああ、そうだな……。いや、俺はいいや。喪服なんて着てないし、というか持っていないし。それに——さよならは言わない主義なんだ」

「……そっかあ、わかった。それじゃあ俺は葬儀に戻るよ」

「ああ、またな」

そう言って俺は軽く手を上げる。友人も同じように手を上げると、列の波へと戻って行った。これまた器用にすいすいと、大きな身体を揺らしながら。

一人になった俺は、また空を見上げる。

あの強い光が雲を蹴散らしてしまったのだろうか。先ほどまであれほど曇っていた空は今ではすっかりと晴れ、透けてしまいそうなほどの青空が顔を見せている。もしかすると、水晶の中から外を見るとこうなのかもしれない。透き通っていて、ピュアで、陽の光が入り込むと中で反射し合ってきらきらと輝く。きっと俺たちを照らすのはそんな光なのだ。

ゴーン。ゴーン。ゴーン。

教会の鐘が鳴りだした。鐘の音はこだましているのか、重なり合って聞こえてくる。高く重なり合う音たちはどこか悲しげで、しかし誰かを祝福しているかのように綺麗な音色だった。

俺は一度止めた歩みを再び戻した。

一步。また一步と。

地面を踏みしめる確かな感触と靴音を味わいながら。

そしてぼつりと、

「元気にやんな、じいさん」

そう呟く俺は、二度と後ろを振り返らなかった。

(了)

終日杳(はる)かに相同じ

日居月諸

平年よりも大分早く梅雨が明けたとの知らせが西の方から聞こえてきて一週間になるが、東北では一向に曇り空が退く予感がなく、湿気に満ちた生ぬるい空気の占める日だけが続いている。七月に入ってから数日ほど真夏が訪れた際に引っ張り出してきた扇風機が、今となっては起動しようものなら薄ら寒さ呼び込み、かといって外を歩き回ろうものなら肌着へと汗がじんわりとへばりつく。これならいっそカンカン照りの中で野垂れている方がずっといいと投げやりになるほどの愚図ついた日々だ。夜になるとようやく涼しい空気が入り込んでくれるはずなのだが、雨は容赦してくれない。近くで停まっている車のエンジンのくすぶる音か、あるいは室外機の唸りがアパートの群れによって増幅されたのかと思えるほど、地の底からさざめき立って、耳を埋め尽くすようになった後、屋根を叩く音へと上り詰める。仕方なく窓を閉めきるとふたたび生ぬるさが訪れ、雨粒はコンクリートに半端な衝撃を残し、こもった音が室内を埋めるのを感じながら、実家に住んでいた頃は抜けの良い音が響き渡っていたのにな、と木造建築をうらやましく思った。あれは防音をまるで考慮していない作り

だからだったのか、ともかく一度帰省した時に雨が降り出したことがあるが、聞こえてきたのは天井からだだった、それも余所の屋根の反響だ。鳥の羽ばたきを察して遠くを見やるごとく耳を澄ましていると、やがて頭上へとやってくるのだが、屋内へともりはしない。こちらこそ天上なのだと言語するように雨粒を空へと弾き返している、したたかな音だけが頭を越えて放たれていく。あれをきつと快哉を叫ぶ声とませこぜにしていたのだろう、鬱々とした空模様に向かって報復を食らわせているつもりでいたのだ、そうしていつしか雨ではなく自分が屋根を叩いているつもりでいた、それも耳でもって屋根を叩いていた、耳が屋根へと浮き上がっていつまでそれに引張られ得意な心境へと上り詰めていく、まさに有頂天というものだ。

とはいえ、それも現在の閉塞からの開放を望む心が呼んだ幻聴で、実のところは至る所でキジが鳴いているような騒がしさだけがあるのだらうな、と寢床に入って耳をたしなめるのだが、タオルケットをかけると熱が下半身からこみあげてくるし、かといって布を退けると肌が粟立ってくる。寢心地をつかみそこねれば目をつむっているのに堪えかねるから、気を紛らわすためにあれこれと濫りな考えをめぐらし出し、興が乗って頭がはしゃいでくる。いまだ降り続く鈍い雨音に耳を埋められているのなら尚更のこと、耳も肌も眼も味気がない、それならばせめて妄想だけでも色気で彩っておきたいところだ。肌に熱のこもるのに耐えかねて突き放すが、かといって離れ続け

ているのも物さびしい、そのうち布を被るたびにどこか女の匂いに似た甘やかな気配がふくらんで来そうだ、あるいは布を退けるたびに甘やかな匂いが遠のいていくように鼻を誘ってくる、とはいえ引き寄せられれば燻されるような熱気という罨にかかつて、一人寝の味気なさを思い知らされる。

不眠が果てにまで至り、瞼の暗さにも慣れたからか少しの光さえまぶしく感じられ、車のライトの横切った跡か、それとも夜明けがやってきたのかと思った頃に、無音が挟まった。いぶかしんだのも束の間、耳の奥にジリジリと焦げ付くような蝉の音が長く長く聞こえてきたので、とうに朝はやってきていたのだと知れた。とはいっても雨が止んだ後の雲間からは晴れが覗いているので、実感としては待ちくたびれた末に一息ついた時の心地こそふさわしかった。

それにしても、よくもまあ息が切れないものだ、と朝支度を済ませても尚鳴き続けている蝉にはげんなりさせられた。久しぶりの日差しに気後れしているせいかもしれないが、随分と気の長い声を聞いていると、もっと爆ぜるような声で鳴けるだろうに、どういふ気紛れか加減をする余裕まで見せて終点を引き延ばしているようにも聞こえるから、有り余る力とはこういうものなのだ、と根負けした気分になる。しかも、これからしばらく、夏が終わるまで鳴き続けるのが決まっているのだから、それまでの計算はすでに済ませているのかもしれない。気が遠くなって、体の力が抜けていき、

いよいよ耳に焦げ付くような声は拒めなくなった。

あれだけ閉塞からの開放を待ち望んでいたのに、いざ視界が広がってくると尽きるほどのない展望に気圧されるのだから世話もない。仮にも二〇を越えたばかりなのに、老いぼれのような感慨を残すものだど自嘲したが、考えてみれば蟬は寿命の大半を地中で過ごすのだから、こうして地上で鳴き続けるのは老境になる。つまり老いぼれに負けているのかと苦笑しそうになるが、案外、老人こそ力をあますところなく使いとおせるのではないか。

たとえば日和に外を練り歩いているかと思うと、ふとした拍子に立ち止まって、曲がった背中を伸ばす姿がある。皺ばんだ首をピンと張り詰めた先に、何かがあるわけではない。ただ空だけが広がっている。その割に長い間そこで佇んでいるから、傍で見守っている方も顎を上げてみるものの、何か見つけられるわけでもないの、視線を落としていくと、膝を曲げながら頭の重みを堪えている姿が変わらず立ちつくしている。どこにそんな力が残っているのかとも思うのだが、普段は気が散って仕方がないのに女の背中はずっと見つめられるのを踏まえると、あれは見つめている対象に力を分け与えられているのではないかと察せられる。蟬があれだけ鳴くのも、ひとえに雌を求めているからだと聞いたことがある。そんな風に、自分が追い求めている者を逃さないためには、ひたすら同じ体勢を保ちつづけるための力配分が必要なのかもし

れない。では、老人はいったい何を見ているのか。

もしくは、あの老爺は何かが聞こえてくるのを待っていたのかもしれない。過去に聞いた音の残響が今も耳に残っているが、想像にもとづいて繰り返すしかないから、本物とは似ても似つかない。だからこそ何も無い空を見上げる。本物の音が残していった力を頼りに、首の皺を張りつめさせながら、時折あふれそうになる力を膝で受け止めながら、何も聞こえてこない空を見上げている。似ても似つかない音がいつか本物へと変わるまで、あるいは本物とは言わないまでも得心の行くものへと変わっていくまで。

大型の扇風機を何台か稼働させた体育館で、老爺はそんな風天井を見上げながら、子供と教師を相手に話をしていた。といってもパイプ椅子に座っているから、おそろく支えるものは膝ではなく肩、そして首の皺だっただろう。

戦争体験を聞く催しが開かれたのは夏休みを控えた日のことで、同級生たちはたださえ授業がなくなる上に、面白い話を聞けるという無責任な期待を胸に体育館に集まっていた。おまけに招かれた客人は馴染みのある顔で、東京で生まれた境遇を活かして普段から興味をそそられる話をしてくれていたから、田舎の人間がはしゃぎ立つのも無理はない。厳粛にふるまっていたのは教師とこまっしゃくられた生徒くらいのもので、体験を語る本人でさえ方言の通じなさに苦労した体験を話の枕にしつつ催しは

軽妙に始まった。

しかし、いざ戦争を語る段になると、子供たちを見下ろしていた目線が段々と天井に向かっていった。話しぶりも軽やかなところは失せ、かといって重苦しくなるでもなく、どこか浮遊しているような、注意していなければ言葉の意味を取り逃してしまいかねない口調になっていく。体育館の窓から差し込んだ日差しが、白髪や眼鏡を銀色に照らし出したことで表情もかすんだようになっていったから、話が余計つかみとれなくなった。

通常、重苦しい話を進める際、人は前のめりにならざるを得ないと知ったのは、それからしばらくしてテレビで原爆の体験を語る女性を見た時のことだ。聞いている小学生の方も膝を抱え、首をすくめて臉をほとんど動かさずに聞いている。話の重さに耐えかねていたのもあるだろうが、時に手を振りかざし、前のめりになっていく老婆の迫力に圧されていたのだろう。そうして目線が近づいた時、体験は初めて共有される。

そう気付くが早いのか、あの老爺の話をどこまでわかっていたのだろうか、記憶が怪しくなり始めた。子供たちはいわずもがな、教師さえも上を見上げていた。そこに何があるわけでもない。ただ、ひたすらに見つめていなければ、同じ視線に立ち続けなければ、この話を理解することは出来ないだろうと悟ってしまったから、首をのけ

反らせなくてはならない。だが、幼い首にそんな堪え症があるわけもないので、首を下さざるを得ない。それでも何かをつかもうと、ひとまず首を膝に乗せ、椅子に座った男を見つめなおす。すると、幾重にも刻まれた首の皺の中に、一本だけ目立つものが見えた。喉仏にひっかかり、ピンと張り詰めているからそこだけ若さを取り戻しているようにも見えるのだが、今にもちぎれそうでもあった。気付けばその危うさに引き寄せられつつ集中を持ち直し、老爺の話を聞いていられた。

空襲警報は恐ろしいというよりも、キリのなさを味わわされて子供ながらに気だるさを感じた、と老爺は言った。毎夜のように鳴り響いていたからでもあるが、遠くの方から聞こえてきたかと思えば、一気に耳にまで押し入ってきて、また小さくなり、また迫ってきて、といった具合に襲ってきて耳の中に波を作り上げてしまう。警報が鳴っていない間も耳は収縮を続け、遠くから聞こえた幻聴ともいえる音をきっかけに空想をたくましくすることもあれば、空腹を知らせる内臓の音が一気に高まって動悸と区別がつかなくなっていくこともある。自分で自分を制御することが出来ず、何者かに乗っ取られているような気分が終戦を迎えてもしばらく続いたから、耳から全身の変調がもたらされるといふ事は大いにありうると思った。

東京への空襲は漸進的に進められ、老爺の住んでいた土地に加えられた爆撃はトドメとなった。余所の町が焼尽していくとの知らせは幼い耳にも呑みこめたが、実感と

しては町が崩れ去るよりも人間の諸々の感覚が平衡を失う方が早かったという。

そんなところへやってきた大規模な爆撃を地中でやり過ごしていたのだが、耳は地上から聞こえてきたはずの叫び声や轟音よりも、穴倉の中にいた妊婦の息遣いの方こそよく思い出せた。カビやら汗やらの臭いがこもり、誰もが息を切らしている中、一つだけ整った息遣いが聞こえてくる。身籠っている赤ん坊をなだめるためだろうが、本人の意図とは別に、穴倉の反響も相まって呼吸の見本を聞かされているような気分になった。その押し引きに従っていれば助かるような気がして、安らかな心地にさえなった。しかも、どうやら家族や近所の人々も、いつしか奥の方から寄せては返してくる音に耳を傾けているようだった。今までそれぞれが自らの軒を構えながら好き勝手暮らしていたのに、今や誰もが身重の女に頼りきっている。夫が出征し、寄り合いの助けを借りなければ胎児どころか自分の身さえ持ち崩すような人に支えられている。

そんなおかしささえ覚える光景を見た後では、瓦礫が積まれた翌朝の地上を見ても、得心しか残らなかった。それぞれの家が仕来たりやら伝統やらを築き上げたところで、危機に見舞われてしまったら汗水を垂らして足どりのおぼつかない女を頼るしかない。爆撃やら火災やらがなかったところで、目の前に広がっている瓦礫が示すような脆さの方がふさわしい姿なのではないか。別に恨みがあつたというわけではない。単

純に、これまで見えなかったはずのビルまで見渡せるような開け放たれた視界のように、すっきりとした納得があるだけだった。

それくらい慎みのない子供だったということですよ、と言って老爺はゆっくりと首を下し、ようやく目線を合わせてくれたが、幼い瞳はそれについていけず、多くの口が開け放たれたままになっていた。子供はおるか、大人にも扱いかねる話だ。窮地に陥ったからこそその心境だといえそうした言葉が出てくるのも止むをえまい。しかし、だからといってうなずいてしまったら、耳を傾けている者の命はどうなる。崩れ去った町こそ得心が行くのだとしたら、今現在自らの生活を積み上げようとしている営みは、無駄となってしまう。

とはいえ、語り口によって呼び起された焼け野原の光景は、妙にくっきりと残った。後々大空襲の惨状を示す写真に接する機会があったが、おおよそ土地の者の説明する通り、そして思い浮かべた通りだった。瓦礫が丘を作るようにまばらに積まれているが、上空から見た限りでは平らにしか見えぬ、ダンプカーが辺り一帯を均してしまっただかのように禿げあがってしまった。方角を選びさえすれば川にまで届きそうな眺めが続く中、電柱やビルの鉄骨といった頑強だったはずのものが、その機能を失いながら空しく立ちすくんでいる。果てのない視界の先によくやく見えたものが、結局頼りない物だったとわかったら、絶望しか浮かんでこないのではないかと思われるが、

元から頼りない物だったとの認識を前もって踏まえているのならば、得心しか残らないのだろうか。

こう言ってしまったては言い訳じみてくるけれど、と言って老爺は続けた。慎みがなかったのはそもそも常識というものが存在していなかったからかもしれないし、あるいは、それを教えてくれる人が周りにいなかったからかもしれない。教育は先生の方から一方的に教えるのではなく、子供が大人の顔色を伺わなくては成り立たないでしょう、と言って、皺ばんだ臉を横に寄せた。

大人が笑っているからこれはやっさいことだ、怒っているからやっさいことだ、それが戦時中は成り立たない。表情というものはあった。ただ、いずれの感情も止め処なく溢れだしていくから、悲しんでいようと憤っていようと、はしゃいでいるように見える。経験から察するしかないが、おそらく自制心が弱くなってしまっただけで、感情に身をゆだねきっていたのだろう。そんな抑えの利かない顔つきを見てみると、いつ崩れてしまってもおかしくないと見えてしまうから、規範とするところの話ではない。もはや人の顔が見られなくなってしまふ。我が身を持ち崩していたというのに、他人を頼ることさえ出来なかった。

今となっては東京から山形に移るなんて都落ちにも程がある、などと近所の連中に言われるが、疎開にかこつけて母親の実家を頼った時、空襲とは無縁の日々を送って

いた祖父母の顔が穏やかだったのには助けられた。皺深い顔が穏やかに微笑むのを見たら、こちらも頬がほころぶのを感じて、人心地というのはこういうものかと初めてわかった気がする。金銭の負担を少しでも減らすためにと学校が用意してくれた寄宿舎に預けられたが、そこで世話をしてくれる人々を見ても同じ感想が漏れた。方言が聞き取れないのには苦しみられたが、耳が一通りやられてしまった身としては、正常な神経を取り戻すために上り終えるべき階段のように思えた。一つ一つ土地の言葉に慣れていけば、型に嵌っていくように真つ当な人間に戻っていきけるとの希望があった。もっとも、米軍の侵攻が東北にも迫ってきて、山腹に戦闘機が墜落したとの知らせが聞こえてきた時、穏やかだったはずの人々の顔がにわかに色めき立ったために、希望はあえなく潰えてしまった。上空からの視察が始まり警報が鳴る日が数えきれなくなった頃、海沿いの町が空襲に遭った。終戦を迎えたのは、それから間もなくのことだ。

首を下し、老爺は眼鏡を取って目元を手でほぐし始めた。その間、普段はわずかな静けさも耐えられない子供たちが、黙って彼の様子を見つめていた。むしろ教師の方がこれで話が終わりなのかと隣同士を伺いながらどよめいている。とはいえ、その声は大型の扇風機と蟬の鳴き声に消されているので、表情でしか戸惑いは読み取れない。ほとんど人の声が絶えてしまった中、老爺は眼鏡を掛け直すと、目の前を見据え直し

て口を開いた。

戦争にまつわる色々な言葉に君達はこれから接していくでしょうが、私にとって大切なのはそうした人間の脆さの方でした、君達はたくさんの夢を持っているでしょう、それを支えに生きていくことが出来る、私にはそれがなかった、戦争が終わったら少しはマシになったけれど、体の根っこに染みついたものは拭えないわけです、脆さの方が根本になってしまったんですね、君達がそんな目に遭うだなんて望みもしないことです、世の中なにかがあるかわからないから、年寄りの戯言と受け取りつつ心に留めておいてください、目の前の見たくないものから目を背けても、人間はどうしても耳が御留守になってしまふ、目は自分の力でつむれるけれど、耳は手でふさいでも意味がないですから、雑音はどうしても入ってきてしまふ、その時のために自分の殻に籠る力をつけておいてください、自分の殻に籠るなどはよく言われますが、それは周りが平穩であるからこそで、周りが雑音に満ちている時に自分を保つには結局殻に籠るしかないんです、君達はまだ殻に籠ったことがないでしょう、何を指しているのかさえわからないかもしれない、それでいいかもしれないな、わかる頃になったら殻に閉じこもるだけの力はあるだろうから。

一息に語った後、また沈黙を挟んだ。頭が持ち上がり、首の皺がふたたび現れる。まだ語ることがあるのかと聴衆は固唾を呑んだが、どうやら時計を見ていたらしく、

教師に向かって段取り通り進んだのを確かめた後、これでおしまいです、と言って老爺は椅子から立ち上がった。

雨の降らない日を数えた方が早かった七月が終わって、ようやく梅雨が明けると、籠りきっていたものが発散の時を迎えたように猛暑が訪れた。降り続いた雨が湿気を残して行ったことで、屋外に出れば蒸しあがるような空気に苛まれる。急激な季節の変化に体は追いついていけず、熱に見舞われても体の芯は冷えたままのように感じられ、風邪と思しき寒気がやってくるのがしばしばあった。喉や鼻はぐずつき、腕や膝はだるさを抱えている。それなのに、寝込むほど大掛かりなものには悪化していかない。慣れない暑さにやられているだけかもしれないし、どうせお盆が近いのだからそれまでの辛抱、しかし、そんな無防備な自制心が顔を出してきた時こそ、いよいよ病が頭にまで上り詰めている証拠だろうか。

そんなふらついていく将来の姿をつぶさに見つめられるのは何もしていないからこそので、ベルトコンベアの機動音が鳴り続ける中で作業を続ける間は物思いにふけりこむ暇などない。ふけりこんでしまっただけは体がおろそかになって身を崩壊してしまいうような暑さと騒音が今日も工場を包んでいる。梅雨の間はどこか抜けが悪いように聞こえていた作業音も、快晴が続けば湿り気もなくなったのか室内を反響し続けてい

た。手元の作業に没頭し続けるには自らの体への気遣いを怠ってはならないから、意識も確かに保たれる。機械の音によって周りを見渡す必要もなくなる。しかし、自分の体へとふけりこむのは許されるのに、心へとふけりこめないのは、膜に阻まれていようなもどかしさを感じるものだ。

時折、工員の投げやりな怒号が響き、言葉は聞き取れないが声色だけは読み取れる。仕事がかどらない時によく出る、せめて気持ちだけでも発散を味わっておこうとする喚き声だ。しかし、ベルトコンベアを相手にするだけなら仕事が滞るはずはない。本当に相手にしているのは、結局自分ということになるか。

「そういえば、お前帰省しないんだってな、働いてくれるのはありがたいけど、先祖に申し訳が立たんぞ」

近くの工員から声が立ち、それに応える声がある。

「彼岸の内に済ませておきましたから」

「彼岸とお盆じゃ違うだろうよ、家族に顔を出す必要だってあるだろうに」

「一年おろそかにしたところで変わることもありませんし。工場長だってほとんど休みは返上じゃないですか。それを助けるのも悪くありません」

そんな会話が聞こえたところで、何かの意図を伴ったものでもないから流していくほかない。特に片方はいつも大人しく、必要な言葉以外は口にしない後輩だから、そ

の耳の聞き流すところにこだわっても仕方がない。後輩に絡んでいく方は作業の単調さに嫌気がさしたのかやたらと言葉をつないでいくが、いつものことだと他の工員はそちらを気にせずに手元を見つめ続けている。ところが、やりすごしていたはずの聲が、何かの拍子に重くなっていた。

「大体お盆だからといって帰るといいうのがおかしいではないですか。先祖の供養もいっつやだったっていいはずだ。他人の決めた日取りに合わせなければ罰があたるとなんて、それこそ先祖は笑うでしょうね」

「ははっ、まあその通りかもしれないな。しかし、そっちの方が世間も楽なんだ」
「生きている方の都合ですか、お笑い種だなあ」

相手の声がとげとげしくなっていくのに気付いて、休むことのなかった口がようやく結ばれた。まあいいや、とお茶を濁そうとしたが、機械音の中にまぎれてしまったのか、後輩のまくしたては止まらない。

「一周忌だの十周年だの、数字がなんだというんですか。それで生きている者の時間は落ち着きを取り戻すかもしれないけれど、それが死者のためになるといいますか。まあ結局のところは生きている方が取り仕切ることだから、それでもいいのかもしれない。ただ死者を名目にして現在の生活をまかなおうとする姿は度し難いな」

段々、他の工員の目も声の立つ方へ向かい始めた。言葉をつぶさに聞いていれば、

他の者が口にするのと変わりない、もどかしさから解き放たれようとする愚痴にすぎないとわかる。しかし、一方で誰かに問いかけている口調に聞こえるのも確かだ。誰かをまくしたてている。焚きつけてしまった者を相手にしているのではないから、それに対する応答はない。ひたすら問いかけが投げられている。誰もが振り返らざるを得ないが、身に覚えがないから、答えられるはずもない。

「それならお盆の間も働き続ける方が立派だな。結局のところ僕達は自分達の生活に汲々としているほかないですよ。もしかしたらアイツもこのことに気付いているのかもしれない。だからこそ働き続けるし、僕が働く事を許してくれたんだ」

問いかけ続けるのが難しくなったのか、自分で答えを用意するようになった。もともと、収まる様子はない。答えにたどりついたら、次の問いかけが待ち受けている。どうやら落ち着きどころを失っているらしい。一度追求し始めたら、煮詰まるまでやめられないタチなのだろうか。それならそれでいい。ただ、それは腹の中に収めている限りの話だ。そうしてあちこちに問いかけを撒き散らしていたら、どこかから答えが出て、それを駁する声があり、と言った具合に際限が無くなりかねない。

工員の手が止まっているのを見かねたのか、いよいよ工場長が後輩の下へ向かい肩に手をかけた。振り返った目はぎよろりと剥かれていたが、

「上司をアイツ呼ばわりとは、偉くなったもんだ」

と言つて微笑みかけられると、途端に茫然とした顔に変わった。それじゃ、仕事を続けるように、と現場の責任者が手打ちにしたからには、周囲も軽く笑つて何事もなかったように振舞うしかない。

その後は適切な対処であつたと証拠立てるように、工場にはふたたび普段通りの機械音だけが響き続けた。実際、何一つ間違つていなかっただろう。大人しいはずの間であるとは誰もが認識していたし、本人も他の工員の見做すところに従つていた節があつた。先程のように仕事を投げ打ちたくなる者が出てきたとして、それをなだめる者がいなくてはならない。それが後輩だつた。ところが、なだめるはずの人間が実は投げ打ちたくなる衝動を抑えていたとしたら。一人くらい欠けたところで問題はなにかもしれない。ただ、それが連鎖していったとしたら。となると、これは責任者が何かの間違ひであつたと通達を出しつつ、多少の気の迷いを許すしかない。残るは事件を引き起こした当事者が、反省した姿を見せれば良いだけだ。あくまでも、言葉の上では有り余るほどの意欲を見せているのだから。もっとも、その顔はしばらくうつむいたままだつた。

日が沈まない内に工場を出ると、一人で家路につくらしい後輩の姿が見えた。他の工員にまぎれているが、背筋をしっかりと伸ばして歩いているから、夕明かりに照ら

されて薄赤い顔がくっきりと現れている。

「飲みにでも行こうか」

振り返ってくれたかと思うと、初めに額がこちらに向けられた。続いて夕日を浴びた目が細められ、険しい睨が一層きつくなる。それから無防備に面と向かったことを悔やむように目をそらしたが、とりあえず提案は受け入れてもらえた。

「最初はおそこまでぶちまけるつもりはなかったんです。というか、不満をぶちまけているという意識さえなかった。なんだか、相手に対して言葉が届いていないように感じられたから、語調を強くしてみようと思っただけけど、ああなってしまった」

真一文字に閉められていた口が、店の席に着くと途端に開き出した。歩いている間は声をかけても生返事を返すだけだったのだが、話しづりが整っているところをみると、どうやら頭の中で話の順番を決めていたらしい。

「まあ、杉谷さんはいつもうるさいからぶちまけたくなるのもわからないではないけど」

きっかけを作った工員をダシに冗談めかしてみたが、別に誰が相手だろうと変わらなかつたと否定されてしまった。それから勝手な忖度で原因を探ってみたが、いずれも首を縦に振ってくれることはなく、むしろ工場でまくしたてていた言葉について弁解を始め出した。何もお盆や彼岸をやるなどは言っていない、それを押し付けてく

れるなど言う事だ……それならば口の挟みようもないから、黙って聞くしかない。ただ、それよりも気になるのは、妙に段取りの良い口ぶりだった。というか、段取りに頼らないと喋れないとでも言うかのように、話と話の句切れが見つからず、すんなりと論理がつながっていく。口を挟めないのも結局、論理が崩れる時が来たらとの想像に臆して踏まれる二の足に過ぎなかった。

「こんな大それたことは、心に留めておくだけの方がいいんでしょうけどね」

ようやく一息置かれた。が、酒を一滴なめたらふたたび姿勢を伸ばして、前方を見据えてしまう。

「いや、あれこれの仕来たりを誰しも一度は疑ったことがあるよ。ただ、頭をよぎるだけで、それ以上はこだわらないのが普通なんだろうな」

その点、大したもんだよ、と言っても強張った顔が崩れることはない。どうしてここまで依怙地になるのだろうかといぶかしんだ時、いまさら目の前の男の身の上を考えが至った。しかし、すぐさま口に出して詫びようとしたところ、あっさりと首を振られてしまった。

「幸いというべきか、身内の不幸は経験していません。それどころか死体も見たことはない。海の方へボランテアに行ったことがあるだけです。ただ、それが大きかった」

深い呼吸が置かれたが、額の皺はいっそうきつくなっていった。

瓦礫が積まれた様子や、被災した人の心の荒み具合は事前情報として聞いていたから、覚悟はしていたという。知識と現実のズレは確かに大きかった。遺体の整理はついていたというが、ヘドロや潮がもたらした生臭さは消えておらず、聞こえてくるものといえは重機の音、見えるものといえは瓦礫の山とその隙間から覗く水平線くらいのものだ。とはいえ、現地にあつて感傷に浸っている暇はない。とにかく瓦礫や泥を片づけなければ来た意味がない。でなければ足手まといだ。

ただただ仕事に没頭していたかった。震災の被害を何一つ受けなかったのだから、ツケを払うかのように働くのが当然だと思っていた。そんな風に昼の内は仕事を続け、夕方まで働き通した。その日は快晴という事もあつて人の声や重機の音が良く響き、ともすれば活気に満ちていたから、作業の手が止まることはなかった。視界が広いだけあつて、弱った足腰を氣遣つているとすぐに見咎められる。場合によっては顔を覗きこまれる。その表情は怒っているにせよ微笑んでいるにせよ、迫ってくるものがある。木材や鉄屑の味気なさにやられかけていたところにも人の顔がやってくる、訴えかけてくる者の大きさに応えなければならぬと反発が起きる。たくさんの人々を失った末に出来上がった光景とはいえ、ここからまた築き上げていくだけの気力は十分に感じられて、自分のやっていることは間違ではないとの実感は込み上げてきた。

「けれど、宿泊所に着いた時、それが一気に薄れていったんです。波の音しか聞こえなくなりました。作業の音が聞こえないのももちろん、人が話していても、途切れてしまったら途端に波の音が埋める。当然宿泊所は高台にあったわけですが、ずっと遠くの方から同じ音が繰り返されるんです。多くの人を押し流して行った波の音が。ポランティアの間はよく話すようになりました。無音を嫌ったんでしょね。翌朝眠れなかったと訴える声も絶たなかった。あれだけ昼の内は元気に働いていたのに。

そこで何かが無断に断たれていったのを感じましたね。昼と夜がこれだけ違うんだという考えが、生きていくことと死んでいることは、相当隔たりがあるんだということまで拡張されていった。生きていく方から死んでいる方へ届かないなら、届かないなり振舞いをしなければならぬ、と考えたのはそれから間もなくでした」

険しかった目がようやく下されて、机の上に肘が付かれた。顔の前で腕を組み、店の様子を見回している。雰囲気を作るためのBGMが鳴り、客や店員の声が絶えない。感想を求められているのかとも思ったが、実感を話されては取りつく島もない。なにより、本人の中で結論が出来上がっているのなら、返事の必要はないと感じた。ただ、その声色が相変わらず誰かに問いかけているように聞こえるのは、気になって仕方なかった。ともすると幼ささえ浮かべるように語調が強められ、事実が一気呵成に語られていく。

聞いている分には語られたことにまつわる感想よりも、過去の方へ、妙な言葉を残していった女の方へと、思いが至っていた。機械の音に晒されていると、やっぱり声が幼くなるんだ、と彼女が言ったのは、二人で連れ立った先で偶然にも工場長と鉢合させた時の話だ。初めはからかうような素振りで見寄ってきたのに、女の受け答えがこなれていたせいでかえって襟を正されたらしく、それではまたの機会がありましたら、とぎごちない口調を残して去っていく、その背中を見ながら、ぼつりとつぶやいた。姿が消えるまで見送らなければならないような気後れを感じていた身としては、自分さえもマヌケだと言われているように思われ聞き咎めざるを得なかったが、悪気はないとこちらの顔を見ることなく断るので、それ以上は踏み込めない。それから沈黙が挟まり、二人並んで背中が消えていった方を見やっていると、子供の頃、と口が開かれた。

住んでいたマンションの改修工事が行われていたところに、風邪がやってきて寝込む羽目になったことがあるという。両親が共に働いていた上に、朝になって熱が襲ってきたから午前の間は布団にくるまっていてはしかなかった。玄関を出ていく足音を聞き送り、ふらついた頭に任せてひとまずは眠れたのだが、昼が近付くと男達の笑い声が目を覚まされた。どこかから声が立って、それに応えてまた声が立ち、何人もの声がさざめきだった末に一気に甲高い音へと変わって、床から天井へと抜けていく。

工事の音を誤って捉えていたわけではない。事実、男達の笑い声は十分すぎるほど聞こえてきていた。切削器具の抉るような起動音と、鉄骨が擦れる金切り音が屋上を越えて空へと轟いていたが、それに追いつがるようにあちこちから上擦った声が聞こえてくる。

何より、学校でいつも聞いていた男の子達の声に似ていたの、ちょっとだけ低さが残ってるけれど、その低さを邪魔だと思ってるみたいにはしゃぎまわってる男の子の声に、だから良く聴き分けられた、熱で寝込んでいたけれど気持ちは愉快だったくらい、浮き上がって浮き上がって、どこまでも飛んで行けそうな気分が寝ているだけで味わえるなんて、こんなに気持ち良いことがあるのかと思った。

しかし、昼間になると母親が軽食を携えて帰ってきたので、軽やかな気分はお預けとなった。本当にうるさい、と外に向かって毒づいている姿をぼんやりと眺めながら食事を済ませ、診察に向かうために外へ出ると、父親よりもずっといかつい姿をした大人が、父親よりもずっと幼い声を出していた。

拍子抜けしちゃった、と笑うものの、その声が高くなっていくことはない。裏切られたなんて言わないけど、こんな大人が自分くらいの子供と何にも変わらないんだ、っていかつい体をした人を見ても怖さはまるでなくなるようになった、さっきの上司さんも実のところそんな風に見てたしね、機械の音の中で働いていると、甲高い音に

耳が染まって幼くなっていくのかな、っていう考えがまた当たっちゃった。

目の前に同業者がいるにもかかわらず煽るような言葉が続けられたから、じゃあどんな仕事をやれば大人らしい声になるんだよ、コールセンターの仕事か、と相手の職業を引き合いに出したものの、そんなことは言っていないって、と軽く流されてしまい、後には不用意な言動だったという悔いが残った。

でも、本当に悪気はないの、と微笑まれたかと思うと、弁解が続けられる。風邪が治った後、また一人で部屋に籠っている時に工事に出くわす機会があった。とはいえ、笑い声は聞こえてこない。工具の鋭い音がひたすら鼓膜を震わせてくるだけだった。増強しているはずなのに、解体されるような恐怖が襲いかかってきて、住んでいる者の耳は破壊されていく。それならば、音の発信源にあって耳を酷使している人間はその矛盾めいた状況をどう感じているだろう。自分の耳を犠牲にしながら、多くの人々が安らぐための住まいを作り出していく。風邪で寝込んでいる間に味わった、浮き上がっていくような気分を思い合わせてみると、とにかく愛おしくなる、と女は言った。今も思い出すたびその声の幼さに引き寄せられて、自分まで幼くなっていくような、何もかも投げ打ちたくなる感情が湧きあがってくる、と言って向けられた惚けた表情は、こちらの顔を通り越して背中へと放たれていくようで、置き去りにされている気分がした。

「先輩は、地震がやってきた時どうしてましたか」

ひたすら語り続けていた先輩が、にわかにしつかりとした問いかけをしてくるものだから、少し返答が遅れてしまい、地震ね、と口をついた言葉も相手の声を繰り返すだけになって、思い浮かんでくることもなかったから、どうだっけなあ、という無防備な声が出てしまう。

話すことに困っていると、店のざわめきの底から少しだけ調子の違う音が聞こえてきて、その内しつかりと耳へと入ってきたかと思うと、頭の先まで昇っていき、ようやく雨が降り始めたのだと知れた。したたかに地面を叩きつけていたので、さすがに二人で窓を見ざるを得ず、向かいの店どころか通りすぎていく人の姿さえ隠してしまふ豪雨の様子を、口を開けて眺めていた。ただ、それにしても空が青い。街明かりに照らされているにしても雲が出ていとは思えないほど抜けの良さを感じる青さで、そんな上空と呼び交わすように地上を叩きつける雨は、いつしか人の声をかき消すほどになっていた。

どうと言われても、語れることなどほとんどない。語ってしまっただけは眉をひそめられるばかりの実感しか、あの地震からは得られなかった。

三月に入っても寒々しい日が続いた年で、アパートに籠りきって無為な日々を送っ

ていると、突然地面が揺れ始めた。あの年の冬、君は何をしていた、と問われたことがあるが、怠惰に過ごしていた記憶しか浮かんでこない。それ以前の日常で感じていた起伏を全部吸い取ってしまったのではないかと思えるほどに、長い揺れが襲っていた記憶だけがある。余震が一年近く続いたせいとか心はその名残を引きずったままで、突然はしゃぎだしたかと思うと留まる様子を見せず、落ち着き所が一向に見えてこないという心境がよく訪れた。

しかし、通信の手段がほとんど遮断されていたことで震災の全容が見えなかった数日の間は、むしろ穏やかな時間を送っていたと言える。停電と断水に遭ったものの、食料と貯水の蓄えがあったからインフラの復旧まで待てる用途は付いた。家族とお互いの安否は確かめ合えたし、知人と言っても人との交流は絶っていたから身の周りへ心配りをする必要はない。初日に雪が降ったために寒さには苦しめられたが、翌朝になれば晴れた空が広がったから暖は十分に補えた。

流通が途絶えているらしくあちこちの店は余り物で露店をまかなくなっており、並んでいる人だかりも嫌気がさしたという顔を浮かべつつも、そこしか頼るところがないから立ちつくしているほかない。予備電源のない信号は警察の管理下に置かれ、店に足止めを食らっているのか人通りはなく、携帯もテレビも起動しないからニュースも聞こえてこない、時間が止まっているという感覚があの数日を覆っていた。

ベランダに出て読みさしていた本をめくっていると、余震のもたらす軋んだ音にまじって、ヘリコプターの羽ばたく音が聞こえてくる。前方から近づいてくる機体を背中へと通り過ぎていくまで見つめ続け、誰も助けになんて来やしない、と諦めの言葉が口をついたが、放っておいてくれた方がありがたいような気がした。パトカーや救急車のサイレンが聞こえてきても、給水車の在り処を知らせてくれるアナウンスが聞こえてきても、すべて遠ざかっていく。きっと誰もが同じ音を聞いているのだろうから、誰もがこうして座りつくしているのだろうから、立ち働く必要などない。昼には数える程度の雲が浮かび、夜には普段は見えない星が輝きだす、抜けの良い上空の様子に助けられて怠惰は深まっていく。

結局、災害の惨状を知ったことによって暢気な心境はひっくり返されたわけだが、あの時感じた安易な気分はいまだに忘れ難い。あんな日々が続けば良かった、などとはゆめゆめ思いもしないし、何一つ情報を仕入れられなかったからこそその実感だといっても、度し難いことに変わりはない。

ただ、お盆に帰省している間、雲ひとつない空が広がる中で徒然に日々を送っていると、自分の根本はここにあるのではないかという考えが頭に浮かんでくる。周囲の時間が止まっているのだから、何をする必要もない。稼業との兼ね合いに心配りをする必要がないから、時間が止まっている内は何をするにも自由だ。そんな気ままな気分

に浸れば、周囲から切り離されて自身の輪郭が確かになっていく充実感だけが残る。あの老爺がやってきたのは、そんな風に恣意に満ちた考えを誰もいない家で巡らしていた時のことだった。呼び鈴がないから声が掛からないと来客が知れないのだが、畳に寝転んでいたおかげか、庭石を擦りつける足音がよく聞こえてきた。蟬の鳴きつのる声にまじって、同じように一定の調子で歩いてくる人影があると気付くと、玄関で白髪が光っている。

祖父に用事があるのだろうか、親戚の墓参りに家族そろって行ってしまったと伝えたのだが、ここまで足を運んでくれたことを無碍にするわけにはいかない。冷房を入れるのは断られてしまったが、唯一扱えるアイスコーヒ―は受け取ってくれた。体を起き上がらせ台所に立ったところ、テレビからサイレンが鳴り渡り、甲子園の試合開始が告げられた。

「あれは空襲警報を思い起こさせるのではないですか」

グラスを差し出しながらかうっかりと口をすべらしてしまったが、幸いにも皺は微笑むためにしか歪まない。表情の移り変わりに目を向けていると、肌を深く歪ませているのにどこにも張りは戻ってこないのです、頭に残っている印象よりも随分老けこんでしまったのだなと認識が改まった。

「一回だけだからね、私らの頃はあれが何度も何度も繰り返されていた。一度きりの

叫びなら余韻しか残らなくて、耳の内では進んで繰り返すことになるのだけど、否応なく反復されるのは堪えますよ。女の叫びに似ているでしょう、あれは。一度だけ呼ばれたなら振り向きも出来る。しかし、恨み言のごとく叫び続けられてはね」

それに、もう二度と聞く事はない人生と定まったのだから、大分折り合いがついてきた、と言いなながらグラスを傾けると首が軽く反らされたが、腕に隠されたために皺が覗く事はない。グラスを置いてテレビへと向けると、その先には球児が意気込みを述べるVTRが写されていた。

「あれくらいだと騒音がやってきたら、なまじ反発する力はあるものだから、押し負けて挫折してしまいかねないのだけどね。幼いと、押し負けたと思うこともなく、ただただ服従するしかないんです」

となれば今はその服従から解放されたようなものだから、イトマを与えられた気分似ていますか、と頭に上ったが、到底口に出せることではない。

「君くらいになると、どうだろうな」目が向けられて、咎められているような気分を覚えた。「いや、直近にそうした出来事がありましたか……」

語尾が弱められて目が背けられたが、何もかも崩れ流されてしまった光景を置き去りにして地元へと逃げ帰ってきた身分なのだから、答えられることは一つもない。

「しかしね、あの地震は凄かった。この年になると時間の感覚が無くなって、何年も

前の事が数日前に感じられるようになるけれど、あれは未だに余震が続いているのではないかと思われるほどだ。震災を中心に世の中が回っているようなものだから尚更で、真正面からあの揺れを食らった人なら、取り残されてしまったような気分を覚えているんじゃないかと思ったけれど」

次第に上を向き始めた顎の陰から首が覗いた。しかしそれもわずかのことで、瞳を合わされたかと思うと、君は幸いと言うべきか、そんな目には遭わなかったようだね、と声が掛けられる。

「僕は二〇を越えて、自分と言うものが粗方出来上がってしまったっていた頃ですから、それを崩すまいと距離を置いてしまったところはあるかもしれませんが。何か聞いてくるという感覚よりも、空白だとか無音の方が近いかもしれない。話題に出されてもピンとこないところがある」

話している間、親身になってうなずいてくれる姿を見ていると、他人事のように話すじゃないか、と自らを振り返る心境が訪れた。

「おそらく、殻に籠ってしまっただらうね。おかげで自分を守ることは出来た。代わりに、目の前で起こったことを見つめる力は失ってしまった」

あるいは周囲から聞こえてくる音を遮断してしまった、と咎めるような言葉をかけられたが、表情は思いの外柔らかい。細められた目が瞬かれるたび慰められているよう

な気分を覚え、事実そうだろうな、と考えが続いた。被災後に訪れた安易な気分もまた、世間の流れが滞っていることで面倒事を免れられるという逃げに他ならない。殻に籠って、自らが生み出した面倒を引き受けるならば一向に構わないが、余所から訪れた雑音にかかざらうのは御免被りたい、他人によって自らの調子を狂わされるのが嫌で仕方ない。あの時は、そして今もお、そんな風に駄々をこねているに過ぎないのだろう。

「結局、耳を塞ぐのもまた、聴覚を壊すことに他ならない。雑音に追い詰められた時点で壊れてしまったのか、それとも籠ってから壊れるのか、それはわからないけれど、耳聴くなくなってしまふのが避けられない以上、人間は一度耳を壊してしまふよう定められた生き物なのかもしれない。問題は壊れてしまわないようにするよりも、どう立て直すかに懸っているでしょうね」

お互いがうなずき合うと、そこで話が一段落ついて声が途切れてしまって、それ以上話し合うのは無粋とでもいうかのように、各々が自分の視線を定めながら考えを巡らし始めた。蟬の鳴き声とテレビの音をかきわけながら言葉を発したのは、老爺の方だった。

「もっとも、私だって説教出来るような過去は持ってはいないけれど」

終戦間際に山腹に戦闘機が墜落した時、顔色が変わっていく大人達を見るのに耐え

かねて、遠くに走っていったことがあった。外を出歩くことだけでも危うい時勢だったのに、何を頼りにしていたのかとにかく遠くへ遠くへ走っていく、その足でたどり着いたのが坂を上った先にある防空壕だった。土地の者にとっては無用の長物と化していたから、そこなら誰にも見つからないだろうと思っていたのか、それともそこに隠れていけば一切から守られると自衛の意識が残っていたのか、入口を開けて視界の利かない穴倉を覗いていると、ふと声が掛かって、見覚えのある少女が立っていた。疎開先の学校で同じ教室に通っていたが、口を利いたことはない。そもそも方言に慣れるまでしばらくは口を利かないで耳から馴染んでいこうとしていたから、友人らしい友人は一人もいなかった。そんな子供が一人で防空壕の前に立っているのはきつと奇妙に思われたのだろう、振り返った先から瞳を捉えられて、一体何を言われるのかと構えざるを得なくなった。何も話しかけては来ない。その内、口を利いた覚えがないのもひとえに、この少女もまた口数が少なく遠巻きに人々を眺めているような子であるためだと思いが当たった。男子の作る囲いから一步離れている自分を、余所から見ている瞳があるかと思うと、同じように女子の作る囲いから一步離れている少女がいる。

それから何を話したのか、幼い記憶はおぼろげでつかみようがなくなってしまうが、穴倉の中で肌を合わせたことは確かに思い出せる。

「あの辺りは温泉もあるおかげで。一步踏み外せば妓楼が立ち並んでいるところだね、もしかしたら巧みに誘われてしまったのかもしれない。おまけに、息がずいぶん堂に入っていたから」

かといって、こちらが拙い息遣いをしていただけというわけでもない。穴倉に反響する声に引き寄せられて、深く深く息を通わせ合っていた。お互いの息が合わさっていくにつれ、穴倉に響き渡る音は二重にも三重にも重なっていき、それを手本にしてまた息をつく。自分というものが確かに感じられたし、目の前には実感が錯覚ではないと保証してくれる女がいる。

「安らかだったね。実のところ、警報やら怯えた声やらに耳がやられていたのだと気付けたのもそれがきっかけだったかもしれないし、空襲の時の防空壕で聴いた妊婦の声を思い出したのもそのおかげだったかもしれない。とにかく戦時中の記憶を呼び起こすためには、あの穴倉を経ないといけないんですよ。過去のみならず、未来へと向かっていくにしても、一度耳の中であの息遣いを反響させた後に一步を踏み出していた節さえある」

防空壕を抜けて寄宿舎に帰ると、多少咎められただけでその日は過ぎた。翌日、学校で少女と顔を合わせても、特別お互いに対する態度が変わった覚えはない。ただ相手の様子が目につき始めたから、ざわつく少女達の集まりから一步離れて立ちつくし

ている姿が、声をかけてもらいたそうに見えるようになった。とはいえ、あの艶めかしい声を思い出すと、どうにも目の前の幼い体つきは別人のように眺められ、話しかけてしまえばあれは錯覚だったと証し立てられそうに思われたから、向こうから声をかけてくれることを願って人だから一歩離れているしかなかった。

「今も願っているんですよ、彼女もまた耳が壊れていたのではないかと。お互いがお互いの息を聞いたことで耳が整ったのではないかと。ひよっとしたら壊れた耳は壊れた耳によってしか癒されないのかもしれない。もう相手の顔すら思い出せもしないけれど。結果的には、何もかも忘れて声だけが聞こえてくることで、私は救われているけれど。助平なものです。妻子はおろか孫までいるのにね。今のみならず、あの頃だって、これからまた危機が訪れるかもしれないというのに、暢気に女と交わっていたなんて。けれど、私の時間はあそこで止まってしまっているし、あそこからじゃないと始まらないんですよ。一旦自分を確かにする必要があるのですね」

終戦を機に疎開の必要はなくなり、子供たちは生まれた土地へと戻っていくこととなったものの、生家が焼き払われてしまった老爺はそのまま山形に残った。もっとも、形ばかりの移住から土地へと根を下ろす必要が出てきたから、転校が決まり二度と少女には会えなくなった。

「墓に入る支度をするような話になってしまったね。あの穴倉と棺の中は似ているの

かしら。自分の腐臭と暗闇で、少しでも記憶が思いだせるのならいいんだけど」
もっとも、もう時間を前へ前へ押しやる必要はないか、と言って老爺は相好を崩した。返事に困り目を下してしまつたが、氣付くとグラスのコーヒ―は空になって、甲子園も中盤に差し掛かっていた。

それではお世話になりました、と老爺が立ちあがるのにつられて、見送りのために玄関に向かつて戸を開けると、日が傾きかけているおかげで空が眺められるようになっていた。雲が浮かんでおらず、風が立つこともない。ただ蟬だけが鳴いている。

遅れて敷居がまたがれ、ああ、良い空だ、と皺だらけの首が露わになった。顔が白く照らされ、髪と額の境もなくなっていく。そんな風に空を仰ぐ姿を見ていると、新生児室で横にされ、大人達から見つめられるだけになった従弟の姿が思い返された。ガラス張りの部屋の中におくられたような顔がいくつも並んでいるので、つまらないからその内の一人だけでも笑わせようと手を振ってみるのだが、応えもしない。こんな細い目をしているのだから身ぶり手ぶりじゃわからない、と叔母が抱えたかと思うと、調子をつけながらおだてるような言葉を掛けて、小さな体を揺らし始めた。すると、口元がわずかにゆるむ。ずっと暗いところに籠っていたのだから視覚が発達しているわけはなく、かわりに声や鼓動はたくさん聞こえていたのだから耳に訴えかければいいのだと教わり、大人の真似をして歌うように声を掛けてみれば、今度は手足をばた

つかせ始めた。

何も見えないところから声が聞こえ、どこかで聞いたことがあると耳を傾けてみると、隣の子供が抱えあげられているらしい。親が一方的に言葉をかけるだけで、赤子はといえど忘れているのかどうかもわからないやりとりとも言えない声々が聞こえた後、また寝かせられたかと思えば、同じように他の子供が抱えあげられていく。そんな様子が繰り返される中でようやく自分を抱えてくれる手がやってきて、お前の声を聞かせてくれと言わんばかりのおだてるような声がかげられる。そうやって声を交わし合う内に、隣の子供達もこうして声を交わし合っていたっけ、初めは感情も何もなかった呻きのような音が、段々と泣いたり笑ったりする声へと変わっていったな、と振り返られて、成長していくということは、こうやって声を交わし合うことなのだ、と無自覚ながら声色として得心を表していく。

老爺と並んで空を仰いでいると、到底、赤子だった頃の心境など思い出しようもないが、同じ部屋に並んで同じ天井を見上げている赤子と我々は似ているのかもしれないと思われた。お互いがお互いの声を聞きながら、お互いの真似をしてお互いの親に抱かれ、やがて離れていく。そんな風にお互いがお互いの話をしながら、お互いの耳を整えていくということがあるのかもしれない。

そんな考えを巡らしていると、くれぐれもご自愛ください、という声だけが立って、

白い日差しの差し込む庭には足音だけが鳴り渡り、門を出て人の気配がなくなると、後には蟬の声だけがいつまでも聞こえ続けていた。

〈了〉

終日杳（はる）かに相同じ

読書会・座談会・その他

二〇一三年八月七日岡山へ

もともと小野寺さんとイコさんと6の三人で行く予定でしたが前日に小野寺さんが怪我をしたので、イコさんと6の二人で岡山小旅行ということになりました。

夏の朝、滋賀県から在来線で岡山駅を目指します。

旅のお供は『風立ちぬ』『菜緒子』。岡山の地で堀辰雄の読書会をするためです。

岡山駅のトイレ

岡山駅に到着して、まずトイレに立ち寄って用を済ませて手を洗っているとぼんと肩をたたかれた！ イコさんだった！ まさか男子トイレで会うことになるとは……。そこから僕らは「かきおこ（牡蠣のお好み焼き）」を目指して街を歩き、目的の店まで辿りついたはいいけれどなんと「定休日」だった。うそーんっと悲しみながらも、近所にみつけた「はちのす」という喫茶店に入る。（とにかく暑い日で、早めに涼み

たかった！）偶然入った店だったが、親切なおばちゃんが店を切り盛りしており、なかなか味わい深い雰囲気を漂わせていた。そこでおすすめのオムライスを注文して、アイスコーヒーを頼んだ。二人ともお腹をすかせていたからオムライスはすぐに食べ終えてしまった。ネットでもリアルでもイコさんとの会話はやはり小説の話が中心。のっけから、小説を書くことについて互いの考えを話し合う。

吉備路文学館

そして、岡山でぜひ行ってみたかった場所へ向かう。

それは「吉備路文学館」である。

岡山という場所にある作家はなんとこんなにもいる。

（吉備路文学館HPへ）

好きな作家も結構おり、HPを見ながらイコさんと一体こんなに沢山どうやって展示しているんだろう！

いったい何が待っているんだろうとわくわくしていた！

太陽が重く照りつける日、滝のように汗をかきながら僕らは岡山駅から徒歩二〇分ぐらいかけて吉備路文学館を目指した。

到着して中を覗いてみると「竹久夢二」展と「東川篤哉」展が開催されていた。二人とも岡山に関連する書き手だそう。まずは「竹久夢二」展から入ってみた。竹久夢二というひとは画家であるは知っていたけれど短歌や詩を書く文学者という一面を持つことについては知らなかった。僕は絵画の展示よりも、紹介されている夢二の短歌や詩が素晴らしいと思った。絵よりもむしろそちらの方に興味を持った。あいにく、そのとき展示されていた句を思い出すことができないが、雰囲気を紹介するために青空文庫でみつけた素敵な詩を紹介しておこう。

歌時計

ゆめとうつつのさかひめの
ほのかにしろき朝の床。
かたへにははのあらぬとて
歌時計のその唄が
なぜこのやうに悲しかる。

紡車

しろくねむたき春の昼
しづかにめぐる紡車。

をうなの指をでる糸は

しろくかなしきゆめのいと

をうなの唄ふその歌は

とほくいとしきこひのうた。

たゆまずめぐる紡車

もつれてめぐる夢と歌。

『どんたく 絵入り小唄集』竹久夢二（青空文庫より）

「東川篤哉」という作家はいまをときめく『謎解きはディナーのあとで』の作者。様々な職を経て作家になったようで、こちらはそのいった生い立ちや経緯なども紹介されていた。編集者の赤が入った原稿も見ることができて、このようになされるのかと、プロの緻密な校正に驚いた。三〇分ぐらいで二つの展示を見ることができて、意外とコンパクトな文学館でした（笑）。

歩きながらの句会

読書会をするために岡山駅付近のカフェに行きましよう、ということになり再び岡山駅に戻る。途中、夏らしい風景が目に入ってきた。緑の柳、水路を飛び立つ鷺、水面に揺れる藻などが風流に感じられた。

「何だか一句詠みたいですね」。そこで僕らは題材をまだ色づいていない「あおもみじ」に決め、岡山駅に着くまでを制限時間として句会をすることにしました。

イコさんも俳句を始めてまだ間もなく、僕は始めるにすらいたってなかったから二人とも素人。決まりもよく分かっていない句会だけど、とにかく詠んでみることにした。できあがったのが次の句になる。

■彼もまた 明日の夢見し 青紅葉……イコ

■夏化粧 みなもに映る 青椀（あおもみじ）……6

『菜緒子』読書会

急に土砂降りの雨が降り始めて、僕らはなかなかカフェをみつけることができなかつた。カフェをみつけてもそれは読書会ができそうな落ち着いた場所でなかったりとして徐々に疲労していった。そんなとき、オアシスのように100%桃ジュースを販売する

屋台があり、そこで桃ジュースを飲む。これがこの旅で飲み食いした中でもっとも美味しい食べ物であった！ さすが岡山のものも。元気を取り戻し、偶然みつけたホテルの一階カフェで読書会をすることにした。紅茶とケーキを食べながら、『菜緒子』そしてジブリの『風立ちぬ』について熱く議論した。（詳細は読書会ログをお読みください）

「山本二三」展

読書会后、カフェ探しの途中でみつけた「山本二三」展に立ち寄ってみる。「山本二三」さんはジブリなどで背景を担当してきた職人さんである。写真を見るかのように『火垂るの墓』『となりのトトロ』『もののけ姫』の背景は説得力にみちた美しいものであった。閉館時間ぎりぎりだったので、走るように見てしまったがそれでも記憶にはしっかりと残っている。

『時をかける少女』（細田守監督）の背景も手掛けていたようだ。展覧会の最後に写真をとるスペースがあった。そこには映画のワンシーンの背景が描かれていて、その中に自分が入りこむことができるようになっていて。坂道の前でこちらを振り返るマ

コトに代わり、イコさんに入ってもらおう。『時をかけるイコ』である。

居酒屋

旅も終りが近づいて岡山駅周辺の店で晩ごはんを食べつつお酒を飲む。選んだ店は「かっぽうぎ」という居酒屋。居酒屋定番のからあげやたこわさ、串焼きなどをもりもり頼む。やはり定番のつまみが一番美味しい。イコさんはビール、〇はハイボールで乾杯をして、懐かしい話をしたりこれからのことについて想いをめぐらしたりした。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、電車の時間が来る。「また逢いましょう」と言っておくは夏の岡山を後にした。

岡山オフレポート

(写真) 読書会の風景



第十回座談会「小説と詩の恍惚をめぐって」

参加者：6、イコ、ふかまち、日居、あんな、緑川

6.. こちらは座談会「小説と詩の恍惚をめぐって」の会場です。

ふかまち.. おねがいます。

イコ.. おねがいます。

6.. イコさん、ふかまちさん、あんなさん、日居さん、来ていただきありがとうございます！

手掛かりのないテーマなのでうまくできるか心配ですががんばります。ではいきま
すね。

小説や詩をはじめとする、「読書」という行為はときに「現実」をも巻き込んでさ
まざまな体験をわたしたちに与えてくれます。むしろそれは読者という読み手がいな
ければ引き起こせない事件だと思うのですが……。事件とまではいなくても、これ
までの経験から印象に残っている読書体験などあれば教えてほしいなあと思います。

どなたからでも、どうでしょうか!?

どんなことでも結構です。読書に纏わる忘れられないことなどありましたら、お願
いします!

ぱっといわれてもなかなか言語化しにくいかな。では僕から話したいと思います。
一年に何回か、まさに雷に打たれたような衝撃的で幸福な読書体験をすることがある
のですが……。最近では芥川賞作家の朝吹真理子最新作「いりくちでくち」がそうで
した。

「Scene」と名づけられた短い断章がいくつもつづき、小説としての構成されている
のですが、それが突拍子もないフリースタイルの詩のような文章が多く、とても興奮
した次第です。

そのうちのひとつに、

『Scene 夫

(中略)

わたしは、ひかりにおぼれて、死にました。いまは、まだ、しりません。
がんばりがえし。

忘れたいことは、すべて、忘れた。畳にさしていた、ひかりがおしよせ、身体がう
しろへと、かたむいていく。ひかりに、ばたん、と、のまれて、消えた。

うみのおと さふ さふ
いちめんの なみ

娘たちのうたう、うたが、自分の死ぬ日のことだとは、しるよしも なかった。娘の
声。意味はわからない。音のふるえしか わからない。

その日は、光をとりつけていた。廊下の電球が切れていて、それをとりかえていた。
その日は、たしか、祝日で、お祭りが近くにあるというので、娘たちは、でかけてい
る。

廊下に面した一間。
古い畳に、ひかりがさしこんでいた。

それは、ふしぎとひかり、ひかりで、川をつくってゆく。畳から、わいて、とろとろ
あふれ、天井にも、なみもよう。ひかりは、アメを炊いたような色。しぼった、くだ
ものの汁にも似ている。わたしは、その、ひかりに近づいていく。ひかりに足が濡れ、
あしさき、くるぶし、ふくらはぎ、すべてがひかりにひたされて、ひたひたに、なっ

てゆく。身体がうしろへと反り、ひかりがせりあがるのか、畳が、せりあがるのか。あしのうらからおされて、畳が垂直にかたむいているのか、わたしがかたむいているのか。わたしのからだは、どんどん水平になってゆく。天井がすぐ、あしもとにあり、そのまま、ひっくりかえって、消えた。

わたしは、ひかりにおぼれて、死にました。が、
 死にました。』

（朝吹真理子・飴屋法水「いりくちでくち」『新潮』二〇一三年六月号）

6.. 以上のような断章がありました……。他にも興奮した箇所はいくつもあるのですが、とくに衝撃的だった場面です。ここだけ読んでもよく分からないかもしれませんが、僕はここの「ひかり」の描写を読んだ時に胸の奥をくすぐられるような、くすぐすという笑いがこぼれるような気がしました。文章にからだをさわられるような、身体的な感覚がこのわずかな文章から感じ取ることができ、とても驚いた覚えがあります。うまくこの感動が伝わっているかどうか判りませんが、とにかくこんなことは初めてで、踊りだしたくなるような、万歳をしたくなるような気持ちでも形容すればいいのか……。何とも言い難いです……。のっけから一人でハイテンションです
 いません（笑）

イコ：「ひかり」がいっぱい使われてるなあ。

ふかまち…これだ！ という文章にであったらさんの興奮が伝わってきましたよー。

6…ありがとう！

ふかまち…わたしはですね、小説とか童話なんかはおもしろいなーと思いつながら、小さい頃からちよくちよく読んでいたんですが。

6…ふむふむ。

ふかまち…詩はおもしろいと思ったことがなかったんですね、でもなんとなく開いた文学極道（ふふふ）というサイトで一条さんという怪物に出会ってからは、もう、これしかないみたいな感じで詩にのめりこんでいったわけですね。

ふかまち…ここにあります。この「血みどろ臍物」という詩に、本を読むということ、自分がなぜ本を読み続けているのか、読書というものからなにを得ようとしているのかを、ぐりぐりえぐられました。

6…「血みどろ臍物」……読み中……。

ふかまち…それから詩を読むようになって小説がもっと好きになったし、小説を読むことで難解な詩も少しは理解できるようになってきた、という体験。

6…「血みどろ臍物」……読みました……。これもすごいですね！ 「あたし」があふれている。

イコ…どういふところにえぐられたんですか？

ふかまち…そうですね。読むということから何かを得ようとしている、何か貪ろうとしている、そういうせい根性をこの詩に指摘されたかな、わたしの場合ですが。

6…ただのお上品な詩にはない、色んな要素がちりばめられていることをふかまちさんは嗅ぎとったということですね。

イコ…ふーむ。

6…一条さんをるさんやふかまちさんがよく褒めていて、どういうところが良いのかってというのが僕もよくわからなかったんだけど、初めて真剣に一条さんの詩と向き合ってみて、この詩から感じたのは、平凡な日常から、物凄いスピードで展開して行くんです。存在とか時間などに意識をかたむけられながら、時折なんだろう…、キラールフレーズで「絵」を見せて、なおも突進していくような。「あたし」が「あたし」に向かっていくんだけど、最終的に「あなた」にたどりつくようなところが何かすごかったです。

イコ…6さんはどのへんをキラールフレーズとみますか。

ふかまち…すげーイコさんが食いついておる（笑）

イコ…具体的に聞きたいんだもん。

ふかまち…ですよね。

6…『あたしがあなたに与えることが出来るのは、ページがめくらられるたびに生起す

る風の音だけ』こことかですね。

イコ…もしできるなら、ですけど、そこを「キラールフレーズや!」と思う感覚に理由づけできますか?

6…キラールフレーズというものの僕のとらえかたは……:空気が一瞬にして変わる言葉かな。

暴走族とか利便性とか都市開発とか何だか落ち着かない言葉が続くなかで、一瞬この詩を駆けぬけた「風」。予想もつかないおだやかでさわやかな風。そういう感覚でしょうか。この詩は概念的な言葉と、映像的な言葉が混交していて、でもそれが描き分けられているような印象を持ちます。なんか大友の漫画のような印象を受ける(これは言語化できないです)。しかもフルカラーの奴。

ふかまち…ふむ。

イコ…ふーむ、ありがとうございます。ちょっと考えてみました、難しいなー。

『読むということから何かを得ようとしている、何か貪ろうとしている、そういうせい根性をこの詩に指摘されたかな、わたしの場合ですが。』

ふかまちさんのこの言葉を受けて、「何か」ってなんやろって考えたとき、「意味」みたいなものを当てはめてみたんですね。そしたら少し、ああ確かに意味を深く考えることにあんまり意味はないな、と思えました。でもそういうものだとしたら、何を

喜んで、恍惚として読むかっていうと、自分は、6さんの使った「キラーフレーズ」（使い方が少し違うけど）だった。そのキラーフレーズを見つけられるような詩と出会いたいと、お二人の話を聞いて思いました。

ふかまち…なるほど。

イコ…この一条さんの詩に自分は恍惚を得られないけれど、それはそれでいいんやと思っはいます。

6…「読む」という行為が更新されたってことかと思っはいました。それまで使っはいなかった脳のある部分がこの詩によって動き始めたかのような。

ふかまち…何がつぼにはまるか人それぞれだからイコさんのいうとおりに思っはいます。

イコ…

『「読む」という行為が更新されたってことかと思っはいました。それまで使っはいなかった脳のある部分がこの詩によって動き始めたかのような。』

ああ、こういう表現があるんや、まったく気づかんかった！と思っはことはありますね。自分にとっては「惑星ソラリス」の藻がそうだったな！

6…そういう感覚って、何かを詳しく知っていくことにあるんじゃないかと。「黄色い本」で僕のある部分の脳みそが動き始めた。「いりくちでくち」でもそうかもしれな

イコ… 『俳句は第一芸術と区別して、第二芸術とでも呼んだ方がいい』 っていう、桑原武夫の『第二芸術論』での俳句への痛烈な批判に対して、水原秋桜子が『黄蜂二号』で『俳句のことは自身作句して見なければわからぬものである』と述べたんですね。これ自体は有効な反論にはなっていないと思うんだけど、たとえば小説だったら小説、詩だったら詩、なんでも、実際に作ってみるとか、深く知ろうとして、初めて分かってくるものがあるんでしょう。でも深く知ろうと動機づけてくれる突破的な作品が必要なのも事実。ふかまちさんの詩への認識をかえる突破口が、一条さんの詩やった。そういう体験って、めっちゃ幸福やと思うなあ。

6.. そうですね、小説を書かなければ読めなかった感覚はあると思います。

あんな.. こんばんは。わたしは小説を書くために読み始めたところがあります。

6.. こんばんは。

ふかまち.. あんなさんこんばんは！

イコ.. こんばんは、あんなさん。

ふかまち..

『たとえば小説だったら小説、詩だったら詩、なんでも、実際に作ってみるとか、深く知ろうとして、初めて分かってくるものがあるんでしょう』

書くにあたって読んだものから何かを自分のものにならしたいと思いつつながら読むと、ま

た違う読み方ができて違う面白さが味わえるのかな、でもその副作用もあるかなんて思っています。

イコ…ふかまちさんは、副作用をどんな風に感じておられますか。

ふかまち…んー、恍惚するたびに道に迷って筆が止まったり、巨大な壁になつてしまうという副作用ですかね。でもこれ乗り越えれば一気に跳躍できるから悪くも無いのかな。

イコ…読めば読むほど無自覚に書いてる自分が分かって、これでいいのん？ っとなり、書けなくなる、っていうのはあるかも。

6…副作用か……。

ふかまち…すばらしい文章と出会うのはしあわせだけど怖くもあるかな。

イコ…文学の世界は怖い人ばかりですね。

6…自分と比較してしまって、暗くなることはありません。

あんな…純粋に作品を楽しめるのになって思うことはありますね……。

6…あんなさんのはどういう？ 楽しめないものっていうのは副作用的なものですか。あんな…うーん。もう書かない人目線で作品読めないじゃないですか。

6…なるほど……なくしてしまった視点ですね。純粋な受容者としての視点。

あんな…はい、芥川賞作品が本読まない人に、つままない、と言われてる時とか、よ

く考える……。

イコ…ああ、よく言われてますね。「これが芥川賞!？」とか(笑)そういうセリフをネットなどで見るたび、あなたがたは一体どういうものを芥川賞だと思っているのか聞いてみたかったりする。

あんな…なんか溝を感じますよねー。

イコ…でもそういうとき、これを面白く読める自分は幸せやなあ、と思います(笑)あんな…たしかに!

ふかまち…ですね! すみません、家族と出かけるので抜けます。いやー、読書はすばらしい! そのひとことでまとめられるくらい、純粹に文学を楽しめればいいな。

6…え、そうなんですか。残念ですが、ではまた!

6…「小説」と「読み物」の違いとは、それと出会う前と後で決定的な変化をあたえてくれるものが小説で、もともとの自分をやさしく撫でてくれるものが「読み物」と聞いたことがあります。その意味で副作用はたいへんかもしれないませんが、薬になる文章とは、同時に毒であるということですね……。

イコ…そうですね、自分も6さんのおっしゃる「読み物」ではない「小説」を読むのはつらいときがあります。文章に抵抗されて、なかなか読み進められない。だけど、読み終えたときに、何かが更新されてるんですよ。そういう体験を得たくて、わざ

と滝に打たれてる感じ。

6… ええ……滝にうたれなきゃ……。

イコ… ちよつとまとめたので、自分の恍惚について、挙げてもいいですか？

作品にユーモアは大切だと思うんですが、ここまでやるか！ っていう、「決死のユーモア」を体験したことがあります。

『相手が警官でも祖母が夜中にドアを開けることはなくなっていた。数年前から親切な警官が泥酔した父をドブから拾い上げ、家に届けにくるたびに睡眠を中断されることにうんざりしていたのだ。レートフェールデヘムの警察が他の何よりもタクシー会社に似ていた時期だ。まず父を玄関の前まで連れてきて、その三時間後にズワーレン叔父を届けにきたことさえ何度かあった。我らがヘルマンを部屋まで連れていき、ポロポロになった服を脱ぐ手助けまでするのは、さすがに度が過ぎた。結局のところ彼らはそれによって村全体の安全に貢献していたことになる。道に横たわって酔いを覚ましている者は事故の原因になるだけなのだから。』

(ディミトリ・フェルフルスト『残念な日々』新潮クレストブックス版、五十一ページ)

イコ…ベルギーの小説なんですけど、この小説との出会いは、たまらん幸福でした。笑えるんです、くすくす笑ってしまうんです、でも語り手はめっちゃ必死で笑いをとっているんです。

6…そういう体験はしたことがなかったなあ。ユーモア小説というのをなかなか読むでこなかった。

あんな…わたしもあまり読んだことないかもしれない。

イコ…ベルギーに破滅的な酒飲み一族がいます。みんなビールが大好きで、ろくに仕事もせず、日がな一日中、酒を飲んでばかりいる。主人公の「ぼく」は、その血を受け継ぐ少年。作家になってからの、後年の回想っていう形式。

どのページをめくっても、語り手がジョークを言わないところがないんです。ひとつのジョークがつぎのジョークを生む。全編ジョークのかたまりなんです。日常をまじめな文章でストレートに書くんじゃないくて、どこかに皮肉を入れて、描く対象と距離を取らずにおかないんです。

町田康とか、爆笑しながら読みますけど、あれもけっこう決死のユーモアに分類されると思うんですね。読みながら、初めはただくだらないなあ、アホな作家やなあと思っ

えてきて。どうしようもない破滅的な一族を、たまらなく愛しく見ている作者の目に気がつくんです。おれたちほんとかたくな人間だけど、こんな、「一つの悪いジョークの煮ごりみたいなの人生」も、人生なんだよな、っていう。でも、ディミトリ・フェルフルストのそれは、ジョークで笑うたびに胸がしめつけられて、たまらなくなるんです。町田さんは、とくに初期作は、下手すると、ああ笑った面白かった、「でもなんでこれが芥川賞？」で流されてしまう危険があったと思うけれど、フェルフルストは、そうならんだろうな、って感じました。連作短編なんですけど、最後の方は、一行一行、とても大切に読んでいる自分に気がつきました。笑いながら、胸を締めつけられている。

6.. 町田康はたしかに笑える。でもこういう皮肉というか、ウイットみたいなものはあまり読んでこなかったのかも。『吾輩は猫である』も挫折してしまっただし。何か別ものをひきつけているんですね。ユーモアがユーモア以上のものを……。

6.. 徹底すれば、「何か」が浮き出てくるんですね。徹底って非常に難しいんですけどな
あ。

イコ.. うん、徹底されている。どこまでもひたすら読者をそのやり方で引っ張っていかうとする小説っていうのは、すごく好きです。書いてるうちに徹底ができなくなっ

て、迷ってしまって、作者がうろろしている小説を「集中力が切れた」って呼ぶんだらうな、と最近思います。

6..笑いって非常に難しい手法だと思う。寒いって言われてしまったらどうしようかと考えてしまって、ずっと手出しできないジャンルになりそうです。

イコ..クソマジメも突き詰めればユーモアになるんじゃないかな。

6..うん、そういうのもありますね！

ここまででは読書のこと中心でしたが、創作について今度は話していきませんか。もちろん読書の話題が続いても大丈夫なんです。

あんなさん、何か読書や創作で最近考えていることはありませんか。

あんな..最近小説はどれだけ濃くできるかをテーマ（？）に書いてます……。なので一行一行、いじいじぐちゃぐちゃしてます。完成してみないと、このやり方がいいのか悪いのかはわかりません。

6..濃密な文章を書こうとしているんですね。

あんな..多和田葉子の『文字移植』とか『変身のためのオピウム』とかが、自分にとって初めて字を字として読まず「世界」を感じられた作品だったと思うんです。自分はどうやったたらそういう感覚を読者に感じてもらえるかってことを最近もっばら考えてますね。

6…なるほど……。

イコ…字を字として読まずって分かるな……。『文字移植』は、読んでるハシから字が崩れていく作品でした。

6…「世界」を感じさせる、めっちゃ難しそうだけど、僕もやりたい方向性です……。その小説が存在することによって、小説の定義を変えてしまうような何かをもっているっていうのは素晴らしいことですね。

あんな…何度も何度も読みたくなる、というのは理想な気がします。好きな本は何度も読んじゃいます。

6…何度も読んでも飽きない小説というのは、たしかにありますね。磯崎憲一郎の小説とか何度も何度も読みました。

あんな…お二人の創作の仕方はどんなのですか？

6…イコさん、どんな感じでしょうか。

イコ…できるだけ人物と距離を取っていきたいです。でも人物に魅力をもたせたい。よく「自我」がどう、っていう言い方を自分でするんですけど、作者と作品の距離が取れてなくて、全編作者の自我に支配された小説って、今はあんまり好きじゃないんですね。人間を丁寧丁寧に、でも観察者であるっていう目を崩さずに書けば、距離を取ることと、魅力をもたせることは両立できると思うんです。

6…「観察」っていうのはイコさんの小説によくでてくるキーワードな気がする。

イコ…そのための方法を模索中ですが、今は人外を小説に放りこぶことによって、人間と距離を取ろうとしています。魅力はともかく、距離を取ること自体は、できてきているかな、と思いました。観察したいですね、めっちゃ観察したい。

6…人称から、観察⇨距離の取り方へみたいな流れかな：イコさんの創作は。

イコ…そうですね。

6…なるほど…：そのために人外を使うというのが、特徴的なものかもしれない。

イコ…芥川賞の藤野さんも、やってみたいと言っておられました。やばい、先にやられてしまう！ と焦りが（笑）

あんな…藤野さんの人称使いは軽く衝撃でした。

6…そうなんだ：あの人は、人間じゃないものが好きだから、たぶんゾンビとかかな…。

あんな…そんな手があったのか！ という感じ。

イコ…三歳の幼児やと錯覚させる「信用できない語り手」。

6…「爪と目」ですか？

あんな…幼児を使ってまさか二人称とは。

イコ…あれ三歳の幼児が大人びた口調で話しているように見えるから怖いんですね。

三歳が「あなた」とか言わんやろ、と思いつながら、謎の説得力で読んでしまう。でもほんまは、後年の「わたし」の回想なんです。

緑川… こんばんは。

あんな… 変な不気味さを漂わせるのに見事成功してますよね。

緑川… 実家からなので、今日はおとなしく……。

あんな… こんばんは！

イコ… こんばんは。チャットなのでご安心を（笑）

6… 実家なんです。ということは九州？

緑川… はい。すぐく久々。

6… 里帰りですね。

緑川… はい。盆休み。

6… 緑川さんにお盆がおとずれた……。

イコ… 遅れてきたお盆ですね。

緑川… お盆中は忙しいので、終わってからですね。

イコ… お疲れさまです。

6… 最近、小説は描きたい場面が頭にうかんでそれを描くために物語を考えているところがあります。あと雰囲気を大事にしたいと思っています。最後に、文体を考えな

がら書いていきます。僕はそんな感じかなあ。あと、最近では勇気を課題にしています。こんな方向にいったら、かっこわるいかな、とか気にせず、やりたいことをやれるだけのちからをつけようと頑張ることにしました…。

あんな…勇気…いいですね。

6…勇気出します！

イコ…6さん最近かなりクサイですね。

あんな…（笑）

6…かなり tweet もくさいことを言ってます。

イコ：twitter のコメントが……うん（笑）

イコ…ギッブル出てきますよ。

6…踊り続けます！ 僕は……。ギップリヤー！

イコ…でも6さんの小説はイメージ喚起力があるように思うので、その路線は楽しみだな。

6…小説でしかできない体験のようなものは、やはりずっと目指して行きたいですね。イコ…みなさんは、書いていて楽しいなあ、幸せだなあと感じますか。

6…思いますね。

イコ…ほう。最近カヅヤさんがリツイートされていたんだと思うけれど、「書いていて

辛いならやめればいいのに」っていう意見があったんですよね。血を吐いてまで書く必要ないだろうって。

6.. 最果さんのツイートでしたね。

イコ.. かな。

緑川.. いや、なかなか止められないですね。

イコ.. 自分は書いていてかなり辛いんですけど、でもやめられないしやめたくないですね。だから、みなさんの意見をうかがいたかった。ですよ、緑川さん。辛いからやーめたって、やめられるもんじゃない。

6.. あまり辛くはないかなあ……いまのところ、ただ体力的にしんどい……。書き終わった後は辛くなるけど……。

イコ.. 書き終わると辛くなるんだ（笑）

6.. 書き終わると辛くなります。

緑川.. 書いてる時に楽しい、幸せっていうのは、たまにしかないかな。

6.. 書いているときは「おれ、天才か!？」って自分をだましてるので（笑）

あんな.. 書いてる時はアドレナリン出るけど書いてない時は常に焦燥感……躁鬱っぽい……。

イコ.. 無理やり麻薬出しながら書く、それはありますね。

『書いてる時はアドレナリン出るけど書いてない時は常に焦燥感……躁鬱っぽい……』

これ、まんまです。「書ける！」ってなるまで書けないのに、それが長く続いていると、どんどん焦燥感に襲われて、精神不安定に。なんていうのかな、書いてない時期も、書いてる時期なんです。人生すべて、書いてる時期。精神がそういうリズムになっている。

6.. 僕は書いていない時も躁で、躁躁かなあ。書き終わったら鬱鬱だけ……。

イコ.. 書いてないときに苦しくてたまらないのも、小説のこと考えてるからで。書いてたら書いてたで、筆が止まって苦しいし。

6.. 筆が止まると辛い……てきとうに進めているともう後にはもどれない感じになっている……。

イコ.. ですね、でも最近「書き直し」という術を手に入れて、少し気が楽になった。

6.. その術は、なかなかできないです……。

あんな.. かなり勇気がいらますね、書き直し。

イコ.. 入魂して書いてるとね、なかなかね。

6.. どこから書き直せばいいのかわからなくなるな。

イコ.. でも、書き上がったのを、これはだめだ、もう一回書きなおそうって、最初か

ら書きなおしたんですね。そしたら、明らかに書きやすくなっていて、小説を、集中力を切らさず書ききれた。

あんな…最近わたしは細切れ戦法を身につけた。藤野さんも爪と目を人称変えて何度も書き直したって言ってましたね。

イコ…「あなた」と「わたし」にたどりつくまでずっと七割の出来だったって言ってましたね。たくさん書き直してたどりついた。鹿島田真希さんは「冥土めぐり」を十回近く書き直してました。

あんな…十回？！

イコ…百枚を十回。気が遠くなる。はい、文藝春秋だったかな、言っておられましたよ。

6..すごいな。

あんな…そのぐらいの気合いが必要なんだな……。

イコ…あんなさんの細切れ戦法ってどんなのですか。

あんな…何個も場面を用意しといて同時進行で書き足しながらくっつけていくんです。荒業っぽいですけど。

イコ…長嶋有みたい。書きたいネタをいくつも用意しておいて、それを有機的につなげていくっていう。(インタビュー「ジャージではじまる小説の書き方」)

あんな：長嶋有ってそうなんだ。

イコ：みたいです。思い浮かんだことをいくつもパソコンに、メモっておくらしいです。

あんな：ああ、そんな感じですか……。iPhoneのメモ欄が不穏な感じになってます……。

イコ：iPhoneにためてくんですね(笑)

あんな：iPhoneだったり手書きだったり……。

6：僕もそうしよう。

イコ：日々、書いてるときだけが小説に向かっているときじゃないようにしたいな。ぽっと浮かんだことを、書きとめておくと、いざれ使えたりしますもんね。

6：サナダムシ(バルガス・リヨサ『若い小説家に宛てた手紙』)にどんどん食わせていくんですね。

イコ：そうですね、まあ嫌でも浮かんでくるんですけど(笑)

6：きょうはこんなところかな。何か他に話したいこととかありますか？ 日居さんと

緑川さん。

緑川：ああ、すいません。

6：最後に何か一言を……。

緑川：入ったり、離れたりで私は、書き終えたときの(たまに書いているときの)手

応えかな。書くことから離れられないのはそれを、ずっと追いかけてる感じ。

6.. その手ごたえのために書いているということ。日居さんはやはりキーボードが不調なのかな……。

では、ここらでお開きにしたいと思います！ みなさまありがとうございます！

日居月諸: My keyboard is dead.

(文責: 6)

第十回読書会 堀辰雄「菜穂子」

堀辰雄『菜穂子・楡の家』

堀辰雄『菜穂子・楡の家』

堀辰雄「菜穂子」読書会（抄）

日時：二〇一三年八月七日（水）一五時半～一七時 岡山オフにて

場所：ホテルグランヴィア岡山1F ロビーラウンジルミエール

参加者：6、イコ

イコ：では「菜穂子」の読書会を始めましょうか。

6：ケーキが来てからでもいいですけどね。

◆悲劇をナルシスティックにとらえる

イコ：どうでしたか、堀辰雄。

6：僕はあまり好きじゃないんですよね。

イコ：あ、そうなんですか。

6：これは一見、僕好みの小説に思われるかもしれませんが、悲劇をナルシスティックにとらえている感じがあまり好きになれません。

イコ：ああ、そういうところはあるかもしれませんがね。堀辰雄はサナトリウム（結核患者のための療養所）っていう、日常と切り離された特別な場所をよく使うけれど、場所設定自体が、悲劇性を帯びている。

6：そういう場所で孤独に生きている私たち、みたいな。

イコ：「風立ちぬ」では、結核患者と付添いの夫が、いっしょにサナトリウムで暮らしながら、死のかけで生きることによって幸せを感じるといった内容でした。

◆心理のための風景

イコ：6さんはHPの部員名簿でも述べておられるように、風景描写がお好きやと公言しておられますが、この小説の風景描写はダメだった？

6：うーん、僕の好きな風景描写と違うんですよね。「菜穂子」は登場人物の心理にスポットを当てた作品です。だから、描かれる風景もすべて、心理のための風景になっています。僕が好きな風景描写は、風景のための風景なんです。

イコ：詳しく教えてください。

6：堀辰雄の場合は、風景よりも、登場人物の心理が先に来るんです。「孤独」とか「さみしさ」といった感情が、風景に反映される。

イコ：なるほど。作中に何度も出てくる、「立ち枯れた木」はまさにそうですね。菜穂子の感情が、そういう風景を見せている。6さんがよく話題に出される磯崎憲一郎などは、そうではないんですか？

6：磯崎憲一郎は、まず風景なんです。人物の感情も描かれるんですけど、それは風景とは独立している。

イコ：自分は少し違う考え方をしています。磯崎の風景は、たしかに独立しているようにだけけど、たとえば「終の住処」では、ずっと月がのぼったままになっているとか、ふつうでは考えられないような風景が次々にあらわれますよね。あれって、登場する人間の見ている風景というか、人間の心理に従属した風景なんじゃないでしょうか。6：そうですね。シンボルとアレゴリーの違いなんじゃないかな、と思います。堀辰雄の作品の場合は、すでに一般化された感情、たとえば「孤独」や「さみしさ」のよなもの、風景が象徴している。磯崎憲一郎の作品は、風景が物語の中で、意味をもってくる。他の作品では通用しないかもしれないけれど、磯崎作品のみで意味をもつような風景です。

イコ：なるほど。堀辰雄は、風景に何かの意味を当てはめようとしているところが強

いですよね。

6：僕が好きなのは、シンボルとしての風景よりも、もっと風景が強い作品です。ル・クレジオの作品とか、そうじゃないでしょうか。

イコ：たしかに。

6：神の視点があまり好きじゃないっていうのもあります。堀辰雄は、トルストイの「アンナ・カレーニナ」に影響を受けて「菜穂子」を構想したようですが、僕は、トルストイも好きじゃないんですね。パフチンが『ドストエフスキーの詩学』で、ドストエフスキーとトルストイを比べていたんです。それによるとトルストイの作品では、作者が小説の神として君臨しており、すべてのものの裏で糸を引いてるんです。トルストイは登場人物を操り人形にしてしまふ。それに対してドストエフスキーは、作者も作品の一登場人物に過ぎないというか。色々な考え方ももつ人が出てきて、作者もひっくりかえって、自由勝手に動く。ポリフォニーですね。

イコ：なるほど。

6：僕は、堀辰雄はトルストイほどじゃあないと思っていて、だから、トルストイほど嫌いじゃないです。でもガルシアマルケスなんて、トルストイ以上に、作者の力がものすごいじゃないですか。人物は自分で勝手に動いているように見えても、ぜんぶ周到に作者が操っているような気がする。だから僕は、ガルシアマルケスを埋葬

したいんです（笑）

イコ：埋葬（笑）

6：同じラテンアメリカでも、バルガス・リヨサは違う気がします。あの人は語りの強さがあります。

◆他者が描かれている

イコ：自分も堀辰雄の作品は、そんなに好きってわけじゃないんです。今回読書会のために、以前読んだ「風立ちぬ」を再読してみたんですけど、見事に忘れていた（笑）

6：そうなんですか。

イコ：宮崎駿監督の「風立ちぬ」を観て、そういうえば、あのシーン使われてたなあ、と少し思い出したくらいで。再読して、忘れた理由が分かりました。きれいにまとめられすぎというか、悲劇性が強調されすぎて、あんまりおもしろくない。重病の女がまずいて、男がそれに付き添ってる。男は女の死後に別荘を訪れて、けっこう長いペーじを割いて、いわゆる「喪の儀式」みたいなことをやってる。「セカチュー（世界の中心で愛を叫ぶ）」と同じことやってるなあと思ったんですけど、そういうのは鼻白んでしまいます。それに比べると、「菜穂子」はずっとおもしろく読めました。

6：どうですか。

イコ：色んな人間が出てくるんですよ。その人間も、それぞれ色んな考え方をもち

てて、ちゃんと小説の中に立っている感じがある。小説が一人の自我の中に完結してなくて、きちんと他者がいる。こういうの好きだなあと。堀自身が、『猶もこれ以上自分が作家として伸びられるかどうかの試練として、自分以外のものの真只中に自身を投げ入れて見ることの必要を痛感するようになってきた』（『覚書二』新潮文庫版『菜穂子・楡の家』百八十五頁より）と述べている通り、菜穂子というヒロインは堀にとって、自分以外の存在として描かれている。堀の自我が満ちているように見える「風立ちぬ」より好きです。

6：確かにそうですね。小説の中で、明という青年は、ずっと一人で生きている。それに対して、黒川は、常に母と関係しながら生きている。そういう対比も、分かりやすいです。

イコ：黒川はマザコンなんですすよね（笑）

◆菜穂子の心の動き

6：僕も「菜穂子」はまったく好きじゃないというわけじゃなくて、菜穂子の、心の動き、たとえば夫の黒川がやってきたときや、去っていった後など、黒川のことを考えるんだけど、つい明のことを考えてしまったりする。そういうところを興味深く読みました。

イコ：いいですね。菜穂子の心の動きといえば、好きなシーンがあります。新潮文庫

版の『菜穂子・楡の家』の九十四頁なんですけど……。

6：あっ、同じですね。新潮文庫。

イコ：ほんとだ。あっ、やっぱり宮崎駿の「風立ちぬ」の帯が巻かれてる（笑）

6：これに合わせて買いましたからね（笑）

イコ：お互いに（笑）で、九十四頁の、青年と、重病の許嫁の出てくる場面です。青年がめっちゃ泣いてる。菜穂子は、許嫁が数日前から危篤に陥っていると知っていたから、やっぱり駄目だったんだな、と思うんですね。涙を死と結びつける。ところが実際は、許嫁が持ち直したから嬉しくて泣いてる（笑）

6：ありましたね。

イコ：それだけでもおもしろいんですけど、その後、事態は急変して、許嫁はやっぱり死んでしまう。青年は山を下りる。すると菜穂子は、なんかずっと重苦しく感じていたものから解放されたように思うんですね。えっ、それで胸の苦しさ、忘れ去られちゃうんだ、おもしろいな、と。

6：ふむふむ。

イコ：ああ死んじゃったんだ、次は自分かな、と書きそうなところを、あえて『重苦しいものからの釈放を感じずにはいられなかった。』（同九十五頁）と書く。これって、倫理的な観点でいえば、背徳的なものに見えるんですけど、菜穂子からしたら、療養

所での孤独な生活の中に、浸っていたいんです。だから青年が嬉しくて泣いてる、っていうのは、なんとなく、自分の存在を否定されてるようで、嫌なんでしょう。許嫁が死んで、また孤独の中の自分が許される、そういう感情を描いているのは、すごいな、と思いました。

6：なるほど、そういう風に読めるわけですね。

イコ：他にも好きな場面がけっこうあります。

6：僕は、技師が山を下りるところが好きです。百一頁、退院していく患者が、治ったのではなくて、自分がしかけてきた研究を完成させるために独断で山を下りて行くんですよね。

イコ：その技師が後で、完治不可能な身体になって戻って来るんですよね。

6：ええ、あのくだりが好きです。時間の流れが感じられて。

イコ：先ほど黒川が、母と関係しながら生きていくということについて挙げてもらいましたが、黒川が山に来て、菜穂子と一晚を過ごすところも好きです。黒川は療養所っていう非日常的な場所に来ること、初めて母から離れて、菜穂子を直視する。でも、山から下りると、やっぱり母から離れられない……。

◆純愛の元祖？

6：堀辰雄は一九三〇年代に、文学青年の間で広く読まれていたそうです。

イコ：えっ、そんなんですか。なんか「ブルジョアの文学だ」と言われて、批評家の受けも悪かったようだし、今じゃ、あまり読まれていないように思いますが。小野寺さんによると、文庫にも長い間入らなかったみたいですし。

6：神風特攻隊に選ばれた文系学生がよく読んだ小説だと聞きました。それらの学生が、堀を読んでいたと思うと。

イコ：こういう男女の生活への、憧れもあったんでしょうか。

6：セカチューの話も出ましたが、堀辰雄って、純愛ブームの元祖みたいなところがありますよね。難病が出たりもする。

イコ：なるほど。堀作品の登場人物って、とにかく病気にかかりますね。「菜穂子」一作で見ても、菜穂子だけじゃなくて、明もそうだし、牡丹屋の、およしの娘も病気にかかっている。少しでもかわった様子が描かれると、この人も病気にかかっているんじゃないか、ひょっとしてみんな病気なんじゃないかと疑いたくなってしまいました（笑）それで、思ったのは、美しく生きようとする、病気にかかるんじゃないかってことです。美しくってというのは、自分の理想を通そうとする、自我をもった生き方って感じかなあ。

6：古くからに、「目病み女と咳取り男」というのがありますね。

イコ：どういう意味ですか。

6：目をわずらっている女はかわいく見えて、風邪をひいてごほごほ咳をする男は、かっこよく見えるものだっていう意味です。

イコ：へえ、目をわずらっている人？ ちよっと嫌だなあ、それ。

6：病気の人と美しさが結びつくのも、そういう発想なのかもしれません。

(文責：イコ)

第十一回読書会 尾崎翠「第七官界彷徨」

ホスト：6

参加者：イコ、あんな

※読書会については三人とも『尾崎翠』（筑摩書房／ちくま日本文学004）を用いて話しています。

イコ：アンナ・カレーニナを読んでいて、その気分にとっぷり浸ってたんですけど、尾崎翠を今日読んで、最後にはすっかり尾崎気分になっていました。

あんな：変な気分になりますよね、この小説は。

6：尾崎翠の世界観は、ぱちっと決まっていますよね。変な気分になりますね、たしかに何か状況がつかみにくい。それではそんな感じで「第七官界彷徨」読書会スタートします。

イコ：よろしく願います。

あんな：願います。

6：願います。ざっくりとした大まかな感想を三者述べてから細かいところを話して行きましょうか。では全体的な感想をちょっとおっしゃってもらえますか。僕も

述べます。

芸術（音楽や詩あるいは薜）に魅了されたひとが持つ感性は、昔も現在も変わらないことにまず驚きます。登場人物の心理についてもとても共感できることが多い。また展開や小道具がガーリッシュで、あるいはガーリッシュさを際立たせるための対極に位置するようなものを持ってきたりとその小説の運び自体に今なお参考になるところが多いように感じました。昭和六年というと僕の祖母が生まれた頃なのですが、そんな頃にこんなお洒落で今風な小説を書ける作家がいたことがすごい。

あんな…会話文が独特でなかなか馴染めなかったけど、だんだん町子の気持ちになつて読んでいくことができた。細かい部分がすごく魅力的に描かれていて、特に髪の毛と昔にまつわる話が印象的だった。最終的に誰が誰に恋しているのだろうということはおそらくわからず、第七官界の詩は書けたのだろうか、というのもよくわからず、不思議な余韻を残したまま終わっていくような感じがした。もしかしたらすべてが町子の妄想だった…っていうこともありえるかもしれない…という感じ。これは恋の話ではなくて、尾崎翠のすごく個人的なものすごくうまい文字遊びなのではないだろうかとも思った。

イコ…少女漫画が大好きなので、なんか、少女漫画特有の、くすぐられるような感じを受けて、ぞわぞわしました。昭和六年の少女漫画小説！

町子はどうも「恋愛」をしたようなんだけど、恋愛の対象が、読んでも読んでも、明らかにならない。一助にも、二助にも、三五郎にも、浩六にも、それぞれ観察を通して、びったり気持ちを重ねていて、惚れてるように見える。どうも恋愛と聞いてつい連想してしまう「ひとりの人間と添うための恋愛」っていう考え方は、当てはまらないように思うんですね。

たくさんの男性が出てきて、勝手に思うことをする、それぞれ町子を「女の子」と呼んでくれる。ああこれって、「乙女ゲー」にも適用される、いわゆる「逆ハーレム世界観」なんじゃないか、それって好きな人は好きだよね、たまらないよね、と思うわけです。もちろん自分も。

またこの男どもが、分裂心理を研究してたり、こやしを煮ていたり、大声で歌ってたりと、勝手きわまる。しかしそれぞれに「属性」がはっきりしていて魅力をそなえてるから、そりゃあ女の子も、「恋愛」しちゃう。あくまで現実から遊離した、少女漫画的な意味での恋愛。

6.. ありがとうございます。共通して読んだところとしては「だれがだれにたいして恋をしているのか」不明確ということでしょうか。この小説について大きな問題であるように思います。まずはこのあたりから話して行くことができればと思います。

(思いついたことがあればどんどん、コメントしてください！)

イコ…潔癖なまでに性的なニュアンスが描かれなから、余計にエロいというか。ひよっとして一助とも二助とも三五郎とも、ここに描かれてないところで肉体関係をもってるんじゃない？ だとしたら近親相姦やないかお前らッ、と、ちよっとびびりながら読みましたが、最終的には、そういう予感だけを残した小説だという考えに落ち着きました。

あんな…よく考えてみれば、この人たちは血縁者なわけですから少し設定がおかしいですよ。

イコ…家族を攻略するなんてホンマ、ギャルゲ（ゴフンゴフン

6…町子の詩観として「霧のような詩が書きたい」というものがあつたと思いますが、この小説自体が「霧のような」不明瞭な雰囲気帯びていて、恋愛模様にもそれがあてはまるような気がしました。家族なわけですて設定自体が恋することが不可能？（不可能ではないと思うけど）なのに、描かれている状況はほとんど学園物のような初々しい感情に満ちた物語ですね。

あんな…ちくまの「第七官界彷徨」の構図その他という章で、彼らの住むに適した世界とは、あながち地球運動の法則にしたがって滑らかに運動していく世界ではありません。という尾崎翠の説明が書いてあるんですが、「恋愛」というものを使って地球運動から逸脱しようとしたのかな、と。

6…だから町子は、単純に恋と言う感情そのものに興味があつてこの人と恋すればという妄想を何度も反復しているようにも読めました。本質的にだれかのことを好んでいるわけではなく「第七官界」に届く詩のために「失恋」を経験するために、手段としての「恋」。それが町子のたくらみだったのではないかと思ひます。

イコ…町子は状況に対して受け身で、不器用なんですよね。変な家族が勝手に色々動いてくれるから、町子はそれを、ぼんやり詩人の「町子フィルター」とでもいえるような目で、涙をこぼしながら、ひたすら観察することができる。だから6さんのおっしゃるような、初々しきが見えてくるんだと思う。

自分からあれこれ器用に対象に働きかけていける女の子って、あんまり初々しく感じないように思います。(パターンとして女の子の積極行動がコンプレックスの裏返しだったりするけれど)

6…「地球運転の法則」…尾崎翠の世界観に通常の倫理感とか道徳観をもって読むことそれ自体が違うのかもしれないね。この独自の世界は独自の法則の上に成り立っている……たしかにそう読むべきかもしれない。

あんな…町子から何か意見を言ったり、物語を動かすっていう場面がほとんどないですよね。

イコ…町子のセリフ、ひとつしかないですよ。

6.. え、そうなんだ。

あんな… ですね… 何て言ってたんだっけ…。

6.. P 187?

イコ… 『大根島をとってしまわなければならないの… けれど…』

6.. 隣人とも会話していませんか。雨漏りについて。井戸の中を見るような心地がしたとか。

イコ… すいません、もういくつか会話しているのを見つけました。でも町子は、ほとんど独白か書面かで作者は町子が会話している様子を、町子自身のセリフでもって表現することがない。

6.. たしかにそうですね。でもそれによって、口下手な女の子を読者は想像しますね。

何だか不器用な感じの子。

イコ… かなり戦略的な感じを受けるなあ。

6.. それは尾崎翠の戦略？ 町子の戦略？

イコ… 尾崎翠の戦略によって、戦略的な町子を描いている、という感じw

あんな… 普通に読むと、この四人の中で何か恋愛なものが見えようように見えるけど、町子は実はまったく出てこない誰かに恋してるんじゃないかと思いました。

6.. なるほど。

イコ…「詩」に恋してるんじゃないかな。町子の世界観の中の、カギカッコつきの詩。男たちはそれぞれに町子の「詩」に合致する部分をもっていて、それが抽出されていく……。

6…最後に浩六に落ち着いた感はあるけど、でもそれは浩六がそこにいないから、それを対象にできたんでしょうか。でも浩六でもなくて、浩六が似ているといってくれた西洋の詩人を憧れているようにも読める。

イコ…浩六は、あまりそういう詩的部分をもたないように見えるから、ただの「女の子」がちょっと大人になっていくことの暗示なんじゃないかな。

6…尾崎翠の他の短編を読んでみたんですが「花束」という短編もそうなんだけど「過去」とか「もう会えないひと」とかに想いを馳せることが多い気がする。目の前の相手ではなくて、わずかなエピソードから想像で構築していった相手のことをずっと考えているような……。

イコ…他の作品もそういう感じなんですな。

6…「彷徨」しているんですよね、町子の気持ちとか感情とか試作に対する想いとかは。

イコ…本人もよく分かかっていなくて、定義できない、「第七官界」を彷徨している。

あんな…でもこの作品はすごく名前を聞くけど他の作品は聞かないなあ。タイトルの

インパクトか……。

6.. 「花束」すごいよかった。実は「第七官界」よりも「こおろぎ嬢」とか「花束」の方が何か好きです。

イコ.. 「新嫉妬価値」とか、明らかに川上未映子にうけつがれてますな>タイトルあんな.. かなり好きみたいですからね、でもこれだけタイトルに作品の世界観が引き寄せられるようなことはめずらしい気がする。

6.. タイトルの付け方も絶妙でそれまでの作家でもそうしたひとつっていなかったんじゃないかな。

イコ.. さっき「地球運転からの逸脱」や、「独自の世界」とお二人がおっしゃった、その感じが、タイトルから出ていますね。

6.. 「面会を固持、ひっそりと死去」という紹介がすごくカッコいいように思えてくるんですよ。だれと交流もせず、だれの影響も受けずひたすらみずからの世界観を構築することだけに専念していった。書き手として尊敬します。何か「主義」「派」とか文学流派に頼らずに、一人の書き手として書きたいものを書いたというのがすごく響いてきます。

イコ.. その尾崎翠の感覚世界が、後の少女漫画家たちにすごい影響を与え、今の人もうけつがれているように思うんですね。ひとりの世界が、後に巨大な「派」という

か「ジャンル」を作った。

6.. うんうん。

あんな.. 会話文にしる小道具にしるかなり綿密に構築されているような感じを受けました。それがうまく機能して今でも通用するような小説になってるんじゃないでしょうか。ていうか、誰か映画化しないのかい、これ。

イコ.. 映画化されてますよね。

6.. 映画化とか僕も考えたんですが、これを映像で見るとって会話がすごい抽象度の高いことを話しているから視聴者がそれに耐えられるのになっていう問題があるかと思いました。たしかに映像で見た時に、それぞれの登場人物の仕草とか、とてもきまっているものが多いから向いてそうですよね。

イコ: <http://eiga.com/movie/75737/>

イコ: <http://www.h3.dion.ne.jp/~tantan-s/ozaki.html>

このサイトが詳しくそうだった。「第七官界彷徨」そのものの構造では描けなかったみたいですね。

あんな.. これ予告編 Youtube で見たけど町子が赤毛のアニメたいでなんか違った……。

6…赤毛のアンみたいだ……赤毛のアンすぎる……。

イコ…赤毛のアンは、小説を読みながらちよっと連想しました。外見的なニュアンスだけけど。

6…髪の毛に対する描写が面白かったですよね。何度も出てきて、非常に町子が髪の毛を意識しているのが伝わってきた。

イコ…この映画、雰囲気はよさそうなのになんで町子があれなんだ。

6…町子も気になるけど尾崎翠像も破壊されそうな気がしました。この映画みたいに健康そうに笑う人だったのかな。もっと髷があるような気がする。

あんな…なんで尾崎翠この人にしたんだろう。

イコ…監督の作家性が強そうですね。予告編見てとりあえずツツコミたいのは、「鳥取出身の作家やからって鳥取砂丘出してんじゃねえええ！」

6…黒田夏子さんは素敵なお婆さんだった。

イコ…6さん黒田さんに惚れすぎやねw

6…鳥取砂丘…何か安部公房ぽかった。

イコ…砂の女かw

6…黒田さんの話すると読書会が別の方向にいきそうだから自重します

イコ…小説に話を戻すと、町子が髪を切られるシーンは、衝撃だったな。

6.. そうですね。この小説の大きな見せ場のシーンでしたね。

イコ.. 女の子の髪の毛を勝手に切るなや〜虎刈り虎刈り連発するのも、なんか町子の心を辱めまくってるようで泣ける……。

あんな.. 「さあ、髪を切ってやろう」とか軽々しすぎるから。髪の毛すごい気にしてるのに！

イコ.. デリカシーと縁のない男共ですね。

あんな.. しかしそれにも従う町子って一体……途中で逃げたけど。

イコ.. 受け身にもほどがありますね。あとでポヘミアンネクタイで髪を隠すところ、えっ、髪ってネクタイで隠せるの？っておどろきつつ、想像して笑いました。

あんな.. こいつら妹に口づけしたりとかやりたい放題すぎやしないかい。

6.. 町子はいつも祖母のことを考えていますね、髪をきられたとき泣いた理由が「おばあさん」がそれを見たら「泣く」ことを想像したから、自分も泣いてしまったという流れでした。いつも心のどこかで祖母のことを考えていて、それが彼女の気持ちを下落させるのに効果的な役割を持っていたと思う。

イコ.. 甥と口づけしまくる小説を書いたことのある自分としては何にも言えない……。

あんな.. イコさん W

イコ.. おばあさんは彼女の心に大きな役割をえていますね。母性なのかな。秘密を

もとうとする感じが女の子だな。

6..それが研究論文となっているのに、非常に抒情的な文章なのにもおかしみがありました。

あんな..（この中でのモテキャラは確実に二助だな）

イコ..あれ論文ちゃうやんねw

6..そうですね、父と母がでてこないから、祖母が代わりなんでしょうか。

イコ..いちばんのモテキャラは昔です。

6..父と母では何となく近過ぎるからかな。

あんな..おばあさんが毎日髪を整えてくれてたんですよね。

あんな..どうでもいいけどこの昔って漢字（このパソコンだと出ないけど）こういう漢字もあるのね、というのを始めて見た。そんな漢字が多かったな。

イコ..自分で髪をととのえることができなくていうところも、なんか、少女っぽい垢抜けなさ、不器用さをあらわしてる気がするなあ。

6..蘇でますよ。

イコ..蘇苔類……。

6..美髪料も送ってくれていましたね。

あんな..なんで出ないんだろう。

6.. 漢字や片仮名の使い方も良かった。ノオト…ペエジ

あんな.. 町子を極端に内向的な性格にして、他の人たちの会話で小説に立体感を出そうとしたのかな。

イコ.. コミックオペラ

あんな.. べえとおう.. えん

6.. 他の作品でも「ふいおな・まくらうど」とか平仮名だったし

あんな.. おばあさんがすべてで自分の意見がないというか、ずっとそこにしがみついている感じがする。

6.. (口づけよりも萌えたシーンとしては「玄関をしめに行った三五郎は、私の草履をとってきて窓から放りだし、つづいて私を窓から放りだした」。ここめっちゃいい気がします)

イコ.. 「恋」してると、自分の意見なんかなくして、ただ見つめちゃう、そういう感覚なのかな、とふと思った。

イコ.. 窓から放り出すとこ、ほんまに漫画やなあw

6.. 漫画ですね、これ笑った。

6.. さらに尾崎翠の漢文混じりの文章とか、学術論文体裁の文章とか、電報体裁の文章とか説得力ある書き方で描いていてあらためてすごかったです。他の人たちの会話

によって町子の状況が分かったりしますよね。地の文で語らせるよりも、はっとします。

イコ…例のカナ書きの論文が「私」の語りと違う文体だったので、作者が文体を複数もっている感じは受けました。

イコ…一助と二助の会話も、かなり笑った

6…あと小道具のチョイスが巧すぎるんだ…野菜風呂敷に安全ピンとか可愛いですよ。ね。

イコ…分裂病の心理を解き明かしたい一助は、誰でも病院に放りこもうとしたがるし、二助は昔の恋愛に夢中で、昔が分裂病になったら困ると言う

6…そうですね。地の文の文体もかなりいいものだし。うらやましい。

あんな…バスケツトとかもなんかかわいらしい。

イコ…安全ピンかわいかった……。

6…かわいいものだらけの世界なのに「こやし」とかでてくるからまた際立つんですよ。ね。

イコ…臭そうな世界だ。

6…町子が掃除をして一助や二助の研究論文を盗み読むところとかも何かエロティックでした。それを盗み読んでいることを三五郎に隠しているところも興味深い。バラ

ンスのとおり方が半端ない気がする……読めば読むほど何か自分には一生こんな作品は書けないなあと思ってしまう。

あんな…鶏糞の買い物とか頼んじやうし、

イコ…そのくせ靴下を洗ったバケツで大根洗ったら怒る人たちw

あんな…でもこの話を読んでるとなんか臭そうって思わなくなってだんだんなんかすごい懐かしいような心地よい匂いな気がしてくるから不思議…おばあちゃん家の筆筒の匂いみたいな。

イコ…たしかに……。

6…わかります。下品じゃないんですよね。

あんな…そのままその場の空気感になってる。

6…日本のただの共同住宅がある種、幻想的に描いていて、現在でもこういう小説がでてくればいいなと思います。

イコ…角田光代さんはちよっと、近いもの持ってる気がするな

6…角田さんそうなんだ。

イコ…性的関係にならない同居小説、それも、自我がうるさすぎないタイプの。

6…同居小説……自分にはあまり向かない気がするんでなかなか書く機会がないだろうな……。

イコ：角田さんの作品集『まどろむ夜の UFO』や青山七恵さんの『かけら』『窓の灯』とか

6：読んでみたい。

イコ：90年代後半から00年代前半にかけて、尾崎翠に近いタイプの同居小説は多く書かれていたように思います。主に女性作家によって。なんでこんなばかり読んでいるんやろ、おれ、って思ってたなあ^W

6：尾崎翠……あまり意識できていませんでしたが今回の読書会でリスペクトしました！

男にも乙女心というのはある気がします。あれ、何かやばいことを言ってるのかもしれないけどイコさんの心にもあるんですよ、乙女心が。

イコ：ありますね！

6：あるある。

あんな…あるある！

イコ：少女漫画が漫画棚の半分くらい占めてますしね。この男の子イイナーって思いながら読んでる。

あんな…逆に女の方が現実的だったりするのかも（笑）

イコ：いやあ、でもでも、このごろ「進撃の巨人」で妄想をたくましくしている女の

人たちを見てみると、その幸せな気持ちのまま、どこまでも飛び立っていかせてくれとほほえましい気持ちになりますよ。

6: 「こおろぎ嬢」とかすごい共感するんですよ「厭人的性癖に陥りやすいものである！逃避人種である！」とかいう文章がでてきて「おれだ……」って思いました……。

あんな…進撃の巨人てそんなような話なのか……。

イコ: pixiv 大繁盛で w

あんな…最初本当に野球の巨人が快進撃かと思っていたんですよ、わたし w w

イコ: w w w

6: 巨人快進撃……。

イコ: 尾崎翠は作品数が少ないので、その気になれば、すぐに網羅できそうですね。

6: ちくま文庫だけでもかなり読めますよね。

あんな: 持っているのに全然読めてないなあ。

イコ: アンナ・カレーニナに疲れたら読もうかな。

6: 凄く短いのに濃い世界観ですよ、短編。

イコ: 楽しみです。

6: そろそろお開きになりますか？

イコ…はい。

6…面白かったです。現代の若者が読んでもこれほどまでに共感を覚える文章とは素晴らしい！

イコ…いい作品でした。

6…みなさまありがとうございます。

あんな…お疲れ様でした！

イコ…お疲れさまでしたー。



イ子の部屋 (第1回)

*収録直前

イコ.. 本日二十一時から始まりますイ子の部屋、第一回の観覧席には神崎さん、6さん。ゲストはうさぎさんです。

イコ.. どうぞみなさまよろしくお願ひしますね。

6.. お願ひします。

神崎.. イ子とは誰なのだろうか。よろしくです。

イコ.. イ子は、イコのパソコンを乗っ取り、自由に書き散らす予定です。

6.. どきどきするなあ。

イコ.. 観覧席の方から野次を飛ばしてもいいそうですよ。

6.. うす！

イコ.. ではしばしお待ちを……。

神崎: now loading...

うさぎ.. こんばんは、よろしくお願ひします。

イコ.. こんばんは、イ子はお化粧を直しています。

6.. お化粧しなくてもチャットなんだし(笑)

イコ.. そういうメタ的なツッコミは大歓迎だそうです(笑)

*

♪ルールル、ルルルルールル、♪

6..このテーマソングはっ。

イ子..さて今晚から始まりますイ子の部屋、司会わたくしイ子です。よろしくお願
いします。

イ子..観覧席にはお二人の方が来てくださっています。6さん、神崎さん、今日は楽
しんでいってください。

イ子..そして記念すべき第一回のゲストはうさぎさんです。うさぎさん、よろしくお
願いしますね。

うさぎ..よろしくお願います。

*

イ子..とつぜんですがうさぎさん、**twitter** 文芸部に入られて、どれくらいになります
か。

うさぎ..うーん、半年以上は経っていると思います。九ヶ月くらいかな？

イ子..もうそんなに経つんですね。

うさぎ..はい、自分でも今驚きました（笑）

イ子：その間に、うさぎさんは二作の小説、一作のシナリオ、一本のエッセイを發表している。（この収録の後、うさぎさんは十月時点の最新号である『Li+tweet』秋号にも、小説「ファイナルファンタジー」を投稿しています）これはなかなかいいペースじゃないかと思うんですけれども。

うさぎ：そうですね。自分でもけっこう早いペースだと思います。

イ子：わたくしうさぎさんの精力的な活動の根っこがどこにあるのか気になりました、第一回のゲストに指名させていただいたわけでございます。

うさぎ：ありがとうございます。

イ子：まあさっそくわたくしの言葉づかいがあやふやなのは置いておいてですね（笑）さっそくうさぎさんにうかがってまいります。うさぎさん、わたくしの記憶違いだったらいけないんですけれど、シナリオをTBS文に出されたのは、うさぎさんが初めてじゃないでしょうか。

うさぎ：あー、そうかもしれないですね。

イ子：小説書きの多い twitter 文芸部で、シナリオ。どんな思いがあったんでしょうか。

うさぎ：夏号のテーマが「君とハナシがしたい」で、会話に関することでした。自分は演劇をやったり、演劇用のシナリオを書いたりしていたので、会話劇を選んでみま

した。

イ子：なるほど、シナリオだと、会話重視になりますものね。

うさぎ：はい、それにイ子さんが先ほどおっしゃったように、シナリオや戯曲が投稿されたことがないので、投稿してみようと思いました。

神崎：発想がおもしろい。

イ子：「彩子な夢」は『Litweet』の夏号に載っています。ですがこれは、実は昔の作品だとか。

うさぎ：そうですね。これは主人公彩子の年齢のときに書きました。二十六歳の頃です。

イ子：なるほど、作品を読ませていただいた上でそのお話をうかがうと、作品に等身大の思いがあらわれているようにも思います。

うさぎ：実はこの作品にはネガティブな思いしなくて、当時の自分の周りにいた演劇人への見方みたいなものが入っています。それと、書こうとした動機は、自分が悪夢を見たからという短絡的なものです。

イ子：なるほど、周囲へのネガティブな思いや、悪夢が、作品をつくる原動力になったと。それは今でもそうなのでしょうか？

うさぎ：うーん、それは、今はないですね。今は、興味をもった事象や人物などが中心です。

イ子：変わっていったわけですね。そのあたりも興味深い話ですので、くわしくうかがってみたいと思います。

うさぎ：はい。

イ子：では順を追ってみたいんですけど、うさぎさんの創作のきっかけはなんですか？

うさぎ：高校の時にテストの裏に当時やっていたコント番組のパロディを書いていたのが初めてのものになります。

イ子：パロディですか。

うさぎ：はい、「笑う犬の冒険」の中の、「小須田部長」というコントです。

イ子：ああ、覚えています。イ子も好きでした。

うさぎ：あれは課長が理不尽に転勤をして世界の僻地へ飛ばされるとい話でした。うさぎ：それを自分なりに次回はどこに飛ばされるだろうと考えてました。

イ子：ちなみにどこに飛ばしたんですか？ 小須田部長を。

うさぎ：エベレストですね。そしたら当たってしまいました、当時は嬉しかったですね。

イ子：当たったんですか！ それはすごいですね。

うさぎ：イ子さんはテストの裏には何か書かなかったんですか？

イ子… わたくしはテストの裏にゾウリムシを描いておりました。

うさぎ… それはそれですごいですね（笑）

イ子… リアルを追求していました。でもテストなのですぐに回収されてしまい、誰にもリアルだね、上手だねと褒めてもらえなかったんです（笑）

うさぎ… 先生にも？

イ子… 先生にはゾウリムシじゃなくてニガムシをかみつぶしたような顔をされました…。

うさぎ… 残念！（笑）

イ子… 実に残念なわたくしの学生時代でしたが、そうですね、パロディがうさぎさんの原点にあるんですね。

うさぎ… はい、そうですね。

イ子… テストの裏というと、即興性も試されますから、うさぎさんの特徴のひとつである、演劇にもつながるように思っています。大学生の頃は演劇をされていたんですね。

うさぎ… 大学に浪人して入った二十歳の頃から演劇をやっていて、お遊びで戯曲を作っていました。

イ子… 大学の演劇部か何かですか。

うさぎ…高校演劇をやっていた友達に紹介されて、新しく旗揚げする学生劇団に入りました。

イ子…学生劇団ですか、わたくし、旗揚げって言葉に、なんか勇ましいものを感じます。

うさぎ…確かにパワーを感じますね（笑）

イ子…実際にパワーのある劇団だった？

うさぎ…当時は、若さという点ではパワーはあつたし、向こう見ずな感じもあつて面白かったですよ。

イ子…そこでシナリオ担当だったのですか？

うさぎ…いえ、役者と小道具と制作とかです。まったく、脚本を書くということには携わっていないです（笑）

イ子…でも色々やっておられたんですね。一方で役者、一方で小道具（笑）

うさぎ…人が少なかったし、予算もなかったからですね。

イ子…なるほど、それでその劇団で演劇にかかわるようになって、ご自分でも戯曲を書かれるようになった。

うさぎ…実際には公演と公演の間に、大学の授業の暇つぶしで最初は書いていました。

イ子…パロディから戯曲へ。

うさぎ：はい、パロディは今でも考え方の一つです。

イ子：「彩子な夢」では、ネガティブなものや悪夢が動機となったとおっしゃっていましたが、やはりそういうものが、うさぎさんを戯曲に向かわせていたんでしょうか？

うさぎ：ネガティブはどうだろうなあ（笑）

イ子：それでもないんですか。

うさぎ：ネガティブでパロディなのが、twi 文の作品にあります。「あまりある自信」がそうかもしれないですね。

イ子：『Ji-tweet』創刊号に載っていますね。これはいつごろ書かれたものですか。

うさぎ：それを書いたのは入部してからの二ヶ月くらいです。

イ子：では比較的最近になりますね。それまではずっと戯曲を書いてこられたんですか。

うさぎ：いえ、「彩子な夢」に登場する劇中劇のロリコン男の話を、途中までですが小説で書いていました。

イ子：演劇と小説ってけっこう親和性が高いとわたくしは思っています、演劇の方が、小説に参入されるパターンは、とても多いです。

うさぎ：そうですね。

イ子：本谷有希子さんや、岡田利規さん、山下澄人さんなど、たくさんいます。うさぎさんが演劇界から出て、小説に向かわれるようになったきっかけを教えてくださいませんか。

うさぎ：はい。演劇や映像をやるには人がたくさんいないといけません、自分がそれを束ねられるかと言ったら自信がありませんでした。でも小説なら、自分の好きなものを好きなように好きな人で表現できると思って始めました。

イ子：なるほど！ たしかに小説には、そういうところがありますね。

うさぎ：作、演出、出演、美術などなど全部自分で決められるところが自分にとって良かったですね。

イ子：シナリオはたしかに、設定を決めることはできるけれども、描写は外に任せるとしかありませんからね。

うさぎ：はい、自分がカメラマンになって、自分で好きな描写ができますからね。

イ子：よく、漫画家になりたいけれど絵が描けないから小説を書くんだとおっしゃる方がいて、そういう方の動機に対して、わたくしは消極的なものを感じることはあるんですけど、うさぎさんの場合は、自分のやりたいことが実現できる形式は何か、という風に考えた上で、小説に飛びこまれたんだというのが分かりました。

うさぎ：そうですね。自分の表現方法を模索して出した結果の、小説ですね。

イ子…小説を書く人も、何も初めから小説しかないといい顔をしなくてもいいんじゃないかと思うことがあります。自分がやりたいことを考えた上で「小説」を選ぶという方が、わたくし自然じゃないかと思えます。

*

イ子…さてうさぎさんは、学生時代からコントのパロディ、戯曲、小説と、色々なものを書いて来られた。その内側には、やりたいことを表現しようという意識があったんだと思いますけれど、

うさぎ…はい。

イ子…単刀直入にうかがって、どういうものを書いていかれたと思うんですか？
うさぎ…ものすごい理想なんです、今までにない構造や構成をしているものを書きたいです。そのために、今は色々な小説を書いて練習したいです。

イ子…今までにない構造の小説ですか。それはたしかに、ものすごい。

うさぎ…だから、「文学」と呼ばれなくても、エンタメでもなんでもいいから、新しいものを作りたいですね。

イ子…ちょうど秋号の特集「新しい文学へおかって」にも添いますねえ。

うさぎ…はい。

*

イ子…わたくし先ほどまでのお話と、うさぎさんの作品を拝読して、思ったことがあるのですけれど、聞いてくださいますか？

うさぎ…はい。

イ子…これまで読ませてもらったうさぎさんの作品の根底には、意図的な「ずらし」があると思うのです。

イ子…たとえば「彩子な夢」(夏号)ですが、これは二十六歳の彩子が、現実と夢の葛藤に悩むというだけなら、すごくシンプルな話なんです。けれどわざと「夢」パートをもってきて、なんだかごちゃごちゃで、分かりづらいものにしてしまってますね。

夢パートも現実パートと、差異のほとんど見ええないような感じで、現実らしく語られていくんです。会話だから、とくに差異が見えづらくて、これは夢？ 現実？ と何度も確認させられる。わたくし、そうして読ませていただいているうちに、これは単に彩子が悩んでいる、というだけじゃないんじゃないかしら、と思ったんです。一見シンプルな構造の、「裂け目」を意識させられたんですね。

それに、タイトルがとくにずれていると思います。なんで「彩子の夢」じゃなくて、「彩子な夢」なのか。すわりのいい「の」じゃなくて、居心地の悪い「な」をつけるのは、正直、すごいセンスだと、わたくし思います。

創刊号の「あまりある自信」。これもタイトルがズレていますね。「ありあまる自信」なのか「あまりある自信」なのか、ちっとも覚えられないですし、読んでいてもわけが分からない（笑）
うさぎ…なるほど。

イ子…それに、ひとりぼっちの主人公が、ひとりでいるのがいい！ って公言するだけなら、分かりやすすぎる小説なのに、映画の中の人物が現実に入ってきて、主人公の現実をかき乱して去るといふ。前半のしっかりした筆致に比べ、後半はずいぶん雑然としている。致命的なずれが、語りのレベルで起きているように思えます。
うさぎ…はい。

イ子…「ストレンジデイズ」（二月号）もそうですね。なんだか素朴でありふれた野球のシーンから始まる小説が、どんどん逸脱していく。一ページ先がまったく予想できない。読み終わった後には、一体どういう小説だったのか、分からなくなってしまう。これは既存の構造、分かりやすい筋立てをもった物語への抵抗だと思えます。
うさぎ…なるほど。

イ子…素直で読みやすい文章がまた、違和感をもたせるんですよね。わたくし、これは作者の意図なのか、天然なのか（失礼！）、分からなくなってしまうことがたびたびでした（笑）でも今日、ここでお話を聞き、うさぎ作品の「ずれ」は、うさぎさん

流のパロディだと解釈できるように思いました。「あまりある自信」に梶井基二郎の「檸檬」を意識した部分が出るのは、パロディとして分かりやすい例ですが、タイトルもパロディ的な笑いを含んでいるように思うんです。だって「あまりある自信」と「ありあまる自信」がどっちか分からなくなるなんて、なんかそんなことにこだわってしまう自分が滑稽に見えて、笑えてくるんです。そんな脱力系の笑いを含んだタイトルがあるだけで、作品が、ある種の真剣さを失ってしまう。だってひとりぼっちの主人公だって、考えてみれば、ありふれた存在ですよ。そんなありふれた存在が、いかにも真剣にしている様子を、笑いながら眺められるような思いがしてくるんです。言っておきますけれど、「彩子な夢」だって、相当変なタイトルですからね（笑）この語感をとらえるだけで、脱力しそう（笑）うさぎさんは、その「変」な感じを、巧みに、巧まざる感じで、しのびこませていける作家なんだな、と、わたくしは思うんです。

うさぎ…ありがとうございます。

*

神崎…「胡蝶の夢」……違うけど。

イ子…胡蝶の夢は連想しましたよ、わたくしも。でも「胡蝶の夢」も「彩子な夢」の変さにはかなわないですよ。

うさぎ.. どうでしょうね。「彩子な夢」は、ものすごく大好きなんですよね。

イ子.. タイトルのことですか。「彩子な夢」は「彩子な夢」でいいと思いますよ（笑）
うさぎ.. タイトルにも内容にも、自分なりのルールがあります。

イ子.. どのようなルールでしょうか。差し支えなければ。

うさぎ.. ベタを徹底的に嫌うということだと思います。それがイ子さんの言った「物語への抵抗」という言葉だと思いました。

イ子.. なるほど。「ストレンヂデイズ」というならふつうですけど、あえて「ストレンヂデイズ」と呼ぶ、そういう感じでしょうか。

うさぎ.. そうですね。

イ子.. しかしベタを嫌うという道は、いばらなのではないかと思います。苦勞されませんか？

うさぎ.. それが、ストレートに書いてるつもりでも、だんだんずれてしまってますよね。

イ子.. ずれは無意識的にも発生してしまうんですか。

うさぎ.. 自分の中では、まっすぐに書いたのが「ストレンヂデイズ」です。

イ子.. ひたすらまっすぐなルールからの脱線を目指しておられるように思いましたが（笑）、なるほど、天性のずれですか。わたくしうらやましく思います（笑）

うさぎ…この作品は、ドラゴンクエストのようなロールプレイングゲームだと考えて書きました。

イ子…というところ？

うさぎ…ミズホII姫を助けに行く、ありふれたテレビゲームのような展開で書いていました。

イ子…そうですね、テレビゲーム！　　そういえばドラゴンクエストのようなゲームは、お約束があってみんな了解しているから気にしないけれども、村人が何度も同じことを喋ったり、モンスターがお金を落としたりと、現実からは考えられないような「ずれ」がたくさんありますね。

うさぎ…そうですね。姫が奪われて、ボスが出てきて、ダンジョンにおかかって、ボスを倒すという構想でした。

イ子…その発想からして、ずれていますね（笑）それを現代劇に転用しようと考えてること自体が、やはり「ずれ」であり、うさぎさん流の「パロディ」なのだと思います。うさぎ…そうかもしれないですね。物語の最後は、1が終わって2に続くみたいな感じですね。

イコ…ドラゴンクエストですからね（笑）シリーズが果てもなく続く（笑）うさぎ…実際、書きかけですが続編はあります。

イコ： そうした目でとらえると、またうさぎさんの作品が広がってくるように思いますが。続編もぜひ twitter 文芸部に！

うさぎ： はい、書けたら出しますよー。

*

イ子： ここまでのお話で、うさぎさんの作品や創作の根っこが、少しずつつかめてきたように思います。

うさぎ： そうですか？（笑）

イ子： あれ、わたくし、思いこんでるだけかしら（笑）

うさぎ： 自分が全部しゃべってないだけかも（笑）

イ子： まあ「イ子」自体思いこみでできてるような生き物ですので、いいということにしてください（笑）それにまあ、一度にぜんぶ聞いてしまえるような話題ではないですから（笑）

うさぎ： そうですね。

イ子： 最後に、うさぎさんの小説の書き方についてうかがいたいことがあるんですけど、よろしいですか。

うさぎ： はい。

イ子： うさぎさんは、ひとつの小説を完成させるまでに、どのような手順を踏んでお

られるんですか。

うさぎ①最初は書きたいことをノートに羅列します。②そこから話としてどういう順番がいいかとかプロットを練ります。③プロットが頭から終わりまで書いたら、パソコンに自分の考えたことを書き込んでいきます。④書いているときは、思いついたことをなるべく取り入れます。⑤書き上がる時期にもよりますが、時間があるなら、作品からなるべく遠ざかるようにしてから推敲します。

うさぎ②ざつとですが、こんな感じです。

神崎③おもしろい。

うさぎ④自分の考えていることを書き込んでいくというのは、プロットを書いているときに浮かんでいる文章を、どんどん書いていくということです。

イ子⑤浮かんできた文章を、つなげていかれる感じなんですね。

うさぎ⑥文章だけでなくて、頭の中にある風景や設定などをつなげています。

イ子⑦なるほど、しっかりした手順を踏んでおられることが分かりました。

うさぎ⑧はい。

イ子⑨わたくしも最近、プロットの大事さが身にしみてわかるようになりました。もう行き当たりばったりは無理やなあ、あかんなあ、ほんま、と（笑）

うさぎ⑩自分もイ子さんの年ではプロットはよくわかりませんでした。「彩子な夢」に

プロットはありませんでした。

イ子：逆に磯崎憲一郎さんのように、一文目を書いてから二文目を考えるというよう
な方もおられて、びっくりしてしまっただけですけど、そんなの簡単にできると思っ
たら、いけませんねえ、ほんまに。

うさぎ：へー、そういう人もいるんですね。

イ子：ええ、「プロット」というと、いわゆる「純文学」の人は抵抗を示されることが
多いようですけれど、実際、創作ノートという形で、自分の書きたい小説のことをか
なり詳細に記述したり（保坂和志とか）、決定稿になるまで何度も書き直したり（鹿
島田真希とか）、作品が世に出てなお書き直したり（井伏鱒二とか）する人がいるく
らいですから、やっぱり自分の書きたいことをノートなどに書き出していく作業とい
うのは、大切なんじゃないかと思う次第です。

うさぎ：そうですね、自分の書きたいことをメモしていくのは大事ですね。記録は大
事ですね。とくに紙に書いてあるやつは。数ヶ月や一年とか経ってみた時に懐かし
くなりますし、あたたかい気持ちになります。

イ子：へえ、こんなこと考えてたんだあ、って（笑）

うさぎ：そうですね。

イ子：twitterとかmixiの日記とかも見返すと懐かしくなりますね（笑）

うさぎ… ネットもあつたら便利ですね。

イ子… はい、そのときそのとき思ったことを記録したり、発信したりするのは、何か自分にかえてくるか分からない、大事にしていきたいですね。

うさぎ… ですね。

イ子… ではここでちょうど二時間が経ちました。語り足りないところもありますが、このあたりで今日のお話を終わりにしたいと思います。

うさぎ… ありがとうございます。

イ子… 本日のゲストはうさぎさんでした。観覧のお二人も、どうもありがとうございます。ました。

うさぎ… ありがとうございます。楽しかったです。

イ子… こちらこそ。ありがとうございます。(パチパチパチパチ)

♪ルルルル、ルルルルルル、♪

* 楽屋トーク

イコ… おつかれさまでしたー。

うさぎ… お疲れさまです。

イコ… イ子は眠りにつきました(笑)

うさぎ… あーあ(笑)

神崎..ねたのかイ子さん（笑）

イコ..夜遅いですから。

うさぎ..早っ！（このとき二十三時）

イコ..いやあ、今日は楽しかったです。

うさぎ..自分も楽しかったです。

神崎..レポート書きながら眺めてました。

イコ..もっともっと聞きたかったけど、時間がすぐ来るな。

うさぎ..時間配分は難しいかもしれないですね。

神崎..チャットだとしても伝達が遅うなってしまいますね。

イコ..本家でも、三十分でどうでもいいようなことしかゲストに語らせずに終わってしまう会がいっぱいありますからね。

神崎..あれは一種の芸ですね（笑）

イコ..あそこまでずれてくると逆におもしろいですけどね（笑）でもまあ、途中からほとんどキャラ忘れて楽しく喋ってました（笑）楽しく喋れたし、ある程度聞きたいことが聞けたからいいかなって思っています。

うさぎ..イコさんが聞きたいこと聞いているなあー感はあるよかったです（笑）

イコ..お付き合いありがとうございます（笑）あとうさぎさんの作品について、それ

なりにまとまったことを話せたのでよかったです。

うさぎ..それはありがとうございます。自分でも普段あんまり考えることがないから、お話聞けて嬉しいです。

イコ..今日お話を聞いて、うさぎさんの次作がさらに楽しみになりました。

うさぎ..次回作は今月中に書けないと、スケジュール的に厳しいですね。昨日友人に読んでもらって、内容には自信が持てました。

イコ..いやほんまに、次も楽しみにしています、ということ、自分もそろそろ寝ることになります！

神崎..はい、おやすみなさい。

うさぎ..わかりました、お疲れさまです。

イコ..おやすみなさい！。

*



イ子の部屋 (第2回)

♪ルールル、ルルルルール、♪

イ子：はい、みなさんこんばんは。イ子の部屋の時間です。第二回目。ゲストには緑川さんをお呼びしています。緑川さん、よろしくお願ひします。

緑川：はい、よろしくお願ひします。

イ子：今回、うさぎさんが観覧席におられますが、うさぎさんには、通話の様子を、チャットに残してもらっています。よろしくお願ひします。

うさぎ：はい。

イ子：では早速始めていきたいと思いますけれど。

緑川：事前にイ子さんからお話をいただいていたのは、私の創作遍歴と、文学観についてでしたね。

イ子：はい、そのあたりをうかがえたら、とっています。この間ふと思ったんですけど、緑川さんには、これまでわたくし、あまりそういうお話をうかがうことがありませんでした。

緑川：そうですね、こちらからあえてお話することもなかったかな。

イ子：よい機会と思います。よろしくお願ひします。

*

イ子..ではまず緑川さんの創作遍歴についてうかがいたいのですけれど、緑川さんは、いつごろから創作を始められたのですか？

緑川..最初は読むだけでした。小説を書き始めたのは、二十歳を過ぎてからになります。十代から二十代にかけては、詩を書いていましたね。

イ子..小説を書き始めるよりも、詩を書き始める方が早かったですね。

緑川..はい。

イ子..本は、どのようなものが好きだったんですか？

緑川..ええと、以前からドストエフスキーや芥川龍之介などが好きで、読んでいました。でももっとさかのぼると、学校で中島敦を読んだのが、「文学」に入ったきっかけかもしれません。そこから太宰治へ行きました。

イ子..緑川さんはわたくし、日本文学も、海外文学も読んでおられる印象をもっています。

緑川..外文はフォークナー、ヘミングウェイなど。本屋で手に入りやすい作品から入りました。

*

イ子..さきほど詩を書かれていたとおっしゃっていました。今の緑川さんのスタイルからは、少し意外の感があります。

緑川.. はい、もともとは詩なんですよ。

イ子.. その頃書かれたものは、誰かに読んでもらっていたんですか？

緑川.. そうですね、けっこう評価されていましたよ。精神科の先生にも、詩を読んでもらっていました。

イ子.. どういう思いがあって、詩を書いておられたんですか。

緑川.. 思いというか、書いているうちは、「必然」を感じながらやっていました。でも書いてからは、勢いに任せてしまっただけで、推敲も熱心にやるようにしていません。

イ子.. そんな緑川さんが、詩から小説にうつっていったのは、何かきっかけがあったんですか。

緑川.. 就職がきっかけですかね。いつものように詩を書いていたら、物語が出てきました。ここを膨らませて書いていったら、物語になるぞ、と。そうやって書いてみたら、もう詩じゃなくて、小説らしいものになった。

イ子.. なるほど、当時はどれくらい書いておられたんですか。緑川さんといえば、短編のイメージがありますが、やはり短編を？

緑川.. はい、十数年前...書き始めた二十代のころは、掌編が中心でした。十枚程度のもので。でもとにかく一日でたくさん量を書いていましたね。詩は今、どこに

も載せていませんが、掌編は後でネットを使うようになってから、いくつか発表しています。昔は手書きでしたが、パソコンを使うようになってからは、データをフロッピーやCDに残すようにしました。

イ子.. そうですか。わたくし、緑川さんの小説はいくつか読ませていただいていますけれど、緑川さんの詩は読ませていただいたことがありません。詩は最近も書いておられるんですか？

緑川.. 今は書きません。小説を書くようになってから、だんだんと詩が書けなくなってきたんですよ。

イ子.. ふむふむ。うかがってみると、緑川さんは二十年以上の創作歴をおもちのようで驚きます。作品のストックがかなりあるんじゃないかと思いますが、ご自分で読み返されることはありますか？

緑川.. あります。

イ子.. どうですか、当時のものを読み返してみられて。

緑川.. いいですね。今は絶対言えないようなことを書いていて。当時だから言えたことが、たくさんあるんです。そういうのを思い返しながら読みます。

イ子.. わたくしは緑川さんほどの創作歴をもっていませんが、分かりますよ。ときどき mixi や twitter のつぶやきや、昔書いた作品を読み返して、「ああ、こんなこと考

えてたなあ」と、にやにやすることが多いですから（笑）緑川さんは、公募はされなかったんですか。

緑川…考えたこともありますが、当時十枚程度の掌編の応募先って、あまりなかったんですよ。

イ子…なるほど。

*

イ子…それから十年以上、ずっと小説を書いてこられたんですか。

緑川…いえ、空白の時期があるんです。だんだん仕事が忙しくなってきて。

イ子…だんだん責任が重くなってくるわけですね。

緑川…そうですね、責任が重くなって、仕事の量もふえて。私の仕事は、土曜日も日曜日も、あまり関係のない仕事ですから。

イ子…その空白の時期は、小説を書けなかったと。読むことは続けておられたんですか。

緑川…それも実は難しかった（笑）小説は読んだり、読まなかったりでしたね。

イ子…仕事で遅く帰ってきて、疲れ果てているのに、それから文字に集中するのって、本当に難しいことだとわたくしも思います。その空白の時期をやり過ぎられて、また復帰されたのは、何かきっかけが？

緑川…読む方の復帰は、吉田修一の「熱帯魚」でした。こんな生活をずっと続けていたらいけない、と一念発起で読み出した現代小説でした。この作品のおかげで、ほとんど興味を失っていた現代文学にまた注目したくなりました。

高橋源一郎や、小林恭二もおもしろかったですね。海外文学では、前とあまり変わりませんが、やはり、カフカ、ドストエフスキー、ゴーゴリなどにひきつけられまして、読んでいました。

イ子…緑川さんはよくドストエフスキーの名前を挙げられますね。緑川さんはやはり、ドストエフスキーに影響を受けたところがあるのでしょうか。

緑川…はい、ドストエフスキーは、四大長編も好きなんですけど、いちばん好きで影響を受けたのは「死の家の記録」です。

イ子…それはどういうところからですか？

緑川…これはドストエフスキーの獄中体験記のような作品で、舞台は閉鎖空間なんです。そういう場所で、主人公は普通の生活を送っているんです。いや、もちろん普通じゃないんですけど。語り手や視点が、私に合うように思いました。

イ子…緑川さんに合うとは？

緑川…「死の家の記録」は、主人公が獄中で、さまざまな人間を観察しているんです。

けれど、本人もその一員として、特殊な空間の中に生活しているんです。

イ子：ああ、なるほど。そのお話をうかがって、緑川さんの諸作にも結びつくようなところがあるように思いました。『月刊 twitter 文芸部』の二〇一二年四月号に、緑川さんは「僕と職場仲間の話」を投稿されていますが、これもまさしく、ブラック企業という現代特有の特殊な状況にいる人々のお話でした。この作品で主人公「僕」は、職場仲間を観察している。けれど「僕」自身も異常な状況を、普通に過ごしている一人なんです。

緑川：たしかにそういうところがあるかもしれませんが。あと私は、カフカの短編集にも惹かれるんです。本野亨一訳の「ある流刑地の話」が好きで。

イ子：カフカをどういう風に読んでおられるんですか。

緑川：よくカフカは、「実存」や「不条理」という言葉で語られますが、私はそういうふうには読みません。ドストエフスキーの大審問官（「カラマーゾフの兄弟」）も同じです。ユーモアの一つとして読んでいて、それは、人の見方、ものの見方につながると思うんです。たとえるなら、一つボタンが掛け違ってしまうことで、世界の様相がずれていくというような。

イ子：なるほど、カフカ作品は、行動と結論が結びつかないですよね。こうなったから、こうなる、という因果が、致命的にずれている。

緑川…はい、そういうのって、現代文学につながってきているものだと思います。原因と結果が、ボタンを掛け違えたみたいになぜか。そういう状況が、私たちの実生活にも多いんじゃないかな、と。

イ子…だから「僕と職場仲間の話」がリアルなのか！ あれ、人間が口から火を吹いたり、とつぜん「僕」がパートの主婦と濃厚なキスを始めたりするんですよね（笑）とてもおかしな話なのに（笑）、「ひよっとしてあり得るかも？」というような、妙な説得力がありました。

*

イ子…話をさかのぼって、書く方に復帰されたときのことを教えてください。

緑川…空白期間も書きたい気持ちにはあったんです。以前は若さと勢いで書けたんですが、仕事が忙しくなってきたからは、そうもいかなくなって。けれど七、八年前くらいでしょうか。それより前に比べれば、少し仕事が落ち着いて、時間が取れるようになってですね。だからまた書くことができるようになりました。

復帰後は、前ほどのペースではなく、間隔を置いて書いていました。とくに人に読んでもらうことを考えずに。今思えば、怠惰な文学青年だったと思います。一生懸命読んだり書いたりしなかったですね。

イ子…怠惰な文学青年ですか。こういうことがさっぱりと言える緑川さんは大人だなあ

と思います。それからしばらくして、ネットにハマったんですよ。

緑川.. はい、ネットゲームですね。ハマったのは、二〇〇八年ごろです。ブログを作って気楽な記事を書いていたんですが、そのネットゲームで知り合った人と日替わりで、連載のようなものを書くようになりました。

イ子.. 日替わり連載とは、二次創作のようなものですか？

緑川.. いえ、一次創作がメインでしたよ。

イ子.. ネットから創作に広がる、といえば、わたくしの友人が、高見広春の「バトルロワイヤル」の設定を借りて、オリジナルバトルロワイヤル（通称オリバト）をネットで発表していたのを思い出しました。そういうものを発表できるサイトがあるんですね。ユーザーがそれぞれ自分でクラスメイトを設定して、掲示板に、小説の形式で発表するんです。ネット時代の創作の方法だと思いました。

緑川.. そういうものがあるんですか。私の方は、その二年後、二〇〇九年から二〇一〇年にかけて、「大航海時代」というネットゲームにハマって、また日替わり連載を始めていました。「作家でごはん！」にも投稿している時期がありました。けっこういい評価をもらってましたよ。あの頃一緒に創作をしていた仲間は、どこに行ってしまったのか、ほとんど見えませんが。

イ子.. わたくしも「作家でごはん！」を利用していたことがあったので、ひよっとす

ると何度か交流があったかもしれませんね。ネットゲームや連載の方は、今もやっておられるんですか？

緑川：いえ、卒業しました。卒業のきっかけは twitter 文芸部です（笑）

イ子：なんと。twitter 文芸部がきっかけですか。

緑川：はい。mixi で、当時はまだ部員ではなかった小野寺さんを介して、当時部長をしていたイコさんとお知り合いになって。

イ子：記録をたどってみると、twitter 文芸部が始まって三年、緑川さんとイコが出会って丸二年になるようですね。直接の交流は、短編小説を書く企画（文芸企画）から始まりました。そこから、twitter 文芸部に入りたいと、緑川さんからイコに声がかかり。

緑川：はい。

イ子：わたくしは例の企画で読ませていただいた、「目覚め」（『月刊 twitter 文芸部』二〇一二年一月号に掲載）という作品がすごく好きで、一緒にやらせてもらえるのはとても嬉しく思いました。

緑川：ありがとうございます。今は停滞気味ですけどね（笑）

*

イ子：さっき少しお話ししましたが、緑川さんのひとつの特徴として、公募に意識がな

いことが挙げられると思うんです。言いかえれば、職業作家になろうという意識がない。

緑川：そうですね。私、公募に合わせたものが書けないんですよ。それにみなさんのように「文学」をやっている、という強い意識がないんです。エンタメでもなんでもいいから、面白いものを読みたいし、作りたい。

イ子：twitter 文芸部のメンバーは、創作をやっている人間としてけっこう当たり前なのかもしれないですけど、イコも含めて、プライドが高い人たちが多いと思います。けれど緑川さんには、そういうものが見られないんですよ。

緑川：はい、それはないです。

イ子：すごい割り切り方だな、と思います。小説を書いていると「自分はすごい！」「自分ならやれる」って、気負うところが出てきてしまうことの方が多んじゃないかと思うんですけれど。冷静に自己分析が出来るんでしょうか。

緑川：「俺はすごいぞ」っていう人を、ずっと見てきたからかもしれないですね。

イ子：緑川さんみたいな存在は珍しいと思います。

緑川：書き始めは、それでも自意識はありました。自分の書いたものに興奮していたこともありました。でもけっこう書いてくると、そうならなくなってくるんですよ。イ子：自分の書いたものを過大評価されないんですね。

緑川…人から感想をもらって、自己評価とは違うところで、手ごたえが得られることはありますよ。

イ子…わたくしは、どうしても自分の作品に対して、過大評価をしてしまいます。

緑川…それは、いつかは抜けます。

*

イ子…先ほどのお話をうかがって興味深く思うのは、緑川さんの作品にも、その考え方が反映されているように見えることです。緑川さんの作品を読ませてもらって思うのは、作者の思いが、あまり主張してこないということ。とくにネットのアマチュア作品に多いんですが、小説じゃなくて、作者を読んでいるように感じられる作品があります。「おれを見て！」と自意識が主張しているんです。けれど緑川作品では、そういう主張がなく、作品の中に入りやすい。登場人物は、作者の考えではなく、その人物なりの考え方で自由に動いているように見えます。

緑川…なるほど。

*

イ子…緑川さんは今後、どういうものを書いていきたいですか？

緑川…今、それが定まっていない状態なんですけど、とにかく「すごい」ものを書きたいですね。

イ子：すごいものとは、緑川さんにとって、どういうものでしょうか。

緑川：普通の文章で書かれた普通の物語だけど、読んだ人の心に何かひっかかるものがあるような作品です。

イ子：なるほど。緑川さんは twitter 文芸部のホームページの部員名簿に、こう書いておられます。

『執筆にあたっては読みやすく、分かりやすく、面白い作品が目標です。あ、ついでに少し独自の隠し味を入れたりして。読むことも好きです。ここで、お互いに刺激を与え合えればと思います。』

同じことを言っておられるように思います。

緑川：そうですね。

イ子：緑川さんは先ほど、いわゆる「純文学」や「エンタメ」などジャンルのなものにこだわりはない、と言っておられました。ここでもやはり、そういう定義から離れて、感覚的かつ、読み手にしか決められない「面白い」という言葉を使っておられます。何かご自分の中に、自分はこういうスタンスだ、○○はこうあるべきだ、と言いきってしまいたくないようなところがあるんでしょうか。

緑川：あります。

イ子：何かに縛られたくないというような？

緑川.. はい、動物的な感覚で書いているのかも。

イ子.. 「反〇〇」や「〇〇主義」というような言葉が似合わないんですね。定義づけられることから自由になろうとしておられるように見えます。作風も「エンタメ」とも「純文学」ともいえないように思えます。じゃあ「中間小説」かというところ、うまく言えませんが、それともちよつと違うんですね。定義ができない。素晴らしいことなんじゃないかと思えます。似た例を挙げると、「爪と目」で芥川賞を獲った藤野可織の作品は、純文学系の雑誌に載っていながら、ホラーの要素を含んでいる。彼女の作品は一応「純文学」と呼ばれています。まだ何とも名づけられていないような小説世界を築いているように思うんですね。

緑川.. なるほど。

*

イ子.. もう一つ思うことがあります。緑川さんの言葉は「感覚語」だということ。造語みたいなものですが。

緑川.. 感覚語ですか。

イ子.. 緑川さんの使われる言葉には、論理的なニュアンスがないんです。「感じ」に素直で、自由で、論理じゃない。

緑川.. ああ、そういうところ、あるかもしれません。小説も理詰めで考えませんし。

イ子.. プロットを考えてメモしたりもしませんか。

緑川.. とくにしません。

イ子.. 女性作家が好き、ということはありませんか？

緑川.. ああ、それは分かりません。ただ、ミステリーはダメですね。理詰めで何かを解決しようとするものには心を惹かれません。それよりは「情念」が好きです。ドストエフスキーのような。

イ子.. 部員の中には、ちゃんとお話するまで、緑川さんのこと、女性だと思っていた人がいると思うんです。わたくしも、はじめはどちらか分かりませんでした。ものの考え方や小説の書き方が、男性的というより、女性的……いえ、性別が分からない、中性的な感じに見えるんです。

緑川.. それは「作家でごはん！」でも言われました（笑）

イ子.. わたくしが実際に緑川さんとお会いしたときの衝撃は、今でも忘れられません（笑）みなさんにも実際に緑川さんと会って、それを体感してもらいたいです（笑）緑川.. そうなんですか（笑）自分では男性的とか女性的とか、あまり考えません。

イ子.. うーむ、さすが緑川さん。性別すら超越している（笑）

*

イ子.. さて、今日は緑川さんの創作遍歴や文学観について、色々うかがってきたわけ

ですが、色々と話してみても、いかがでしたか。

緑川.. そうですね、今までこういうことを誰かと話したことがなかったので、面白かったです。実は自分の過去には、今まであまり関心がありませんでした。ですがこうやって順を追って話してみることで、きちんと時系列がつながってよかったです。

イ子.. 最後に一つうかがいたいことがあります。これはイ子の部屋に来ていただいた方みなさんにお聞きしようと思っっていることなんですけれども、さしつかえなければ、緑川さんの、小説を書く順序を教えてください。

緑川.. 順序ですか。そうですね。①まず「思いつき」です。実際にあったことや夢で見たことから、小説に書きたいことがピックアップされます。②次に取り憑かれたように、そのことをずっと考えます。③ノートにメモはしません。小説は頭の中で出来上がっていきます。④文章にするときは、集中して必死に書きます。

イ子.. なるほど、書いているときは、とにかく集中されるんですね。

緑川.. そうですね。私はけっこう途中で止まった作品でも、書く期間を空けて、また書き出すことができます。あと、これは矛盾したことなのかもしれないんですけど。

イ子.. はい。

緑川.. 私、人にアドバイスするときは、プロットを書け、と言うんですよ（笑）

イ子.. そうなんですか（笑）

緑川…ええ、ちゃんと考えて決めてから書きなさいって。

イ子…でもその「決める」という作業を、緑川さんは頭の中で行っておられるわけですね。すごいですね。

わたくしも「決める」ことは大事だと思います。けれど最終的には、プロットからはみ出てしまうようなものが、いい作品になっていくんじゃないかと思うんですね。人間が一度に頭の中で想像できることには限界がある。自分を裏切っていくのも大切なんじゃないでしょうか。緑川さんが、未完成の作品を中断させてから、時間を空けてまた書き始められるのは、当初の自分になかった部分が、加わっているからだと思いますね。

緑川…なるほど。

イ子…ちなみに、今後のご予定は？

緑川…最近はずいぶん長いものを書けるようになってきたかもしれませんが、長編向けの文体、短編向けの文体を模索していきたいと思っています。

イ子…楽しみにしています。ではこのあたりで、イ子の部屋を終わりたいと思います。

緑川さん、観覧席のうさぎさん、どうもありがとうございます。

緑川…ありがとうございます。

うさぎ…ありがとうございます。

♪
ル
ー
ル
ル、
ル
ル
ル
ル
ー
ル
ル、
♪

(文責:イコ)

記録

記 録

記録

七月七日 深街ゆかさんが入部しました。

九月十六日 ちか千代さんが退部しました。

■文学ナイト第1弾「共読会」

日時：七月四日（木）二十一時～二十三時

ホスト：6

参加者：イコ、日居

作品：横光利一「春は馬車に乗って」「琵琶湖」（青空文庫）

*共読会とは……みんなでskypeに集まり、ネット上で読める短い作品を取り上げて、その場で一緒に読んでいき、すぐに感想を話すというもの。今回の作品は、みんなで交替で音読をしていきたいと思います。

■七月定例会

日時：七月六日（土）二十一時～

記録

ホスト：日居

参加者：イコ、うさぎ

内容：

- ・夏号の発刊
- ・合評会などの日程調整
- ・秋号の体制打ち合わせ

■夏号掲載作品の合評会

ホスト：イコ

日時：七月二十日（土）二十一時～

歌集「セキレイの心」イコ

「酒茶漬けの味」小野寺

「力強く暴力的な愚か者によるフォリア」日居

参加者：る、小野寺、6（文章）、ふかまち、緑川（文章かも）、あんな、うさぎ、

日居（遅刻、もしくは文章）

◆九月定例会 &Li-tweet 校正割り振り会議

日時：九月十五日（日）二十二時～

ホスト：イコ

内容：①秋号について（校正割り振り、目次作成、原稿配布）

②時間があれば、冬号や、別冊についても話したいです。

参加者：イコ、小野寺、6（遅刻）、うさぎ、ふかまち、加津也、あんな

【Li-tweet 発刊までの流れ】

九月十五日（日）二十時（原稿メ切）

↓同日二十二時（校正割り振り、目次作成）

↓十六～三十日（一次校正期間、三十日二十時メ切）

↓十月一日～六日（二次校正期間、六日二十四時メ切）

↓そのまま編集作業

↓七日中の発刊！

*不明点等あれば、イコまでお願いします。

【確認事項】

- ・原稿提出はどの期間も小野寺さんまで。
- ・一次校正期間（十六〜三十日）は、原稿の大幅変更も可。その際、作者と担当者が十分に打合せをしておくこと。
- ・二次校正期間（十月一日〜六日）は、原稿の大幅変更は不可。校正者は掲示板にて誤字脱字を指摘すること。

【校正割り振りの考え方】

- ・十五日は一次、二次ともに担当を決めます。
- ・主に出席者で割り振ります。
- ・一人あたり、一作または二作の担当となります。
- ・原稿提出者には出欠にかかわらず、校正をお願いします。
- ・都合上、欠席者へお願いすることもあります。その際は連絡します。

日時：八月十八日（日）二十時～

今回は飲み会っぽい感じの定例会にしたいと思います。

「乾杯」をするので各自飲み物を用意してください。

ホスト：る

参加者：る、イコ、緑川、小野寺、日居、深街、うさぎ、カツヤ（仮）、常磐（仮）、あんな（遅）

■「小説と詩の恍惚をめぐって」

読むこと、書くことの幸福で不幸な体験を語る会です。

※読書あるいは創作に関する事で何か質問を用意してきてください。

一人が用意した質問に、参加者全員で答えていき、そこから話をひろげていきたいと考えています。

日時：八月二十五日（日）二十時～

形式：skype チャット

ホスト：る

参加者：イコ、深街

■尾崎翠『第七官界彷徨』読書会

日時：九月八日（日）二十時〜？

形式：skype チャット

ホスト：6

参加者：あんな、深街、イコ

■イ子の部屋

*謎の人物「イ子」が部員の皆さんをお招きして、皆さんの文学観や作品について、ほとんど脱線しつつ楽しく伺っていくコーナーです。チャットルーム、**USR**、通話など、ゲストの希望に添った形で行います。

【第一回】

ゲスト：うさぎさん

日時：七月十五日（月）二十一時から二時間ほど

形式：skype チャット

*うさぎさんとイ子の会話を観覧したいという方がいらっしやいましたら、イ子のマ

ネージャー（イコ）まで、リプライください。

【第2回】

ゲスト：緑川さん

日時：八月五日（月）二十一時から二時間ほど

形式：skype チャット

編集後記

「編集後記」 6

正直に言えば、もっと色んなことがしたかったというのが編集長としての感想である。創刊号は色んな方法を試してみても、自分でもわくわくしたところがあった。しかし今回は編集に関して新しい方法を試しているような余裕がなかった。情けない話、自分の原稿を完成させるので精いっぱいだった。今回はいつも以上に、編集部をはじめとする部員の皆さんに助けってもらった。

「新しい文学へおかって」、自分ながら大げさなタイトルだったと思うが全然後悔はしていない。この無茶な企画に多くの人に関わってもらったため、書くことの勇氣は消えなかった。だから僕を含めて寄稿者は思いっきり書くことができたと思う。

部員の皆さんにはとにかく、何かを書いてほしい。書き続けてほしい。

そして読ませてほしい。俺にも、私にも読ませろ、って五月蠅い人も多いはずだし。そんなありがたい場所「twitter 文芸部」にいつまでもいてほしい。もっと沢山話して刺激しあおう。

ここで多くのことを語るのは何だか今回は控えたい。

編集後記

もっといつか語るべき機会が訪れるような気がするから。
そんな感じで筆を置く。

二〇一三年一〇月七日（月）

編集委員

崎本智（6）、る、イコ、深街ゆか

発行者

twitter 文芸部

ツイッターオフィシャルアカウント

<https://twitter.com/twibun>

ホームページ

<http://twibun.jimdo.com/>

編集後記

執筆者（五十音順）

イコ [@ikoriheeee](https://twitter.com/ikoriheeee)

うさぎ

小野寺那仁 [@onoderak](https://twitter.com/onoderak)

加津也

崎本智（6） [@SakiAllende](https://twitter.com/SakiAllende)

常磐誠 [@evagredra](https://twitter.com/evagredra)

日居月諸 [@das_unheimliche](https://twitter.com/das_unheimliche)

緑川

る [@ru_mentanpin](https://twitter.com/ru_mentanpin)

Rain坊 [@_5384393400432](https://twitter.com/_5384393400432)

深街ゆか

表紙デザイン

深街ゆか

まとめPDF作成

小野寺

本誌はホームページに掲載している「Li:tweet 四月号」をプリント用、電子書籍端末用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。© twitter bungeibu 2013

Twitter 文芸部